インフィニタスポテンシア～無限の可能性～

北欧狐

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

任務をこなしていた時に突然女神様に呼び出された白銀輝。そこで女神様にインフィニットストラトスの世界で織斑秋斗を助けて欲しいと言われる。果たして、輝は秋斗を守れるのか。

目　次

そうだ、ＩＳの世界に行こう！ ―― 1
亡国の最後と白夜の誕生 ―― 3
白夜の活動記録 ―― 7
更織家に殴り込みじゃあ～。 ―― 9
織斑秋斗誘拐事件（ポロリはないよ。） ―― 12
会社訪問と入学試験 ―― 15
入学と自己紹介と逃走中 ―― 18
剣道と決闘宣言とチャーハン ―― 24
ぶつかる青と白、消える慢心 ―― 30
黒対青、黒の実力 ―― 34
オリキャラ？何それ、う○い棒の新しい味？ ―― 39
現在公開可能な情報 ―― 45
ボーイ　ミーツ　キャット　ガール ―― 48
待ち侘びた対決と侵入者 ―― 52
白夜の黒十字最強の力 ―― 57
事情聴取と告白（転生者とモップざまぁ） ―― 61
２人の転校生（１組は末期） ―― 64
フランスの貴公子の暴露（一夏君は出ないよ？） ―― 68
突撃！隣りのデュノア社（ちゃんと潜入します） ―― 71
威風堂々と因果応報（ちょいよいネタ入ります） ―― 73
いつもとはどこか異なる白ＶＳ黒い雨（ＶＴの解決は次回だよ。）
79
覚醒（輝の過去もちょろっと） ―― 84

タッグトーナメント　決勝（２人のチームワークまじパネエ）　90
ファイナルデッド・レゾナンス（安心してください。生きてますよ。）　94
夏だ！海だ！臨海学校だ！（たぶん最後の日常回）　97
天災の贖罪と作戦会議（ギャグがないと言ったな。あれは嘘だ）　100
墜ちる白と白銀、動く愚者　105
白の復活　109
最強の再臨、圧倒　112
世界への宣戦布告　117
愚者の最後、ラストオーダー　120
決戦　125
過去　～前編～　131
過去～後編～　134
平和への分岐点　138
エピローグ　142
ホラーブレイク編
トラブルはいつも突然にｂｙ輝　大体はお前のせいｂｙ秋斗　145
Ｑ、怨霊が襲って来た時の対処法は？Ａ、拳でｂｙ秋斗　148
「安藤　死す」と言ったな。　アレは嘘だ。（究極のネタバレ）　151
このふざけた扉をぶち壊す！ｂｙ安藤（つまり原作通りです）　154

エピローグ　Worst END？ ―――― 159
エピローグ　Happy end ―――― 163
私とレゾナンスの危険な日 ―――― 168

そうだ、ＩＳの世界に行こう！

Ｎｏｓｉｄｅ

とあるビル街の真ん中。たくさんの救急車やパトカーがとまっているなか、白い髪に白いロングコート、白いズボンという全身白ずくめの少年が立っていた。

「こちら白銀輝（しろがねひかる）敵組織の鎮圧及び拘束完了。民間人の怪我人多数。救護班と犯人の護送のための班をお願いします。」

輝がヘッドセットで通信をしていると突然青白い地に黒い十字の彫刻が入った扉が現れた。

「こちら白銀輝。目の前に扉が出現。わかりました。こちらはお任せします。」

そうして輝は扉の中に入って行った。

ーーーーーーーーーーーーーー

扉の先には、白い空間と女がひとりいた。

「あんたか。俺を呼んだのは。」

「そうです。女神としてあなたに頼みがあります。」

「なんだ？」

「今からインフィニットストラトスの世界に行って主人公を守ってください。」

「どういうことだ？」

「先日天界の手違いで青年を死なせてしまいました。そのため私たちは彼を転生させることにしました。ですが彼は主人公を殺して原作のハーレムを自分のものにしようとしています。現に彼は兄として転生し、主人公に暴力をふるったりしています。私たちは直接彼を排除することはできません。どうにかして学校で同じクラスにならないようにするだけで限界です。そこで」

「そこで俺をその世界に送り込みそいつから主人公を守って原作通りに進めろと。」

「はい。引き受けていただけますか？。」

「当然だ。元々俺らはそういうの専門だからな。」

「そうですか。ありがとうございます。お礼としてあなたもＩＳを動かせるようにし、多少の原作崩壊。具体的にはヒロインを2、３人おとすぐらいはかまいません。」
「後者はどうでもいいが、前者はありがたい。それでは行くとしよう。」
「お気をつけて。」
そして、俺は目を閉じた。
ーーーーーーーーーーーー
目を開けたら空だった。
もう一度言おう。空だった。地上が遠くに見えるということは相当な高さにいるのだろう。そして耳が痛くなるほどの騒音。浮遊感。それとスゴい速さで近づく地上。その３つから導き出される現状。それは……。
「ふむ、落ちているな。」
ちなみに、パラシュートは無い。あぁ、なるほど。
「俺、死んだか？」
ズドンッ!!
その直後、建物に突っ込んだ。
「あっ、生きてた。」
そういえば、前に敵の基地に潜入するときに飛行機から飛び降りてたっけ。もちろんパラシュート無しで。
まぁ、無事着いたことだし先ずは情報収集だな。（ちなみに、その時は着地した地面がへコんだ。）

亡国の最後と白夜の誕生

あれから、情報収集をしていたら1年が過ぎた。だが、この世界の事が色々わかった。

まず、インフィニットストラトス通称ＩＳと呼ばれる物だ。ＰＩＣだのコアだの色々ややこしいが要するに空を飛んだりできる只の兵器だ。銃器や剣などを使ってスポーツ気分で扱っているがあの威力の銃器を普通に使えるだけで十分兵器だ。しかも「女性しか使えない」欠点付きときた。

次に白騎士事件と呼ばれるＩＳの開発者「篠ノ乃束が起こした事件だ。篠ノ乃博士も最初は宇宙進出のために開発したと発表したが大人たちは「子供の戯れ言だ」と言って馬鹿にした。それに怒った篠ノ乃博士が世界中の軍のコンピューターをハッキングし発表会場に向けてミサイルを発射した。それを白いＩＳ通称「白騎士」が全て破壊した。これが白騎士事件である。

最後に女尊男卑と言うふざけた社会だ。ＩＳを用いた大会「モンドグロッソ」と呼ばれる大会で日本の選手「織斑　千冬」が優勝したことで余計に広まった。自分たちはたいして強くもないくせに、「ＩＳは女性しか使えない」と言うことをいいことに「女は優れていて、男は従うべき」という勘違いが浸透している。

はっきり言って腐ってやがる。この社会態勢はぶち壊す必要がある。だからこそ、活動するための組織が必要だ。

とまぁ、ここまで長く説明しておいて今俺はどういう状況かというと。

「てめえ、何者だ!!」

銃を持ったＩＳに絶賛囲まれ中だ。

「白銀輝。この組織に用があって来た。」

「ふざけるな！お前ら、撃て!!」

まったくこっちの話を聞こうとしなかった。挙げ句のはて全方位射撃が始まった。

「実力行使は好きじゃないんだけどしょうがないか。変身(トランス)ダブルアー

ム　ブレード」
　俺は両腕を剣の様な形に変えた。
「腕が変形しただと!!」
　俺はそのまま飛んでくる弾丸をかわし、時には両腕で弾いたり斬ったりしていた。ちなみに一発も当たってない。
「あり得ねぇ……、お前人間か？」
　失礼な。これでもれっきとした人間だ。
「だったらこいつで！「やめなさい、オータム。」スコール!!」
　金髪に長髪の赤いドレスを着た女性が現れた。
「白銀君だったかしら？私たちに用があると言っていたけどなにかしら？」
「ああ、あんたたち亡国企業（ファントム・タスク）は何が目的で動いている？」
「もちろんこの腐った社会を、いいえ、この世界を変えるためよ。」
「そのために研究所を襲撃しＩＳを強奪、及び紛争に介入をしていたと？」
「ええ、研究所を襲撃したのは組織の戦力の向上、紛争に介入したのは私たちの存在を世界に知らせるためよ。」
「だが、その結果あんたらはテロリスト扱い。このままだといつか捕まり、牢獄行き最悪死刑だぞ。」
「わかっているわ。私たちがやっていることは犯罪行為。でも今の時代の人たちは腐った風潮に染まり過ぎて誰も動かない。だったら私たちが変える!!たとえ世界から恨まれようとも、世界から否定されてもこの世界を変えたいの!!邪魔をしないで!!」
「邪魔をするつもりはない。むしろ同感だ。」
「どういうことかしら？」
「そもそも俺がここに来たのはあんたたちを潰すためじゃない。話をしに来た。」
「話を？」
「そうだ。このまま動いていてもいつかは捕まる。そこでだ。新たな組織をつくり政府の依頼に応じ世界を裏から変え、いつかは世界を変えようと思う。」

「今の政府の言うことを聞くと言うの？」
「何も政府の奴等が揃って腐ってる訳ではない。政府の中にも少なからず今の世界がダメだと思っている奴もいる。ただ表だって動けないだけだ。そこで、その人の駒として俺たちが動くと言うわけだ。」
「なるほど。それは良い話だけど良いのかしら？私たちがついていっても。」
「もちろんだ。１人では限界があるからな。」
「でも、亡国はどうするの？」
「それは簡単だ。１度この建物ごと吹き飛ばす。世界は『謎の襲撃により亡国は壊滅、メンバーは消息不明』と思うだろう。と言うかそうするように政府の協力者に頼んでおいた。」
「簡単って言うけれど「それに」それに？」
「ぶっちゃけここに来るまでに爆弾のセットを済ませて起動もしてある。」
「……えっ？」
　その場にいる全員が固まった。
「たぶんあと５、６分で爆発する。」
「お前ら！各自最低限の必要な物を持って退避!!」
　オータムとやらの命令とともに全員が動き出した。
「ＩＳを装備してるやつは限界まで武器を持て！くわえてでも持て！お前たちはメンテ工具！お前たちはメモカとか色々！お前のそれなんだ!?自作のスコール写真集（ポロリもあるかも）!?全部持て！そしてあとで俺にも見せろ！「オータム？その話、あとで詳しく」やべっ、バレた。」
　そうこうしてるうちに建物の外
　全員脱出完了
「ところで白銀君？」
「なんだ？」
「途中でレールをビー玉が転がってたりしていたのだけどあれは？」
「ああ、せっかくだからピタゴラ装置で爆発するようにしようと思って作った。」

「何してるの!?」
あっ、そろそろ時間だ。
「それでは、みんなもご一緒に」
「「ピタッ○ラッスイッチ!!」（スコール、オータム、M以外の全員）
ドーーーン!!!
爆発なう。それにしてもよく吹き飛ぶな～。あっ、飛んできたスコール人形がMとやらの頭に刺さった。まぁ、大丈夫だろ。
「これで、亡国は滅んだ。これから俺たちの名前は『白夜の黒十字』だ!!」
こうして、この世界の白夜の黒十字が結成した。

白夜の活動記録

３月２７日

白夜の黒十字結成。ボスを決める際に全員が輝を推薦するも本人が「今まで亡国のリーダーをしていたスコールの方が向いている。」と言い拒否。それによりリーダーはスコールに決定。その後輝に本音を聞いたら「ダルビッシュ」とのこと。

４月１３日

イギリスで電車の線路が橋ごと爆破される事件が発生。イギリスで有名な富豪「オルコット家」のオルコット夫妻が元々乗る予定だったためオルコット家の財産を狙う分家か小規模組織の犯行と推測。なお、優秀な工作員たちからオルコット家が狙われているという情報を得ていた。あらかじめ乗客を全員おろしていたため死傷者は０。オルコット夫妻も無事。その後、その爆破事件の犯人を突き止め犯人だった分家を潰した。

７月２０日～２７日

デュノア社に潜入させていた工作員から「酷い扱いを受けている子がいる」という情報が入る。その後１週間様子を見た結果確かにシャルロット・デュノアという少女がまるで道具の様な扱いを受けていた。そこで輝とマドカ（最近Ｍではなくマドカと名乗るようになった)その他数名が「次はない。」という警告も兼ねてデュノア社を襲撃。そのせいでＩＳの製造ラインが破壊され致命的なダメージをおった。その後、輝たちは、殴り込む際にマトリックスごっこして派手に暴れたせいか帰ってきた途端にスコールに捕まり、正座のまま３時間説教された。

翌年の２月９日

ドイツで開発が進められている「第３世代機が怪しい」と情報が入ったためドイツ軍を襲撃。まだＩＳ自体が未完成だったからか、搭乗者の適合率が低かったためか例の第３世代機の無力化に成功。だが、第３世代機の挙動などを考えた結果今後も警戒することになった。

２月２０日
組織のメンバーが作った人生ゲームをスコール、マドカ、輝、他２名でやる。輝が開始２０マスで１００万単位の借金ぐらしのアリエッティになっていた。
３月７日
輝が篠ノ之束に接触。篠ノ之博士自身もこの世界が腐っていることを理解しているようだ。こんな世界にしたことへの罪悪感を感じておりこの世界を変えたいと言っているため篠ノ之博士も白夜に入団。持っていたバイオなハザードが翌日にはＶＲＭＭＯ的なノリでできるようになっていた。
３月２２日
何人かで桃○を９９年に設定しプレイ。２０時間くらい粘ったが全員の集中力その他諸々が限界を迎えたため途中で終了。とりあえず、スコールが１番チートだったのは覚えてる。
４月１日
輝とマドカの中学入学式。帰りにみんなでカラオケに行ったがマドカは初めてだったらしく緊張の余りリバースした。ちなみに、織斑秋斗、凰鈴音と同じクラスになった。
１０月８日
輝たちの学校で体育祭。騎馬戦の際に輝が凰鈴音の耳元で禁句「貧乳」と呟いたらしく暴走。放送機材で「ｔｈｅ　ｂｅａｓｔⅡ」をながして「Ｅ○Ａごっこ」をしていた。
「何してんだ？オータム。」
「ああ、輝か。ちょっと活動記録をな。」
「どれどれ。……。」
「どうだ？」
「俺ら最近ろくなことしてないな。」
「事実だからしょうがねえだろ。」

更織家に殴り込みじゃあ～。

数日後。昼休み。

「輝、少しいい？」

俺がスマホでチェス（相手はグランドマスター）と熱い闘いをしていたら水色の髪をした女子生徒が話しかけて来た。

「なんだ。簪か。どうした？」

彼女名前は「更織簪」。日本政府御用達の暗部「更織家」の次女だ。先日姉のの方から「仲直りの手伝いをしてほしい。」と頼まれ協力し、更織姉妹は仲直りできた。

「助けて。」

「はっ??」

「ごめん。省略しすぎた。」

本当にな。

「実は、お姉ちゃんが「更織楯無」を継ぐことになったの。でも、楯無は更織家の当主。当然、自由は無くなる。今みたいにあなたと普通に会うことも出来なくなるの。それが嫌でお姉ちゃんが昨日私に「楯無を継ぎたくない。自由を失いたくない。輝君と会えなくなるのは嫌。」って泣いてた。だからお姉ちゃんを助けて！」

簪が泣きながら言ってきた。そこまで言われたらやるしかねぇな。確かに、あいつといるのはたのしいからな。

「ところで、襲名式はいつだ？」

襲名だから1、2週間はあくだろう。

「明日」

思いの外、近日だった。

今俺と簪は更織家の門の前にいる。流石名門。門が木製だけどでかい。

「準備は良い？」

「もちろんだ。いつでも行ける。」

「それじゃぁ「ちょっと待て。」どうしたの？」

「何しようとしてんだ？」
「何って、一応襲名式の最中だろうからインターホンを」
「おいおい、俺たちは襲名式をぶち壊しに来たんだ。インターホンなんかいらねぇよ。」
「じゃあ、どうするの？」
「こうすんだ…よっ!!」
俺は、ドアを蹴り飛ばした。中には似たような着物を着た男たちが数十人と刀奈と恐らく刀奈たちの父親がいた。
「何者だ！貴様は！」
「白銀輝。ただの簪のクラスメイトでただの刀奈の友達だ。この襲名式をぶち壊しに来た。」
「ふざけるな！貴様ら！やれ！」
父親（仮）の命令で男たちが一斉に襲いかかって来た。俺は殴ったり、蹴ったり時には相手の胸ぐらを掴んでそのまま頭突きをかました。
数十分後
その場に立っていたのは刀奈と簪、父親？と俺だけだった。
「あんたに聞きたいことがある。楯無を襲名したら友達とはろくに遊べず、友人関係にも制限されるのは本当か？」
「当然だ。楯無を継ぐと言うことは更織の当主になること。それなのに友人と遊ぶ、ましてや遊びなど「ふざけるなよ？」何っ!?」
「ふざけるなっつってんだよ！なんで当主になったからって遊んじゃいけないんだよ！なんで友人関係すら文句言われなきゃいけないんだよ！刀奈は簪に泣きがら言ってたらしいぜ。「継ぎたくない。自由を失いたくない」って。それなのに父親のあんたが娘の涙無視してどうすんだよ！親ってのは自分の子供のことを何よりも大事にするもんだろ！娘の涙を！自由を無視して何が暗部だ！何が名家だ！泣いてるやつ無視してまで守るくらいならそんな家……俺がぶち壊してやる!!」
言ってやった。俺が思っていることを。ふと見たら簪が泣いていた。刀奈においては号泣していた。お父様（笑）は顔を真っ赤にして

ご立腹だ。
「貴様！言わせておけば！「止めないか。馬鹿者。」先代!?どうして!?」
じいさんが出てきた。あれが１５代目楯無か。にしても半端ない存在感だ。お父様（爆）とは大違いだ。
「彼の言う通りだ。我々は日本を守る暗部だ。それなのに娘のことをかんがえられぬとは。情けないものだ。それにもう「更織家」はいらないかもしれんな。」
「先代!?」
「最近は、日本政府からの依頼もない。娘には自由を棄ててしきたりを押しつけようとする。それなら無くても良かろう。」
「お爺様……「それにワシも夢があったからのぉ」お爺様？」
「実はワシ旅館をやってみたくてのぉ。これを期に旅館でも開くか。よしっ！１５代目更織楯無最後の命令じゃ。旅館を開くぞ！」
「「えーーーー!!!!」」
一同騒然。そらぁ驚くわ。俺も驚いてる。
「それでは刀奈よ。お主は自由じゃ。彼と簪と一緒にカラオケでも行って来なさい。」
「ありがとうございます！お爺様！」
そう言って刀奈は自分の部屋に走って行った。
「というわけで、ワシらの代わりに日本を、世界を頼んで良いかのぉ。
「白夜の黒十字」さんや。」
やっぱり気づいてたか。
「もちろんです。あとは任せてください。１５代目。」
こうして暗部「更織」は長い歴史に幕を降ろした。
そして数ヵ月後……

本当に和風旅館『更織』を開いた。
マジかよ……。

織斑秋斗誘拐事件（ポロリはないよ。）

輝ｓｉｄｅ

俺は今ドイツで廃倉庫が見えるビルの上にいる。何故かって？結果だけ言おう。織斑秋斗が誘拐された。どこの組織の者かは知らないが恐らく織斑千冬のモンドグロッソ２連覇を阻止しようと考えているやつらだろう。開催国がドイツで前回の優勝者の弟が誘拐される。出来すぎにも程があるだろ。ドイツ政府が絡んでんじゃねぇの？まぁ、良いか。とりあえず、

「変身（トランス）　フォームチェンジ　モデル　２５エイジ」

フォームチェンジは俺の変身（トランス）能力で体を好きな歳にさせるモノだ。ちなみに今回のは２５歳モードだ。そして、格好は俺が白夜の黒十字として動く時の全身白ずくめである。

「そろそろ行くか。」

そう言って俺はビルの屋上から飛び降りた。（推定３０階）

秋斗ｓｉｄｅ

オッス。俺は織斑秋斗。中学２年生。生まれて初めて誘拐されたぜ！

……無理矢理テンション上げてたけど限界です。くそっ！さしずめ千冬姉の２連覇を阻止しようと考えてんだろ。

「こいつが織斑秋斗だな？これで織斑千冬の２連覇は阻止できるぞ！」

やっぱりな。でも無駄だと思うぜ。

「おい！テレビを見ろ！」

「何でだ！何で織斑千冬が出場している!?」

だと思った。家事しか出来ない俺はいらないってことか。

「ちっ、こうなったら俺たちの計画は台無しだ。悪いが死んでもらうぜ。」

男は俺に銃を突きつけて来た。俺の人生もここまでか。

パァーン!!
発砲音は確かに聞こえた。だがいつまでたっても銃弾が来ない。俺は恐る恐る目を開けてみた。
「大丈夫か?少年。走馬灯見るには早すぎるぜ?」
そこにはロボットの様な赤く光るセンサーライトを右目に持った、それ以外は全身白ずくめの男が立っていた。銃弾はその男が受け止めていた。
「何だお前は!!」
「白夜の黒十字。聞いたことぐらいはあるよな。そこの白銀のヒカリだ。」
白夜の黒十字。俺も聞いたことがある。世界中の紛争やテロ組織に武力で介入しなおかつ、死者を未だに1人も出していない。その中でもずば抜けて強いのが白銀のヒカリだ。まさかこの人がそうだったなんて。
「なぁ、少年。こいつらボコって良いか?」
「いいんじゃないっすか?そもそも向こうははなからそのつもりらしいです。」
誘拐犯たちは白銀のヒカリに銃を向けていた。
「撃てーー!!」
男たちは撃ち始めた。相手がマシンガンにも関わらずそれを左右に動きかわしつつ前進してまず目の前の男の顔面に飛び蹴りを決めた。そのあとナイフで後ろからきたやつには回し蹴りを側頭部に叩き込んで意識を1発で刈り取った。近くにいたやつには顎にアッパーをきめその直後に相手の顔を鷲掴みして腹にニーキック、相手が前屈みになったら後頭部を掴んで地面に押しつけ倒した。その後も圧倒的な力で男たちを倒して数分後誘拐犯たちは全員倒れていた。
「さて、少年。もうすぐドイツ軍とお前の姉がくる。どうする?このまま姉と一緒に帰るか、俺と一緒に来て強くなるか。選びな。」
俺はずっと強くなりたかった。兄に暴力を振るわれるからでも回りからの陰口が嫌だからじゃない。こんな腐った世界を変えたいから。そして今まで守ってくれた千冬姉を今度は俺が守るために。だ

からこそ
「そんなの決まってます。」

会社訪問と入学試験

その後、1年間白銀のヒカリと修行をした。そして大事なことを教わった。『周りの意見なんか関係ない。自分の信じる物のたまに進み続けること。そして、自分を殺さず自分の本能に従うことの大事さ」を。

そしてあの人に追い付くには少なくともレーザーの軌道を素手で変えられるぐらいにはならないといけないらしい。

中学3年生になった。輝に誘われて輝のバイト先兼下宿先の『ラビット社』に行くことになった。

ラビット社

「ただいま～。秋斗連れてきたぞ。」

「こんにちｗ「あっくーーーーん!!」束さん!?なんでここに!?」

ＩＳの開発者篠ノ之束が抱きついてきた。

「それはね、私がここの技術開発部のボスだからだよ。」

「とりあえず、離れｔ「兄さーーーーん!!」えっ!誰!?今度はマジで誰!?」

「誰って私だよ。織斑マドカ。生き別れの妹だよ。私生まれてすぐにあの親が出ていく時に連れてかれたの。でもすぐに私も捨てた。そしてここに拾われた。私みたいな思いをする人をつくらないためにいるの。」

そっ、そうか。

「とりあえず、技術部のみんな集合ー!ひーくんとあっくんのＩＳをつくろう!」

「待ってくれ。束さん!俺はＩＳなんて動かせないぞ?」

「じゃあ、あっくん。このボールに触ってみて。」

「わかりました。」サッ

なんか光り出した!!

「これであっくんは男性でのＩＳの起動２人目だよ。」

マジかよ。
「それじゃ、まずひーくんから。何かアイディアある人いる？」
「ビームサーベルを２本持たせましょう。」「ロングコートタイプ！」
「装甲は両手足だけで。」「体のいたるところから銃を取り出せるように」
思いの外じゃんじゃん出てるな～。あっ、次俺だ。
「良いね～。じゃあ、次はあっくんの！何かある？」

「「……。」」」
「誰か意見出せや!!」
輝の時のが嘘みたい。
その翌日だったかな？『世界初の男性操縦者織斑一夏が見つかった』ってニュースで世界中が騒ぎ出したのは。実質世界初じゃないのにな。

千冬ｓｉｄｅ
『次の受験者、出撃してください。』
出てきた奴に私は驚いた。それは誘拐されて行方不明になって以来生きてるかどうかもわからなかった私の弟『織斑秋斗』だった。それにしてもこの約２年で何があった？体つきは良くなったし男前になった。何より前はへらへらしているだけだったのに今の秋斗はまるで別人のように真っ直ぐ相手を見据えている。
『試験開始』
「来い。白鳳蝶（しろあげは）」
全身が白の機体があった。専用機だと!?なんで秋斗が!?私が驚いていると秋斗が担当の教員に突っ込んで行った。教員が銃で対抗したが秋斗はそれをかわした。そして右手に日本刀を展開してすれ違い様に斬った。そのあと、壁に向かって行きぶつかるかと思ったが壁に着地しまた壁を蹴る瞬間にブースターをふかし蹴る力と推進力を利用して再び斬りかかった。そしてそれを繰り返し高速連撃をくり出していた。強すぎる。しかもさっきのは瞬時加速（イグニッション・ブースト）。秋斗が知っ

てるはずがない。知っていたとしてもそう簡単にできるはずがないほどの高等テクニックだ。この2年間で何があった。

秋斗side

あの後もワンサイドゲームで無傷で勝利。文句なしの合格だった。輝?もちろん合格した。ただ相手が千冬姉だったのは何でだろう?

「ちょっと良いか?」

ん?この声は千冬姉か?

「久しぶり、千冬姉。」

「あの時はすまなかった。」

「気にすんな。政府が黙ってたんだろ?」

「ああ、それにしても強くなったな。この2年間何をしてたんだ?」

「誘拐された時に助けてくれた人について行ってそのまま1年間修行。そのあとは、友達の輝の下宿先の会社でトレーニングしてた。」

「そうか。あの専用機も会社の者がつくったのか?」

「おう。正確に言えば千冬姉がよく知ってる兎が作った。」

「あいつか……。」

「「……。」」

「まぁ、とりあえずこれからは俺もIS学園の生徒だよろしく頼むよ。」

「厳しくいくから覚悟しとけ。」

入学と自己紹介と逃走中

秋斗ｓｉｄｅ

「……。」

なんだ！この状況！周りを見ても女子、女子、男子、女子。女子が若干男子より多いですどころじゃねぇ。ほぼ女子しかいねぇ。ちなみにその男子とは俺の友達、輝だ。世間曰く『世界初の男性操縦者』の織斑一夏ことクソ兄貴は３組にいる。クラスじゅう女子の中クソ兄貴独りぼっち。ざまぁ。

（輝、想像以上にキツイ。）

（いや、俺の方がキツい。）

（いや、俺の方が）

（俺の方が）

（おりむ～。ひかるん。どうしたの？）

（のほほんさん!?お前どうやってんの!?）

これ、俺たちが中学の時にあみだしたテレパシーに近いアイコンタクトなんだけど!?

「……くん。織斑くん！」

「ウェイ!!」

「自己紹介で次織斑くんお願いしていいのかな？というか今の返事？」

ほっといて欲しい。

「はい、え～と、織斑秋斗です。」

自己紹介とはいわば初めての人たちに自分を伝えること。簡単過ぎてはダメだし真面目過ぎてもダメだ。だからこそ言おう。俺はそうしてルーティーンのように両腕をゆっくり動かし、

「以上でぐふぁっ!!」

以上ですってこと言おうとした瞬間に何かが頭に直撃した。今の衝撃ＩＳの近接ブレードか!?

「誰…げっ！関羽！」

ドスッ!!

「誰が三國志の英雄だ。馬鹿者が。」
　そこには実の姉「織斑千冬」がいた。
　ちなみに千冬姉が降り下ろしたのは近接ブレードではなく出席簿だった。だが俺は見逃さなかった。出席簿の隅っこに小さく「ゆきひら」と書いてあったことを。
「私がこのクラスの担任の織斑千冬だ。これから諸君にＩＳについてなどを教えることになる。私にすべて従えとは言わん。間違っていると思えばたとえ相手が教師であっても間違っていると言える人間になれ。それと女尊男卑なんてくだらん考えを持っている者は今すぐすてろ。これからよろしく頼む。」
「キャー！千冬様よー！」
「ずっとファンでした！」
「おいどんは九州からきたがよー！」
「私はあなたの意思に従うで候。」
　九州からきた娘、鹿児島だな？あとなんか侍いなかった？

「ところでお前は自己紹介すらまともにできんのか。」
「いや、自己紹介だからインパクトがあってなおかつ簡潔な方が良いかなと。」
「少なくともさっきのはインパクトはあってもお前のこと何一つ伝わっていないからな？」
「ダニィ!?」
　あれでまさか全く伝わっていないとは……。
「まったくこのバカは……。ついでだ、白銀。お前も自己紹介しろ。」
「うっす。俺は白銀輝。」
　あっ、なんか輝がゆっくり動き始めた。あれ？、あの動きってペガサスな流星拳じゃね？
「以上。見切った！ぐはっ!!」
　あっ、千冬姉が降り下ろすと思って横に逃げたのに右薙ぎ（右から左への水平な切り払い）がヒットした。ありゃ、クリティカル判定つくな。

「まったく、このバカどもは……。」
千冬姉。俺がバカだって？大正解だ。
『輝、私も自己紹介した方が良いですか？』
「ん？クロか。ああ、頼む。」
そしたら、突然輝の黒い指輪（専用機の待機状態）が光り出し、光りがやんで現れたのは黒くて長い髪、黒い目、黒いワンピースと全身黒の女の子だった。
「みなさま初めまして。輝の専用機で《クロ》と呼ばれております。これからは基本このような姿でいるつもりです。よろしくお願いいたします。」
「お前……人の姿になれたんだ。」
「「あれ!?全然驚いてない!?」」
だって、輝の専用機だもん。ていうかＩＳが一番まともに自己紹介した。

輝ｓｉｄｅ
「ちょっと良いか？」
俺が秋斗としりとりを本気でやっていたらポニテの生徒が話しかけてきた。
「ちょっと秋斗を借りて良いか？」
「でも」
「俺はいいぜ。せっかくの幼馴染みとの再会だ。二人きりでしてこいよ。」
そうして秋斗とポニテは教室を出ていった。
「さて……、チェスしよ。」

秋斗ｓｉｄｅ　ｉｎ　屋上
「久しぶりだな。秋斗。」
「ああ、６年ぶりか？それと剣道の大会優勝おめでとう。」
「!!なぜそれを!?……ああ、新聞か。それより最近剣道に関してのお前の話しを聞かないのだが？」

「そりゃあそうだ。俺は剣道をやめたからな。」
「なっ！それはどういうことだ！」
　ガチャッ
「お～い箒～。久しぶりだな～。」
「貴様などどうでもいい！それよりも秋斗！剣道をやめたとはどういうことだ！」
「お前に話すことじゃねぇよ。しいて言うなら《強くなるため》かな。」
　そう言い残して俺は屋上をあとにした。あっ、クソ兄貴いたんだ。

ｉｎ教室
「あなた聞いてますの!?」
　俺が教室に戻って聞いた第一声がそれだった。どういうこと？
「えっと……、どうしたんだ？」
「どうしたもこうしたも、この男がさっきからこのわたくしを無視して画面を操作してますの。」
　輝が無視して画面を操作？もしかして。
「あ～、やっぱりか。えっと、誰かわからないけどまた今度にしてもらえるかな？」
「どういうことですの？」
「こいつチェスをしていると集中し過ぎてまわりに一切反応しなくなっちゃうんだ。」
「たかがチェスでですか？」
「こいつのチェスは普通じゃあないからな。画面を見てみな。」
「これは！チェスの盤が５つも!?」
「そう。こいつのチェス好きが生み出した究極のチェス。通称《フィフス・ゲーム》だ。それにこの名前に見覚えがあるだろ？」
「この方は《グランドマスター》!?まさかグランドマスターも相手にしつつ５つ同時にしてますの？」
「しかも輝は訓練も兼ねて自分のターンが回った瞬間にコマを動かして次に回している。こうすることで相手がどういう動きをするかの《先読み》、自分のターンを限界まで短く縛ることでの《素早い判断力》

を同時に鍛えているんだ。しかもこの方法のモデルである小説は1対1の状態で5つ同時にするのに対しこれは普通のチェスを5人同時にやることで絶えず変わる5つの盤を同時に把握する《複数同時把握》を鍛えているんだ。」
「終わったーーーー!!」
「おう。お疲れ。授業始まるぜ。」
ちなみにオール勝ちだった。

輝side
放課後、1週間自宅通いと思いきや政府の命令で当日入寮になった。秋斗が1025室、俺がその隣の1026室だった。2人別になったが急だったのでしょうがない。あっ、ちなみにクロもいるぞ?人型で。さて、俺のルームメイトは誰かなっと。
ガチャッ
「お帰りなさい。ご飯にする?お風呂にする?それともわ・た・し?」
ガチャッ
俺は何も言わずにドアを閉めた。
「刀奈がいたな。」
「しかも裸エプロンでしたね。」
「なあクロ。何か良いもん持ってないか?」
「これなら。」
ふむ。冷え〇(ピー)タシートか。ちょうどいい。
「クロ。オペレーション《フェイク》でいくぞ。」
「了解しました。ただ冷えピタのその部分は伏せる必要は無かったのでは?」
キニスルナ!
ステップ1
1人(クロ)がドアを開ける。この際もう1人(俺)は全速力で窓の外に移動。
ステップ2
ドアを開けた瞬間にドア担当は隠れる(今回の場合はクロを一時解

除）ターゲット（刀奈）がドアの方に気をとられている隙に音をたてずに窓を開け室内に侵入。
ステップ３
ターゲットが後ろを向く前にターゲットに近づく。
ステップ４
ＦＩＲＥ（刀奈の首筋に冷えピタを貼り付ける）
「にゃーーーーーーーー!!!!」
ミッションコンプリート。刀奈は首筋が弱いからな。今回は警戒０のところに冷えピタだからな。暫く動けないだろう。
「さて、秋斗んとこに遊びに行こっと。」
刀奈？放置。もちろん格好はそのままで。

廊下に出たら秋斗が背中でドアを押さえていた。
「何してんだお前。」
「輝か！助けて！マジで殺される！」
「何言ってんだよ。そんなことあるわけ『ドスッ』逃げっぞ。」
「うっす」
俺達全力逃亡中。後ろから木刀持ったバーサーカー（篠ノ之）が追って来ている。そして走っている途中で十字路の横から洗濯篭を持った女子が出てきた。それを見た俺達は秋斗が洗濯篭の下をスライディングで、俺が上を背面跳びで越え着地しそのまま逃亡再開。篠ノ之は反応しきれずブレーキをかけるはめになり俺達は逃亡に成功した。
……入学早々何してんだろうね。

剣道と決闘宣言とチャーハン

秋斗ｓｉｄｅ　ｉｎ剣道場

「まだだ！秋斗！もう１回だ！」

何故こうなった。ことの始まりは休み時間まで遡る。

朝練の時間

「勝手に剣道を辞めるような腑抜けた根性を叩き直してやる！剣道場にこい！」

何故そうなる？まぁ、行かなかったら行かなかったで後がうるさいだろうし行くか。輝も巻き添え……ゲフンッ一緒に。

ｉｎ剣道場

「来たか。お前の根性叩き直してやる！」

何故上から目線なんだ？

「おい、秋斗！防具はどうした！」

「防具なんか要らねぇよ。前が見づらいし、防具があると安心して力が出せない。」

「怪我をしても知らないからな。行くぞ！」

「始め!!」

「はぁーーーー!!」

審判の合図と共に箒が突っ込んできた。俺はそれを竹刀でいなし続けた。

「何故攻撃してこない。遊んでいるのか！」

そうだな。飽きてきたしそろそろ終わらすか。箒が面目掛けて降り下ろしてきた竹刀を上に弾いての

「はぁ!!」

パァン!!

箒の胴の左側をうった。つまり

「逆胴?!しかも、全く見えないくらい速い。」

今の試合を見ていた誰かが言った。

逆胴

胴は相手の右側うつのに対し左側をうつためこの名前である。剣道は昔の侍の戦い方を再現したようなものである。そして当時、侍の多くは左側に刀をさしていた。そのため逆胴をやっても致命傷になりにくかった。それは今でも残っておりもし、うったとしても1本を取れない可能性が高い。逆に言えば剣道経験者は油断して防げないことが多い。わかったか。輝ってスマホいじりながらぷよ○よやってるー!。てかなんでノールックでぷよできんの!?まぁ、いいや。

「わかったか。俺は強くなるために剣道をやめた。ここまで強くなれたのも頑張ったからだ。だが、これでも弱い。こんなんじゃ《あの人》には並べない。」

「……まだだ!秋斗!もう1回だ!」

「……は?」

そして今に至る。なんでや。

「疲れた。輝と代わるから頑張れ。ちなみに輝は俺より強いぜ。」

「なんで俺に代わるんだよ。」

あっ、輝がきた。

「お疲れ。じゃあ、バトンタッチな。」

「とりまぁ、がんば!」

「それじゃ篠ノ之さんよろしく。」

「貴様に用は無い!秋斗を出せ!」

「じゃあ、俺を倒してから行くんだな。」

「始め!!」

審判の合図が出た瞬間に箒が正面から突っ込んで行った。

「邪魔だぁぁぁぁぁ!!」

「甘ぇ!!」

輝も前に出て突っ込んできた箒の左側（ん?輝から見て右側か?）にずれすれ違いざまに回転しながら胴に1発叩きこんだ。

「1本!!」

あの技、作者が高校の授業で剣道部にやられたわざじゃん。……何言ってんだ俺。

秋斗ｓｉｄｅ　ｉｎどこかの休み時間

俺と輝、マドカとクロが話していたら昨日の人が話しかけてきた。

「ちょっとよろしくて？」

「よくない。」←秋斗

「帰れ。」←輝

「帰ってママの紅茶でもすすってな。」←マドカ

「いえ、それただの優雅なティータイムですから。」←クロ

「エリートである私になんなんですの？その返事は。」

なんなんだろうね。

「全くこれだから男は…。たいして実力も無いのに強がる。私は入学試験で唯一教官を倒したエリートですのよ？」

入学試験って俺と輝がやったあれか？

「あれなら俺も倒したぜ？輝とマドカも倒したよな？」

「たかすクリニック。」←輝

「キリスト。」←マドカ

「訳がわからないよ。」←クロ

つまりイエスということですね。わかります。

「私だけと聞いたのは？」

「女子ではってことじゃね？」

マドカもいるから本当は違うけど。なんでだろう。そんなことを話していたら。

キーンコーンカーン

あっ、予鈴だ。

「また後で来ますわ！逃げないこと。よろしくって？」

ここは俺のクラスだ。どこに逃げるってんだよ。つか二度と来んな。

秋斗ｓｉｄｅｅｎｄ

輝ｓｉｄｅ

「授業を始める。とその前にクラス対抗戦に出るクラス代表を決めてしまうか。誰かやりたいものはいないか？自薦、他薦問わんぞ？」

クラス対抗戦？クラス代表？何ぞ？
「先生、クラス代表ってなんですか？」
「クラス代表とはクラス対抗戦に出る者のことだ。他にも生徒会の会議や委員会に出ることになるがな。要するに貧乏……雑用だな。」
おいコラ。今貧乏くじって言おうとしなかったか？そんなんで良いのか？まぁ、恐らく俺と秋斗、マドカが推薦されるな。それは秋斗に押しつ……譲るとして腹減った。昼まで時間あるし朝動いたせいで腹減った。今はチュパチャップス食ってるけど。ちなみに飴の許可は織斑先生に得ているぞ？許可なかったら今ごろ死んでるし。今日の昼は何食おう。ラーメンかな。カレーは昨日食ったし。丼とかの気分じゃないしな。あっ、チャーハンも良いな。よしチャーハンにしよ。
「あなた聞いてますの!?」
「うん。俺はチャーハンにしようと思う。」
その瞬間クラス全員がこけた。『パリーン』あっ、今リアクションのあまり窓突き破った人いたけど大丈夫かな？
「おい、秋斗。何の話だ？」
「お前な……。良いか？」
まとめ
クラスのみんなが俺と秋斗、マドカを推薦。
←
オルコットさん（金髪上から目線女）が『男の下とかやってられっかー！』ってことで反発。
←
オルコットが『自分エリート』とか『男は弱い』とか言う。更に『日本の技術（笑）』とか言ってレッツ四面楚歌状態。
←
秋斗反論。それ正論。オルコット激昂。いざ決闘。←今ここ
ちなみにさっき窓を突き破った人は無事に帰ってきた。
「ふむふむ。なるへそ。」
「んでオルコット。ハンデはどれくらいだ？」

「あら？いきなりハンデを要求しますの？」
「いやいや、俺達はどれくらいハンデをつければ良い？」
その一言でクラス中（先生２人、篠ノ之、マドカ、本音以外）が笑い出した。
「代表候補生にそれは無いよ。」
「男が女より強かったのは昔の話だよ？」
「今からでも遅くないからハンデつけてもらいなよ。」
秋斗が更に何か言おうとしたけど俺が止めた。
「そうかそうか、オルコットさんや。ハンデをつけなくて良いのは俺も含まれているのか？」
俺は笑顔で言ったつもりだ。それなのに秋斗とマドカ、本音がめっちゃ恐ろしいものを見たような顔をしていた。そんなに恐い？
「オルコットさん！お願いします！こいつにハンデをつけてください！」
秋斗がいきなり頭を下げた。
「いきなりどうしましたの!?」
「頼む。こいつにあなたを病院送りにさせないでください！」
そいつは聞き捨てならない。
「おい、秋斗。友達になんてことを言うんだ。」
「お前は黙ってろ。俺達が小学生だった時、上級生が『この公園は俺達のだ』とか言って下級生をいじめてた奴らいたろ？お前なにをした？」
「ちゃんとお話で解決しただろ。」
「力でな！しかも最後は砂場にバックドロップ決めて全員犬神家の刑にしていただろうが！」
そんなことあったっけ？覚えてねぇや。
「それに中学生の時は町中で女の子をナンパしてる奴らシバいて壁にめり込ませてリアル壁画の刑にしただろ！」
それは覚えがある。だがあれはあいつらが悪い。
「あれはしょがねぇよ。その瞬間をちょっと見てただけなのに『何ガンくれてんだよ』とか言って殴りかかってきた挙げ句俺のいちご牛乳

と菓子（総額３０００円）を無駄にされたんだ。俺は悪くねぇ！」
「「有罪だよ！」」
マジか!!納得いかねぇ！ちなみにそのナンパされてた子が簪だった。今思えばあれが俺と簪の出会いだったな。
「……まぁ、話がだいぶそれたが、１週間後織斑、白銀、オルコットで模擬戦を行ってクラス代表を決定する。白銀は保健室送りまで。それで良いな？お前たち。」
「イインジャナイカナ」
「それでいいですわ。」
こうして俺達の決闘が決まった。

あれ？ちょっと待てよ？
「確かマドカも推薦されてたはずだろ？なんでお前は戦わないんだ？」
「それは『兄さんのカッコいいところが見たいから』って言って織斑先生に辞退させてもらった。」
チキショウ！あのブラコンめ！
あの後、クラスの人に聞いたらハンデのくだりの俺の笑顔は『まるで悪魔のようだった』らしい。ちょっとショック。俺だってショックを受けるさ。

ぶつかる青と白、消える慢心

秋斗ｓｉｄｅ　ｉｎ第３アリーナ

１週間後。俺と輝、オルコットの決闘の日になった。それで先に俺対オルコットだからピットにいる。他にいるのは先生２人、マイラブリーシスターマドカちゃん。あともう１人……。もう１人？

「なんで、箒いんの？」

「私は幼馴染みだぞ!?いて当然だろ!?」

いや、呼んでないし。

「ならそいつはどうなんだ!?」

そいつってマドカのこと？

「いやマドカは俺が呼んだし、妹だし、ラブリーだから。」

「お兄ちゃん、後で校舎裏。」

マドカが顔を赤くしながら言ってきた。あっ、俺死ぬわ。

ちなみに、輝は『初見の方が楽しめるし向こうも俺の機体は見てないんだ。こっちだけ装備知ってるのも不公平だろ？』ってことでたぶん今頃どこかのベンチで『ｐｒｏｊｅｃｔ　なんとか』の『初○ミクの激唱（難易度はｅｘｔｒｅｍｅ）』を『音無し＆片手オンリー』の縛りプレイでもしてんだろ。えっ？そんなことしてるのに驚かないのかって？……そんなことで驚いていたら１週間ともたねぇよ。つか慣れた。慣れって恐いね。

「それじゃあ、行ってくるよマドカ。」

「うん。勝ってきて、お兄ちゃん。」

「おう。織斑秋斗、白鳳蝶出るぜ！」

「あら？来ましたのね。遅いから逃げたかと思ってましたわ。」

「ちょっと色々あってな。それにここで逃げたらそれこそただの雑魚だ。」

「そうですか。では逃げなかったことを後悔しないことですわ。」

『ロックオンされてます』？全くまだ試合開始の合図も出てないのにロックオンとはな。お嬢様も礼儀がなっちゃいねぇ。

『試合開始！』
「喰らいなさい！」
　オルコットがライフルを撃ってきた。俺はそれを1人分横に動いて避けた。俺もまだまだだな。『あの人』ならその場でかわせるのに。
「避けた!?マ、マグレですわ！」
　オルコットがライフルを撃ちまくるが俺は全部かわしていた。やがてオルコットはライフルを撃つのをやめた。
「ちょこまかと！行きなさい！ブルーティアーズ！」
　オルコットの機体のスカート部分に着いていた何かが飛び出した。一応かわせてはいるがあれは……まさか……！ファ○グ!?
『どちらかというとスーパードラ○ーンの方かと。』
　ん？今の誰だ？
『私です。マスター秋斗。』
　えっ、もしかして白鳳蝶？
『はい。輝のクロ同様私も会話及び実体化が可能です。』
　そーなのかー。じゃあ、なんで今までしなかったんだ？
『寝てました。』
　お寝坊か!?とりあえずあの機体の解析できる？
『私を誰だと思っているんですか？』
　いや、今会話したばっかだし。
『そんなの昼飯前です！』
　朝飯は過ぎるのかよ。微妙じゃねぇか。
　数分後。解析が終わったらしい。
『あれはイギリスが最近力をいれているＢＴ兵器通称《ブルーティアーズ》です。縦横無尽に操作出来ますが操作をするのはＭｓオルコット自身のようです。』
　なるほど。どうりでさっきからライフルの攻撃が無いわけだ。オルコットがあのブルーレイ『マスター秋斗、ブルーティアーズです。』ああ、ブルーティアーズを操作しているときは集中し過ぎてあいつ自身は何も出来ないと。それならいくらでもやりようはあるな。
「さっきから逃げてばっかりでやる気はありますの!?」

「ずっとかわしていたのはレーザーの速さとブルーデ○ティニーに目を慣れさせるためだ。」
そろそろいいかな。俺は刀（刀奈さんじゃないぞ？）を取り出して思いっきり振り抜いた。その瞬間
「……え？」
「「……は？」」
会場及びオルコットがそんな間抜けな声を出した。無理も無いか。なんせ目の前で《レーザーを斬る》なんて荒業をやられたんだからな。
「あなた、人間ですの？」
失礼な、れっきとした人間だ。
「行きなさい、ブルーティアーズ！」
またそれか。目が慣れた今の俺には怖くない。全方位から飛んでくるレーザーを俺は全部斬っていた。時々刀の角度を変えて弾きオルコットに飛んでいくようにした。
そしてしばらくやってから腰の両サイドについている短剣と後ろについているビームダガーをブルー○ンに向けて投げて破壊した。
「嘘!?」
そんなことを言って驚いているオルコットに俺は高速で近づき入学試験の時にやった連撃をやった。そして最後に白鳳蝶に搭載されていた《雪平弐型》でとどめをさして終わらせた。
『ブルーティアーズＳＥエンプティー。勝者　織斑秋斗。』
アナウンスが入ったあとオルコットに近づいて行った。
「お疲れ、オルコットさん。」
「はい。お疲れさまです。それと今までの無礼申し訳ありませんでした。」
「良いって。気にするな。でもあとでクラスの人たちにも謝っとけよ？」
「ありがとうございます。もちろんそのつもりですわ。それにしてもお強いのですね。」
「ああ、散々頑張ったからな。でも、まだ『あの人』にはほど遠い。」
「前から気になっていたのですが『あの人』とはどなたですの？」

「『あの人』は俺の目標であり俺の道標だ。『あの人』がいたから強くなれたしこうしていられる。要するに今の俺がいるのは『あの人』のおかげだ。」
「その方はさぞかしすばらしい方なのですね。」
「いつか超えるのが俺の夢だからな。」
「そうですか。それでは、私は次の試合の準備をしますので。」
「おう。輝は俺より強いから頑張れよ。」
「ええ、自分の力を過信せず戦いますわ。」
　そう言った今のオルコットには、さっきまでの男を見下した雰囲気や自分がエリートであることを鼻にかけるようなそんな様子はどこにもなかった。

黒対青、黒の実力

輝ｓｉｄｅ

さて、次は俺の番か。

「ところで何で刀奈がいんの？」

「もちろん応援よ。」

そう言って開いた扇子には達筆で『遊び半分』と書いてあった。帰れよ。マジで。

「簪は？」

「私も…応援…だよ。」

「じゃあ、そう言いながらチラチラスマホ見てパ〇ドラすんのやめようぜ？」

本当何しに来たの？この姉妹。

「まぁ良いや。んじゃ、ちょっくら行って来る。」

『行ってらっしゃい。（、・ω・）ゞ』

扇子で言うな。それと顔文字やめれ。

「覚醒ゼ〇スに勝ったー!!」

少しは隠せや。

「白ぎ……白銀輝、《黒羽》（くれは）出る！」

危ねぇ。あと少しで俺の秘密がバレるとこだった。

Ｎｏｓｉｄｅ

セシリアが待っていたら輝が出てきた。

「ごきげんよう。白銀さん。」

「よう。どうしたんだ？さっきまでとはまるで別人みたいじゃないか。」

「先ほどの試合で自分がいかに愚かだったかを思い知らせました。今までの無礼をお許しください。」

「いいよ、気にしてないし。」

「それにしても白銀さんの機体は変わってますね。」

輝の機体はロングコート状で装甲がほとんどなく、唯一あるのは背

中のブースターの役割を果たし左右に3つずつついたひし形状の板のような薄さのものと足のみだった。
「俺がやりやすいようにした結果だ。それよりも『本気で戦ってくれる』と考えていいんだな？」
「ええ、自分の力を過信せず、慢心せず、相手を対等に敬意を持ってされど貴族らしく優雅に勝ってみせますわ！」
「そうか、なら俺は俺らしくクールかつスタイリッシュに戦って勝ってやるよ。」
『3』
セシリアがライフルを呼び出し
『2』
輝が両手にハンドガンを呼び出し
『1』
セシリアが1度目を閉じ輝の目はまるで相手から目を逸らさずと同時に相手を倒すことだけを考えているような鋭くなった。
『試合開始』
その言葉と同時にセシリアは目を開きライフルを輝に向けて撃った。その間わずか1秒。輝はそれを左足を軸に身体の向きを変えレーザーをかわした。そのまま、回転し右手のハンドガンをセシリアに向けて撃った。
「やりますわね。ですがこれならどうですか？」
セシリアからブルーティアーズが分離した。輝はブルーティアーズが放つレーザーを撃って相殺しようとしたが銃弾が溶けたことに気づきまた身体をずらすことでかわした。
（レーザーか、なるほど。）
「クロ、弾を実弾からレーザーに変更。」
『了解。実弾からレーザーに変更完了。次のマガジンからレーザーになりますので今のマガジンを撃ち尽くしてください。』
「わかった。」
その後、輝は縦横無尽に動くことでブルーティアーズ（以下ＢＴ）のレーザーをかわすと同時にセシリアを撃っていた。やがてハンドガ

ンが弾切れになった。輝がハンドガンのリロードに入るためチャンスと思ったセシリアは正面からＢＴのレーザーを撃った。輝は最初に空のマガジンを捨て両腕を後ろに振り袖口から新しいマガジンを自分の後ろに飛ばしレーザーが来る瞬間にバク宙をしてレーザーをかわし、空中でマガジンを装填し着地した時には既に銃口をセシリアに向けていた。

その後、ＢＴのレーザーが輝に当たることはなかった。輝が全てのレーザーをピンポイントで撃って相殺していたからだ。おまけに隙を見てはセシリアを撃って少しずつセシリアのＳＥを削っていた。

（綺麗。まるで本当に踊っているようですわ。）

攻撃されているセシリア自身がそう思ってしまうほど動きが洗礼されていた。

いくら戦い慣れした強者でも時間がたてば集中力はなくなって来るものだ。ましてやセシリアは実戦経験がない。当然集中力は切れて隙ができる。輝はセシリアの集中力が切れてＢＴの攻撃が一瞬止んだ瞬間を見逃さずほぼ同時に正確に撃ってＢＴ４基全て破壊した。輝は一呼吸も入れず次は左手のハンドガンをセシリアに向けて投げた。ハンドガンは綺麗に放物線を描きながらセシリアのすぐ後ろまで飛んでいった。輝はハンドガンを投げると同時に加速しセシリアに向かって行った。

「油断しましたわね。ＢＴは全部で６基ありましてよ？」

セシリアは両腰の誘導ミサイルを発射した。

「知ってる。大体予想できてた。」

そう言うと輝は急に止まりバックステップしながら持っていたハンドガンのマガジンを外しハンドガンと共に前に投げた。ハンドガンとマガジン、その２つをミサイルに当てることでミサイルを爆発させた。しかもミサイルが砲身から出る前に爆発したことで砲身は破壊された。セシリア驚いたが落ち着いて残ったライフルを正面に向けるがそこに輝の姿はなかった。一瞬どこに行ったかわからなくなったが先ほどのハンドガンのことを思いだし後ろをむいた。そこにはハンドガンをこちらに向けている輝がいた。輝は爆発が起きて

いた間にセシリアの後ろに回り込んでいた。
「お見事ですわ。」
「そりゃあどうも。」
そう言って引き金を引き最後の１発が撃たれた。
『ブルーティアーズＳＥエンプティー、勝者　白銀輝』
こうして輝とセシリアの戦いは輝の勝ちで幕を下ろした。

Ｎｏｓｉｄｅ
「よう、秋斗。俺たちが戦うのっていつぶりだっけ？」
「確か入学試験の前もってだから３週間ぶりだな。今度こそお前に勝つ！」
「言ってろ。今回は学食のジャンボパフェ奢ってもらうぜ。」
「じゃあ俺はピザな。」
『試合開始』
そのアナウンスが入った瞬間２人の姿が消えた。
ドーン!!
と思った瞬間に２人は銃と刀で鍔迫り合いをしていた。輝が秋斗を撃とうとすると秋斗が刀で輝の腕を弾いて軌道をずらし、秋斗が斬ろうとすれば輝が腕を刀の斬れない部分にぶつけて防いでいた。その瞬き１つ出来ない攻防戦が広げられつつお互いの攻撃は微かに当りお互いのＳＥを少しずつ削っていた。
「ＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡ!!」
お互い本気でぶつかれるのが楽しいのか２人とも笑いながらやりあっていた。やがて１度お互い離れ
「いくぞ、輝!!」
「ああ、来い。秋斗!!」
「飛天御剣流!!」
「震えるぞハート！燃え尽きるほど（ｒｙ!!」
「九頭龍閃!!」
「サンライトイエローオーバードライブ!!」

ドーン!!
お互いの攻撃がクリーンヒットしたのかお互い吹き飛ばされようとしていた。
「「まだだ!!」」
根性で放ったお互いの一撃は見事にお互いヒットした。
『両者ＳＥエンプティー、結果両者引き分け』
こうして輝と秋斗の戦いは引き分けで終わった。

オリキャラ？何それ、う○い棒の新しい味？

秋斗ｓｉｄｅ

「それでは１組のクラス代表は織斑君に決まりました。」

「先生。俺と輝は１勝１引き分けで同成績なのにどうして俺なんですか？」

「それは俺が辞退したからだ。親友の頑張る姿と勝つ姿、そしてカッコイイ姿が見たいからな。」

「ふ～ん。で、本音は？」

「めんどくさい。」

「やっぱりそれが本音かコンチキショウ!!」

「それと白銀には代表補佐になってもらう。」

「ウソダドンドコドーン!!」

ざまぁｗｗｗ

輝ｓｉｄｅ　ｉｎアリーナ

「これよりＩＳの基礎的な飛行を実際に見てもらう。オルコット、織斑妹、バカ２人、前に出てやって見せろ。」

「おい、呼ばれてるぞ秋斗。」

「何言ってんだ。呼ばれたのはお前だろ？輝。」

「２人と言っただろ。お前たち２人ともだ。」

「「嘘だ!!」」

『何をしているのですか輝は……。』

『私もこんなのがマスターなんて恥ずかしいよ』

ＩＳに呆れられた。

その後何の面白いことも起こらず空中に到着。あ、たった今篠ノ之さんが山田先生からインカムぶんどったことで織斑先生に怒られた。

「次は停止の仕方だ。目標は１０㎝だ。」

オルコット、マドカ無事成功。

「じゃあ輝。俺から行くわ。」

「おう、見事に地面に突き刺され。」

「やるかよ！」
その後秋斗が猛スピードで地面に向かって行きアイア○マンのように着地して織斑先生にシバかれてた。
「最後は白銀だ。良いか？１０㎝だぞ？前のバカみたいなことはするなよ？」
「もちろんわかってますよ。」
それがフリだということが。
そして全速力で地面に向かって行き悪魔も泣き出すゲームの４作目の最初の主人公風に着地して見せた。だが俺の頭に織斑先生の《ゆきひら》が振り下ろされた。やっぱダメだったか。

輝ｓｉｄｅ　ｉｎ　食堂
「それじゃあ織斑くん。クラス代表決定おめでとー。」
今１組のみんなで秋斗クラス代表就任パーティーをしている。
「織斑くん、白銀くんそれ何？」
クラスの確か相川だったか？が俺たちの料理を指して聞いてきた。
秋斗　唐揚げや焼き肉など肉系を山盛り乗せた丼。
俺　小豆、黒蜜、練乳、クリームをたくさん乗せた丼
「「何って俺たちオリジナルのお気に入り丼だけど？」」
おいしいぜ。理想の甘さに近い。
「食うか？」
「「見てるだけで胸焼けがするんでいいです。」」
なんでだよ。うまいのに。
その後なんか新聞部の人にインタビューされた。んで最後に専用機持ちだけで写真撮ることになった。
「それじゃあ写真撮るよ。
ｌｏｇ　ａ（ｘ２＋ｉｘ＋３）＋Σｃｏｓ　ｓｉｎΦ（ｒｙは？」
なんでボー○ボやねん。そこはシンプルに１＋１でいいじゃん。
まぁ、わかるからいいけど。答えは
「「８～。」」
なんで全員わかる。しかもポーズが

セシリア↑普通にモナリザのように座ってる。
篠ノ之↑ピースとかはせずに普通に立っている。
俺↑仮面ライダーカ○トの勝利ポーズ
秋斗↑某錬金術漫画の主人公が背中で人生を語るときのポーズ
マドカ↑美少女戦士でセーラーなムーンのポーズ
他の女子↑ジョジョ立ち
なんだこのカオス。

「ちょっと良いかい？」
パーティーも終わり部屋に帰る途中で
織斑一夏に呼び止められた。
「ここで話すのもあれだからちょっと来てくれるかな？」
ついに接触してきたか。ちょうどいい。ついでに牽制しとくか。

一夏ｓｉｄｅ
やあ、俺は織斑一夏。転生者だ。神の手違いで死んだため好きな力を持って好きな世界に転生させてくれると言ってきたので可愛いキャラが多くしかもハーレムなＩＳの世界に転生させてもらった。なのになんでオリキャラとしてなんだ。まぁ、秋斗はイジメまくって引きこもりや自殺に追い込めばいい。最悪、神に「ＩＳの世界で千冬や束の次に強くしてくれ」とお願いしたことで俺は相当強い。秋斗は例の誘拐事件で行方不明になったし、原作の知識もあるからハーレムは俺のものだ。そのはずなのに俺が１組じゃないってどういうことだ!!それにせっかくいなくなったはずの秋斗も強くなって戻ってきたし。極めつけはあの白銀輝って誰だよ。きっとあいつも転生者だ。俺のハーレムを邪魔しやがって!!こいつは怖い思いをしてもらうしかねぇな。
一夏ｓｉｄｅｏｕｔ
輝ｓｉｄｅ
「おい！お前も転生者だろ！俺が主人公なんだ！俺のハーレムだ！余計なことをするな！」

「何言ってんだ？原作？主人公？何を訳わからないことを。」
一応原作のモブを演じて誤魔化してみる。さぁ、どう来るか。
「なめやがって!!」
殴りかかってきた。いきなりかよ。とりあえずその後拳をつかんで逆の手で一夏の胸ぐらをつかんで少し浮かせた。
「ぐっ！」
「調子に乗るなよ？言っておくが俺は転生者じゃない。ただの助っ人だ。」
「なん……で……。」
「なんでか？決まってんだろ。女神に頼まれたんだ。秋斗を助けて欲しいってな。転生者ってのは世界の異物だ。本来なら転生して生きているのもすばらしいことなのにそれを利用して原作を自分のものにするだ？ふざけるな！これは物語じゃない。1つの世界だ！異物が勝手していい訳がない。だから俺が呼ばれたんだ。お前が秋斗に何かしようとしたら殺せるようにな。」
まぁ、殺さないけど。
俺は手を離し一夏を地面に落とした。
「それなら！」
「ああ、警察や先生に言ってもいいぜ。自分が転生者であることを言わないといけないけどな。それと」
「俺に勝てると思うならいつでもかかってこい。力の差をみせてやるからよ。」
そう言い残して俺はその場をあとにした。

夜
セシリアｓｉｄｅ　ｉｎ　部屋
私は今お母様たちに報告の電話をかけています。クラス代表を決める戦いに負けたこと。それの前に日本や男性を馬鹿にしたことを。
「これで報告は以上ですわ。」
『そう。クラスの人やその男性方には謝ったのかしら？』
「当然です！あれは確実に私が原因でした。私の無知も含めて。そし

て自分の目で世界を見ずに女尊男卑なんてふざけた風潮に染まった私の弱さが原因です。」
『そう。ならいいわ。これからは今回のことが無いように気をつけなさい。それと戦った男性とはどなたかしら？』
「織斑秋斗と《白銀輝》です。」
『!?その白銀くんの写真と名前を送ってくれないかしら？』
「はい。今送りますわ。」
　私は白銀さんの写真と名前を送った。
『……やっぱりあの時の』
「？」
『明日白銀くんに会ったら伝えてくれないかしら？《あの時はありがとう》って。』
「？わかりました。それでは失礼します。」

翌日
輝ｓｉｄｅ　ｉｎｌ組
「白銀さん。ちょっといいですか？」
「俺のことは輝でいいぜ。んで、何のようだ？」
「でしたら私もセシリアでお願いします。それとお母様から伝言を預かりました。《あの時はありがとう》だそうです。」
　!?オルコットってあのオルコットだよな。あの時って間違いなく列車事件だよな。確かあの時はトランスで変装……してなかった！つまりバレた!?
「セッシー！親の番号教えてくれ！」
「ええ。こちらですわ。というかセッシー？」
　俺はダッシュで人気のない場所に言って電話をかけた。
『かけてくると思いましたよ。あの時はありがとうございました。白銀輝さん。いえ、《白銀のヒカリ》さん』
「気にしないでくれ。元々俺たちはああ言う事件を食い止めるのが俺たちの仕事だからな。それで俺のことだか」
『わかってますよ。あなたの正体は秘密にします。そのかわり、オル

コット家もあなたの組織に協力させてください。』
「わかった。近いうちに組織の者を向かわせる。これからよろしく頼む。」
こうして俺の秘密は守られオルコット家という心強い味方もできた。

現在公開可能な情報

白銀　輝（しろがね　ひかる）
イメージＣＶ　浪川大輔
男
年齢　不明
身長　１７５センチ
体重　６７kg
容姿
灰色の髪に黒目、右目は眼帯している。ＩＳ学園では制服をロングコート状にカスタムしている。（髪型はフェアリーテイルのグレイを少し長くした感じ）
性格
とにかく楽しいこと主義者。相手を傷つけない程度なら自ら進んでいじりにいく。だが他人思いであり誰かが危ない時はたとえ赤の他人でも迷いなく助けに行く。非常に甘党。常に何か甘いものをたべている。なお、授業中のチュパチャップスの摂取は織斑先生、やまや、学園長に許可を得てる。
そして、スタイリッシュ主義者。何かかわす時も無駄にスタイリッシュに決める。
スペック
チート。その言葉がこの世で一番似合うほど人間離れしている。頭の回転も速く動体視力も良い。
伝説
・オリジナルのチェス対戦ソフト「フィフスゲーム」でグラマス含めた５人にオール勝ち。
・ゲームセンターによくあるコントローラーが銃の形をしたゲームで両手でやり最高難易度をノーミスノーコンティニューで完全制覇。
・中学時代にファイナルデッドシリーズの状況になったがシリーズ全ての事故を全部スタイリッシュにクリアして生き残った。（その時にスタイリッシュ主義者になった。）

・漫画やアニメ、ゲームの動きを再現するのが得意であり某アブノーマル生徒会長の黒〇ファントムをマスターしている。

白銀のヒカリ

容姿

髪は白色で腰まで伸びている。目は左目は黒いが右目はロボットの赤いアイカメラを持っている。年齢は自在なため不明。

装備＆戦闘スタイル及び能力

腰にハンドガンを２丁装備している。戦う際は変身（トランス）能力で全身を変形させて戦う。右目は弾道予測（バレットライン）という機能があり弾道を全て見切れる。持ち前の動体視力と長年の経験で右目の弱点である狙撃の初発もかわせるため実質相手が相当のやり手でもない限り銃は効かない。他にも能力があるらしい。

ＩＳ

黒羽（くれは）

全身が黒くロングコートという異様なつくりをしている。装甲は脚の部分と背中のブースター、手の甲に特殊素材の金属板のみとなっている。（ブースターはデスティニーのバックパックをイメージ）銃器は実弾のみマガジンをかえる仕組みであり両袖からマガジンを滑らせたり取り出すことで換装可能となっている。装備は以下のようになっている。なお、単一使用能力は公開されていない。

ハンドガン　×２

ビームサーベル×２

ナイフ　数不明

黒羽　人型

長い黒髪で黒い目。服装は決まってなくその時の気分でコスプレをしたりしている。基本敬語で冷静だけど輝のイタズラには割りとノリノリである。輝同様甘党。と巨乳。（オルコットレベル、下手すると篠ノ之に匹敵する）

白鳳蝶（しろあげは）

全身白。装甲は少ない。（ＯＶＡで千冬が使ったいたやつを白くした感じ）ただし刀を色々なところに装備している。両膝には投擲用の

ナイフがついている。
背中　刀×２
腰（後ろ）刀×２
腰（両側）刀×２
両膝×ナイフ
白鳳蝶　人型
白髪で肩まで伸びたポニーテール。青い目。服はセーラー服固定。
黒羽とは違いフレンドリーなしゃべり方。輝たちのイタズラには冷静に突っ込む担当。ひんぬー。

ボーイ　ミーツ　キャット　ガール

秋斗side

「ねぇ、聞いた？転校生の話。」

「うん。なんか中国の代表候補生みたいだね。」

クラスの女子の会話が聞こえた。中国か。そういえばあいつ元気かな～。

「どうした？秋斗。」

「いや、中国って聞いてあいつを思い出したから。あいつ元気かなって。」

「ああ……。タン　ミーニョンな。」

バンッ!!

「誰よそれ!!思い出すならそこは私でしょうが!!」

ドアが力強く開けられ誰かが突っ込んできた。その声を聞いた瞬間俺と輝は迷いなく行動に出た。

ガッ!↑クロが女の後ろに現れて背中を蹴る。

バッ!↑秋斗が女に巴投げを決める。

ガラッ↑窓辺にいた輝が窓を開ける。

ヒュ～ン↑そのまま女が落ちていく。

バッ!↑さっき落ちたはずの女が教卓の下から出てくる。

「「ジャーン。」」

「「えっ!?今の何!?」

トリックだよ。

「ひさしぶり。元気そうね、あんたたち。」

「鈴か。ひさしぶりだな。ただそろそろ授業だ。うちのクラスの担任は千冬姉だ。」

「えっ!?あの東方○敗を凌駕しそうな千冬さん!?じゃあ、今の内に「逃がすと思うか？」ひゅい!?」

あっ、千冬姉。

「オ……オハヨウゴザイマスオリムラセンセイ。ワタシハコノヘン

デ。」
「ああ。だが教師を馬鹿にした罰がまだ済んでいない。」
スバッ!!
「お～と。ここで織斑先生のゴ〇ドフィンガーが鈴音選手の顔面を捕らえた～!!無言無表情で尚且つ予備動作すらなかったため鈴音選手は対応しきれずにそのままくらった～!!これは1発ＫＯか!?」
クロさんクロさん。無表情でいきなり実況し始めないで。心臓に悪いから。
「それでは皆さんもご一緒に」
「「ヒートエンド!!」」
「にゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!」
なんでクラス全員が言ってるの!?本当1組は仲良いな!!
鈴?まぁ、いい奴だったよ。

昼休み
秋斗ｓｉｄｅ
食堂に行くとそこには
「待ってたわよ!」
券売機の前でラーメン持った仁王立ちしてるバカがいた。
「いや、鈴。そこにいると食券買えないから。席とっといてくれよ。」
「任せなさい!一番いい席をとっとくわ!」
そう言い残すと鈴は早歩きで去っていった。あの早さで歩いてラーメンのスープを1滴も溢さないとは。相変わらず器用だな。
そして、俺と輝は去り際の鈴の言葉を聞いて思った。
((あっ……、これダメなパターンのやつだ……))
数分後
「「……」」
俺、マドカ、鈴、セシリアは気まずい雰囲気に包まれていた。それもそのはず。数分前に「一番いい席とっとくわ!」と言っていた鈴がとった席はごく一般的な対面式の長テーブルだった。
「鈴?」

「何よ……。」
「とりあえず……訳を聞こうか……。
5単語で。」
「窓際、満席。唯一、空席、確保。」
ガチで5単語で返してきた。流石は鈴だ。
「お～。ここにいたか。にしてもあの早さで歩いてスープを溢さないとは。相変わらず器用だな。」
「あぁ、輝。ていうか頭にラーメン乗せた状態でパフェ食べながら普通に歩いて来てる奴に言われても嬉しく無いわ!!てか、ラーメンよりパフェが先なの!?」
流石鈴。ツッコミのキレは健在のようだ。伊達に中学時代に「ツッコミの鈴」と呼ばれてただけのことはある。
「それ広めたのあんたたちでしょうが!!」
ほら、人の心にまでつっこむ。
「流石輝さん。素敵です。」
セシリアさんや。ちったぁ自重しようぜ。
「それにしても元気そうね、秋斗。たまには風邪でもひきなさいよ。」
「ははっ、何だよそれ」
「輝は?」←マドカ
「あんたは大気圏から生身でグーグルアースして足ジ～ンってなってなさいよ。」
おいおい、鈴。何言ってんだ。
「流石の輝も骨折して入院沙汰だと思うぜ。」
「「その程度で済むの!?」」
周りの女子がつっこんでた。おそらく全員1組だろう。
みんなが落ち着くまで
クロ&シロ「キングクリムゾン!!」
「……。」
「何ですか?今の。」
「私に聞かないでよ。」

「で、クラス対抗戦だけど秋斗がクラス代表なの？」
「おう。だからって手加減はしないぜ？」
「当然！むしろ、手加減したら怒るわよ？」
知ってるさ。
そして、みんなが食べ終わって解散してから。
「鈴。」
「何？」
「クラス対抗戦が終わったら大事な話がある。」
「……わかったわ。」
「だから対抗戦が終わったらあの桜の木の下で待っててくれ。」
「何処のよ!!」
それは神すら知らない。まぁ、大事な話があるのは本当だけど。

待ち侘びた対決と侵入者

秋斗ｓｉｄｅ

クラス対抗戦当日

俺、織斑秋斗と凰鈴音はお互い別々のピットで同じ様な顔をしていた。それはまるでお互い漸く待ち望んだ相手と戦える様な、あるいは他の相手とは違い気兼ねなく遠慮なく文字通り「本気」で戦える相手に会えた。そんな戦闘本能むき出しでいてなお楽しそうな顔で笑っていた。

「まさか初戦でお前（あんた）と戦えるなんてな（ね）」

クラス対抗戦　第１試合

１組　織斑　秋斗ｖｓ　２組　凰鈴音

「一応クソ兄貴の相手も見てやるか。」

第２試合

３組　織斑　一夏ｖｓ　５組　護里　乱子

・・・・・・（・・ω・）。

見なかったことにしよう。

気持ちを切り替えＩＳを展開し出撃位置についた。

「織斑秋斗！」

「凰鈴音！」

「白鳳蝶！」

「甲龍！」

「出るぜ！」

「行くわよ！」

両者がピットから出撃した。

「それが鈴の専用機か。お前にぴったりの色じゃねぇか。」

「ありがと。そう言うあんたはそんな装備で大丈夫なの？」

「大丈夫だ。問題ない。」

「あっ、なんかダメそう。」

『試合開始』
　そのブザーの直後に俺は瞬時加速を使い零距離レベルまで鈴との距離を詰めていた。完全に意表を突いたはずなのに鈴はそれに反応し自分の近接武器『双天牙月』を使って防いだ。
「驚いたな。今のは完全に入ったと思ったのに。」
「はっ、どんだけあんたたちとバカしてきたと思ってんのよ。あんたの考えなんてすぐわかるわよ。」
　お互い一旦離れて態勢を整えていると
『秋斗、気をつけて』
　シロか。どうした？
『鈴のＩＳを調べてたらすごいことがわかった。』
　なんだ？
『あのＩＳの名前はシェンロン。その単一仕様能力は神龍といって肩の武装か龍を出してどんな願いも叶え「ないわよ!!でないわよそんなの!!何言ってんのよ‼？」
「ていうか、バカ秋斗‼？出ないってわかった途端にあからさまに落ち込むな‼？」
　鈴のそのツッコミをきっかけにいつもの仲良しメンバーが続々とボケ始めた。
「流石鈴さんです！」←セシリア
「お兄ちゃんのパンティおくれ！」←マドカ
「輝と秋斗と鈴で親子三代かめはめ波。・・・・・・キタコレ‼？」←簪
『ｗｗｗ』←刀奈
「セシリア！何が流石よ！出ないって言ってるでしょ‼？そしてマドカ！素出てるわよ！少しは隠しなさい！次に簪！キタコレじゃないわよ！わたしたち親子じゃないから！かめはめ波撃てないから！最後に刀奈先輩！真剣な顔をしておいて扇子で草を生やさないでください！」
　鈴すごいな～。今のを、一息でツッコミきったんだぜ。とりあえず「鈴お疲れ。」

「原因はあんたのＩＳだって忘れてない？」
シランナ！
「こいつ！これでも喰らいなさい！」
鈴の両肩の武装がこちらをむあた瞬間俺は嫌な予感がしてすぐさま横に飛んだ。それでも間に合わなかったのか腕にダメージを受けた。
「なんだ？今のは」
『衝撃砲。空気を圧縮して撃ち出す甲龍の武装の１つ。死角が無い上に弾が目で見えないのが特徴だよ。』
弾が見えないのか。それでもやりようはある。
俺は鈴に真っ直ぐ突っ込んで行った。
「正面から突っ込んでくるなんてずいぶんチャレンジャーね。喰らいなさい！」
ここだ！
俺は急に移動した。次の瞬間、となりを轟音と共に何かが通り過ぎて行った。
「嘘‼？かわしたの⁉？見えないはずなのに‼？」
「簡単な話だ。あえて正面にいることで射程範囲を絞り、あとはよく見て空間が歪んだと思ったら範囲から出て衝撃砲を避けるだけだろう。」
「それって見てからかわしてるってことでしょ？あんたどんだけ化け物じみてんのよ。」
あの人だったらカンでかわすぜ？
「じゃあ、次は俺の番だな。」
俺はそこら中に数十本のナイフをばら撒いた。だがこれは相手に当てる為のものでは無い。
「行くぜ。我流剣術、月下神楽！」
いつものように連撃を叩き込む。しかも月下神楽はナイフ自体にエネルギーが纏っているためそれを吸収、放出をする擬似瞬時加速を行っているためどんどん速くなる。

数分後
鈴をもうすぐ倒せるところで止まった。
「あんた知らないうちに強くなったじゃない。」
「そいつはどうも。」
そう言ってトドメを刺そうとした瞬間にアリーナのバリアを何かが貫いてきた。
砂煙が止んでそこにいたのは5体のＩＳだった。
バリアの破壊、正体不明のＩＳ5体の侵入。それだけで生徒たちが大騒ぎになるには十分だった。
『織斑くん、凰さん！正体不明のＩＳです！今すぐ避難してください！』
山田先生か。
「残念ながらそれは無理そうです。俺たち2人共にすでにロックされています。」
『そんな『織斑、凰、聞こえるか？』
「なんですか？織斑先生。」
『生徒たちを守ってくれとは言わない。敵を倒してくれとも言わない。死ぬな。必ず無事に帰ってきてくれ秋斗、鈴音。』
「・・・・・わかってる。先生方が来るまで良い具合に時間を稼ぐよ。千冬姉。」
「と言うわけだ。悪いな。面倒なことに巻き込んで。」
「何よ今更。付き合うのは当たり前でしょ。それに私だって狙われているのよ？」
「そうだったな。それじゃあ、いっちょ良い感じに注意を引くとすっか！」
俺と鈴で1回ずつ攻撃をあてその後は相手のレーザーを避け続けた。何故1回しか攻撃をしなかったのか。さっきまで1回攻撃して来なかったことから決められたアクションのみに対応するようにし

ている。つまり無人機と判断した。コンピューターなら1回攻撃すればそれを敵と判断して最優先にするからな。現にアリーナ内の生徒はほとんど避難完了している。そろそろ決めるかな。

『秋斗ーーーーー!!』

この声は箒!?放送室か！

『男ならその程度の敵に勝てなくてどうする!!?』

何してんだあいつは!!?敵の武器が放送室を向いている。その下は出入り口で生徒も集中している。

箒が危な「うおおおおおおおおお!!?」クソ兄貴がシールドバリアを破壊して入ってきた。・・・！しまった！あいつに気をとられた。敵ＩＳがレーザーを発射している。ダメだ。これじゃあ間に合わない!!?

「箒ーーーーーーーーーーー!!?」

白夜の黒十字最強の力

輝ｓｉｄｅ

俺は現在クラス対抗戦が行われている第３アリーナの屋根の上にいる。先ほど『至急頼みたいことがある。』と通信が入ったからだ。すると、通信が入った。

『こちらヴィーナス。チート聞こえる？』

この自称ヴィーナスさんはスコールだ。そしてチートとは通信時の俺の呼び名らしい。

「誰がチートだ。」

『えっ？あなた自分がチートじゃないと思っていたの？』

本気で『こいつ何言ってんの？』的な感じに言われた。

「・・・・・・で何の用だ？」

『奴らが動き出したわ。』

スコールが言う奴らとはＩＳを使える女こそが偉い、男なんて女に従ってれば良いと考えている女性権利団体（イカれた集団）と世界を武力で支配して全てを掌握しようとしている悪夢伝染（ナイトメア・インフェクション）、通称傍迷惑の会である。過去にあったオルコット夫妻暗殺未遂事件など俺たちが解決してたのもこいつらが関わっている。

『その通称を使っているのあなただけよ？』

なんか普通に人の心読んでるし。何だ？俺の周りの人たちは全員心を読むオ○ダーかＮ○ＳＴか？

「で、そいつらが今回は何しようとしてんだ？」

『無人のＩＳを作ってるらしいの。今回はその稼働実験とデータ収集ね。既に５機がＩＳ学園に向かっているわ。』

おっ？あれか？

「こちらでも確認した。」

『ちょっと待ちなさい。こちらのレーダーだとまだ５kmは離れてるのだけれど？』

「今日は乾燥してるからな。ドライアイのせいで５kmしか見えない。」

俺の能力を使えば１０km先まで見えるけど。
やがて、敵ＩＳがやってきてアリーナに向けビームを撃ち侵入した。
『一応確認するわ。何故侵入を許したの？』
「秋斗がどのくらい強くなったかを見たかった。それに急に付近で爆発が起きれば面倒なことになるからな。」
『そうだと思ったわ。それじゃあ、後はよろしくね。』
「あいあい。変身（トランス）フォームチェンジ　モデル　２５」
輝はトランス能力を使い変身した。かつて１人の少年を助けた姿に。
「さてと、それじゃあ行きますか。」
輝はアリーナから飛びおりた。

―――――――――――――――――――――――――――――

秋斗＆　ｎｏｓｉｄｅ

「箒ーーーーーー!!」
箒がいた放送室に無人機のレーザーが直撃した。くそっ！俺が反応できなかったせいで箒は・・・・・・。
「どうした～？少年。まるで余計なことをしたとはいえ自分の反応が遅れたせいで幼馴染（笑）がレーザーで消し飛んだみたいな顔をして。」
その言葉を聞き顔を上げて放送室を見た。そこにはかつて自分を助け自分をここまで強くしてくれた憧れの存在が放送室の窓の蓋に座っていた。
「誰だおまえは。」
「お嬢さん。ここは俺に任せてさっさと行きな。」
「ふざけるな！私には秋斗を応援するという「おっと、言い方が悪かったか。じゃあ、いいかたを変えよう。
戦う力もまわりのことも考えずあまつさえ戦場をかき乱す奴に用

はねぇ。むしろ邪魔だ。とっとと失せろ。」
　そう言い残して窓のふちから飛びおり秋斗たちのところにきた。
「よう少年。困ってるようだから助けに来たぜ。」
「おいお前！これは僕のイベントだ！余計なことを」
　一夏が訳の分からないことを言いながら白銀の輝（以下、白銀）に食ってかかったが言葉を途中で遮られた。途中で白銀が一夏の顔面に回し蹴りをして吹き飛ばしたからだ。
「テメェもとっとと失せろクソガキ。何もできねぇくせにしゃしゃり出て来んな。」
　先生、本人聞いて無いっす。
「さて、少年と猫娘。「誰が猫娘よ!!」ここは俺に任せてさがってな。」
「ちょっと！5体もいるのよ!?まさか1人でやる気!?」
「まぁ、大丈夫なんじゃないか？ヤバくなっなら援護よろしく。」
　そう言い残して白銀は秋斗たちの前に出た。
「それじゃぁ一丁。クールに決めるぜ!!」
　秋斗は知っていた。白銀がその言葉を言う時は戦い始める時だ。
　白銀はその場から一瞬で消え次の瞬間には敵ＩＳの後ろにとんでいた。１度の跳躍で３０メートル近くを移動したのだ。しかも敵はＩＳ。当然ハイパーセンサーも付いている。にもかかわらず敵ＩＳは反応出来なかった。それほどの速さで移動したのだ。そのまま移動中に変身させた剣状の右腕で敵ＩＳの頭を切り落とした。地面に着地して間髪入れずに踏み切り別方向にいた敵ＩＳの頭を掴み地面に叩きつけた。そのまま胴体を踏み頭をもぎ取った。次にその頭を白銀の後ろ、しかも遠くから撃とうとしていた敵ＩＳ目掛けて投げつけた。頭は敵ＩＳの頭に当たりのけぞった。その間に近づき膝の内側を蹴り体勢を崩した。そして蹴った際に振り抜いた脚を今度は逆に動かしいつの間にか踵にナイフ状の物が形成されておりそのまま敵ＩＳの顔面に後ろ回し蹴りを決める要領でナイフを突き刺した。ナイフを消し脚を降ろしたら既に狙いを決めていたのか別のＩＳに向かって行った。右ストレートを敵ＩＳの顔面に決めようとしたが、敵ＩＳに手首を掴まれて防がれた。ように見えたが白銀はそれを読

んでいたのか狙っていたのか右手を急に開き掌からレーザーのようなものを出して敵ＩＳの頭を消し飛ばした。そして最後の1体に近づきボディブローをして敵ＩＳの身体を貫いた。その手には敵ＩＳのコアが握られていた。敵ＩＳが最後の一撃を放とうと持っていた武器にエネルギーを溜めていたがそれに気づいた白銀は冷静に腕を抜き取りながら上空に投げ飛ばした。

「淑女(レディ)狙いは？」

『完璧ですわ。』

その声と同時に敵ＩＳは何かに撃たれ爆発した。レーザーの撃たれた方向を見たらそこにはブルーティアーズを纏ったセシリアがいた。

「さて、こいつらも倒したことだし事後処理は他の人たちに任せて事情聴取に行きますか。」

こうして白銀たちは敵ＩＳ5体を全滅させた。その間僅か1分もかかっていなかった。

事情聴取と告白（転生者とモップざまぁ）

白銀（輝）ｓｉｄｅ

俺たちは今学園長室にいる。先ほどの襲撃事件についての事情聴取のためだ。この場には、用務員のじーさん、俺、千冬、秋斗、凰、オルコット、一夏、篠ノ之がいる。

「こんにちは、私は学園長の轡木十蔵と言います。この度はありがとうございました。さっそくですが、あなたのことやあの無人機のことを聞いてもよろしいですか？」

「ああ、俺は白銀の輝。白夜の黒十字の１人だ。あの無人機は恐らく悪夢伝染の奴らの仕業だな。奴らは武力で世界を支配しようとしている。あの無人機はそれのための試作機、つまりただのプロトタイプ。雑魚の雑魚だ。そして、その無人機をＩＳ学園のこのタイミングで来れるようにしたのは女性権利団体。奴らの力を使えばＩＳ学園のスケジュールを知るのも簡単だ。そして、俺はそれを止める為に来たと言うわけだ。」

「そうですか。それはありがとうございました。お陰で死傷者は０でした。

それで、そちらからは何かございますか？」

「そうだな。こちらからはそこの馬鹿２人の処分についてを知りたいな。」

俺は篠ノ之と織斑を指指しながら言った。

「何!?僕たちが何をしたと言うんだ！」

「無人機の襲撃でアリーナは混乱状態。しかも相手はバリアを貫く力を持っていた。それでもバリアがあれば安全だ。でも、お前はそれを破壊して行った。何も出来ないのに。どれだけの生徒を危険に晒したと思ってんだ？」

「それは僕がカッコよく倒そうと「黙れよガキが」何!?」

「カッコよく倒す？バカが。あのフィールド内はいつ死んでもおかしくない戦場だったんだ。そんな場所でカッコよく？ふざけんな。

ヒーローごっこなら他所でやれ。

・・・・・・まぁ、それ以上に許せないのはそこの小娘だがな。」
「どう言うことだ！私が何か悪いことをしたと言うのか!?」
「なら聞くぞ？何故あの時放送室を占拠してあんな真似をした。大声を出せば反応することぐらいすぐにわかるはずだ。しかも放送室にいた生徒まで気絶させて。」
「私は秋斗に喝を入れようとしただけだ。それにあれは私の邪魔をして来たのが悪い。私は悪くな「ふざけないでよ」何!?」
おっと、一瞬あいつが出てきたな。まぁ、あの篠ノ之は人の命がかかることをしておいて《悪くない》とか言ったからな。そりゃあ怒るよな。むっ？今のあいつが放った殺気で転生者君(笑)は気絶したか。まぁ、どうでもいいことだ。それよりも
「失礼。だがな、お前は自己満足の為に他人を巻き込んで殺しかけたのに悪くない？あいつらが邪魔をした？ふざるな!!」
そして俺は篠ノ之の胸倉を掴んだ。
「いいか？お前が何をしようがどうでもいいしどこで死のうがお前の【自己満足の結果】だ。知ったこっちゃねぇ。だけどな？その自己満足に他人を巻き込むな!!あと、【秋斗の為】とか言うなよ？【お前１人が命捨てんのに他人を使うな！他人を巻き込むな！】俺からは以上だ。」
その言葉に異議を唱える者はいなかった。誰もが正論だと思っているからだ。篠ノ之は俺の気迫に負けて狼狽えている。
その後すぐに解散となった。
篠ノ之は反省文２００枚と２週間の定額、間違えた停学。２ヶ月の土日の道徳の補習という罰が言い渡された。

―――――――――――――――――――――――――――――

秋斗ｓｉｄｅ
その日の夕方の１６時頃。俺と鈴は学校の屋上にいた。あの時の約束を果たす為だ。そして鈴が来て俺たちはむかい合うように立っ

ている。
「来たわよ秋斗。何よ、大事な話しって。」
「ああ。鈴も知ってるように俺は中学まで学校だけじゃなく街でも『出来損ない』や『織斑の恥』と言われ罵倒され続けた。本当にキツかったし何度も心が折れかけた。それでも数馬や弾、蘭や弾の家族に何度も助けられた。その中でも、お前に1番助けられた。お前の笑顔に何度も救われた。だからって言うのも変だけど、鈴!!俺と付き合ってくれ!!」
俺は頭を下げながら言い切った。返事を待っていても一向に返事が返ってこないから顔を上げたら鈴は涙を流していた。
「泣くほど嫌だったか。それなら「違うの!」えっ?」
「私もずっと好きだったから。秋斗に言って貰えて凄く嬉しい。」
「じゃあ!!」
「私で良ければ喜んで!!」
こうして俺たちはお互いの唇を重ね会い結ばれた。

んで入り口のところでウインクしながらサムアップしてこっちを覗いてる輝と刀奈先輩。その親指はへし折って欲しいって事で良いんですね?ならお望み通りにへし折ってあげますよ。フジッリ状に。

2人の転校生（1組は末期）

秋斗ｓｉｄｅ
俺と鈴が付き合い始めた翌日。
クラスの女子たちがＩＳスーツはどこのが良いか話していた。
「ねぇ、白銀君と織斑君のはどこの？」
「ユニ○ロ」↑輝
「Ｇ○」↑俺
「「「割とお手頃!?」」」
クラス全員につっこまれた。
1組は今日も仲良しです。

ーーー

「今日は、このクラスに転校生が来ます。それでは入って来てください。」
そして扉が開き転校生が入って来た。
えっ?ちょっと待って?
「まず僕から。シャルルデュノアです。フランスの代表候補生です。日本には慣れてないので迷惑を掛けると思いますがよろしくお願いします。」
・・・・・男?
「き」
やべ、音爆弾が来る!!
慌ててマドカと俺が耳を塞ぐと
「「「きゃーーーーーーーーーーーー!!!」」」
ぐおぉぉぉ!!うるさっ!!耳を塞いでるのに耳が痛え!!
「男よ!3人目の男よ!」
「織斑君や白銀君とは違う守ってあげたくなる系の!!」
「このクラスで良かったーー!!」
ここまでは良かった。
「ｗｒｙｙｙｙｙ!!!」

「最高にハイってやつだーー!!!」
「ペンが!アイディアが!ネタが止まんねぇぜ!!!」
「お母さん生んでくれてありがとう!!今年誕生日プレゼントはその辺の雑草や小石じゃなくってドクダミあげるね!!」
「私とヤラナイカ?」
どうやらこのクラスは末期のようだ。
「お前たち他のクラスに迷惑だ。静かにしろ。」
「「・・・・・・・・・・・・・・。」」
すげぇ、怒鳴った訳ではないのに1発で静かになった。
「次だ。ボーデヴィッヒ。自己紹介しろ。」
「はい。教官。」
「私を教官と呼ぶな。ここでは先生だ。」
「はい。わかりました教官。」
全くわかってないじゃん。
「ラウラ・ボーデヴィッヒだ。」
・・・・・・えっ、終わり?そんな訳ないよな。
「以上だ。」
終わりだった。その自己紹介はどうかと思うぜ。←自分のことは棚の上に
あれ?ボーデヴィッヒさんが俺の方に来た。
「お前が織斑秋斗か?」
「そうだが?」
そう答えた瞬間ビンタされた。そして俺はその衝撃を利用して右隣りの輝にストレートを決めた。
「ステキな流れ弾!?」←輝
「白銀君が死んだ!!」←相川さん
「この人でなし!!」←クラス全員
だって俺たち親友だし。
俺だけ痛い目にあって輝が無事ってなんか癪じゃね?
秋斗ｓｉｄｅｅｎｄ
輝ｓｉｄｅ

バカな!!男の格好をしているが間違いなくシャルロットデュノアだ。数年前に本社に乗り込んで警告したのにあのク◯ＢＢ◯!!（ＢＢＱじゃねえぞ?）今度こそ潰すか。あとで千冬にフランスに行く許可をもらうか。一応今もあいつには潜入してもらってるから潜入は楽だと思うし。まぁ、今はシャルロット次第だがな。
そんなことを考えていたら左からいきなりストレートが飛んで来た。
「ステキな流れ弾!?」
どうやら犯人は秋斗のようだ。恐らく自分だけ食らうのは癪だからだろう。まぁ、俺は器が大きい大きい人だ。だからあとで１０分の９ごろしで許してやろう。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
時は流れてアリーナでの授業（ただしセッシー&鈴たんＶＳ山ちゃんの闘いは省略）
「ついでだ、白銀。お前もＩＳを展開して前に出ろ。」
「あいつ（秋斗）に良いところを見せるチャンスだぞ?」
「そのチャンスが俺に得があるとでも?」
「無いな。」
じゃあ言うなや。

組み合わせ
俺ＶＳ山ちゃん&セッシー&鈴たん
「・・・・・・・・・・・。」
「それでは模擬戦を「ちょっと待てやーーー!!!」なんだ白銀、五月蝿いぞ。静かにしろ。」
「そりゃあ五月蝿くなるよ!明らかおかしいでしょう!なに?１対３て!!」
「そうですよ、織斑先生!これは明らかに力の差があり過ぎます!俺も参加します!」
秋斗!お前わかってくれたか!さすが俺の友達だ!

組み合わせ
俺ＶＳ山ちゃん＆セッシー＆鈴＆秋斗（バカ）
「変わってねぇ!!むしろ悪化した!!」
「「「えっ？妥当じゃない？」」」
「そうかよ！こうなったらやけくそだ！やったろうじゃねぇか！」

結局勝てた。

―――――――――――――――――――――――――――――

放課後
「それで白銀、何だ？話とは。」
「デュノアのことだ。わかってんだろ？あいつの正体。デュノアが秋斗に余計なことをする前になんとかしたい。だから1週間ほどフランスに行くからそれの許可が欲しい。」
「わかった。申請などは任せておけ。そのかわり秋斗とデュノアをたのんだぞ？」
「もちろん。白夜の名にかけて。」

フランスの貴公子の暴露（一夏君は出ないよ？）

秋斗ｓｉｄｅ

「今日から同室になるシャルルデュノアです。」

「おう、俺は壁側のベッド使ってるから窓側使ってくれ。」

「うん。ありがとう。」

「それと転校初日で疲れてるだろう？先にシャワーどうぞ。」

「ありがとう。そうさせてもらうよ。」

シャルルはそう言って着替えを持ってシャワー室に向かった。やがてシャワーの音が聞こえ始める。

「あっ、そういえばシャンプー切れてた。」

俺は新しいシャンプーを持っていきドアを開けた。

「シャルル～、新しいシャンプーもってき・・・た・・・ぜ・・・。」

言葉が続かなかった。何故なら全裸のシャルルがいたからだ。シャルルの身体は俺たち男には無いはずの大きい夢と希望（比喩）あった。そしてむしろあるはずのエクスカリバー（比喩）が無いからだ。

「・・・・・・えっと、ごゆっくり？」

シャワー室を後にした。

数分後シャルルが出て来た。

「えっと・・・・・・、どうゆうこと？」

シャルル説明中（長いので省略）

「シャルルはそれでいいのか？」

「いいのかも何もバレた以上僕はどうしようもないよ。フランスに戻ってよくて幽閉最悪消されるかな。」

「どうなるかじゃない！お前自身がどうしたいかを聞い出るんだ！」

「そりゃあ、ずっとここにいたいよ！みんなといたいよ！自由に生きたいよ！」

「じゃあ、一緒にこれからどうするか考えよう。」

「ありがとう、秋斗」
「つってもどうすっかな。」
と考え始めた途端。
「話は聞かせてもらった!!」
「「ファッ!?」」
俺の使ってる机の引き出しからマドカが出て来た。
「マドカ！今の話全部聞いてたのか!?いつから!?」
「待って秋斗!!その前にどうやって引き出しに入ってたのかつっこもうよ!!」
「そうだなシャルル、お前はドラえもんか！」
「違うよ秋斗!?ツッコミが違うよ!?「そんなことよりデュノアさん」マドカさんも！そんなことで済まさないで!?」
「今私が持ってる携帯はある人に繋がってる。この人に助けを求めればあなたは自由になる。でも、あなたの『全て』を失うことになる。さぁ、どうする？どうしたい？」
「決まってるよ。助けて!!僕の今を全部壊してもいい!!僕は自由にして!!」
シャルルがそう叫ぶとマドカで満足した顔で携帯をスピーカーモードにした。
『わかった。こっちは任せろ。お前は４日分の荷物と外泊申請をしておけ。』
携帯から俺の師匠の声がした。
「それじゃあ、頑張ってね。」
そう言ってマドカはドアから帰っていった。
あっ、帰りは普通なんだ。

あれ？戻って来た？

「そういえばお兄ちゃん。デュノアさんの裸見たことを詳しく聞いて

なかった。」

Ｏｈ。俺明日校舎裏で頭だけ出して埋まってるかも。

突撃！隣りのデュノア社（ちゃんと潜入します）

輝（白銀の輝Ｖｅｒ）ｓｉｄｅ

「さてデュノアのコールもあったし行くか。」

俺は今フランスのデュノア社の前に来ている。デュノアが助けを求めて来た時＋どこぞのアホ（デュノア夫人）の制裁の為だ。ちなみに俺の服装は黒のスーツである。潜入目的なのにいつもの格好だと目立つ。ちゃんとトランスはしてるぜ？

まず入るところからだ。

俺は裏口の警備員用の出入り口の方に向かった。今は１２時半。この時間にちょうど警備員が昼飯のために出てくることは潜入している仲間からの情報で把握済みだ。しかもこの会社はパスを首掛け式ではなくポケットにクリップで付ける式を採用している。そのため、通り過ぎる際に指２本でスるのは簡単だ。

ドンッ

『すみません。』

俺はわざと警備員にぶつかりその際に気づかれないように入社パスをスった。そのまま裏口に向かいスったパスを使って裏口のドアを開け中に入った。パスはドアを閉める前に外に落としておく。そうすればドアから出る際にパスを使ってそのまま落としたととれるからだ。

中に入った俺はまず警備員更衣室に入り制服を拝借した。それをスーツの上に来て監視室に向かった。社内の監視カメラや防犯システムはここで管理しているからだ。

『戻ったぜ。』

『随分早いな。昼はどうした？』

『いやぁ、いつもの店が混んでてな面倒だから簡単なので済ませることにした。』

俺は予め用意していたファーストフード店の紙袋を見せる。

『そういえばアベル（目の前にいる警備員の名前）。○○部のアナベラ（その部署でかわいいと評判の社員）が呼んでたぜ。ここは俺に任せ

て行って来いよ。』
『マジか！ちょっと頼んだ！』
　そう言ってアベルは出て行った。俺が言った部署は３２階にあるから１０分は戻ってこない。その内に俺は防犯システムの細工に取り掛かる。と言っても束に用意してもらった細工用のＵＳＢがあるから簡単だが。これで監視カメラにはダミー映像がバレないレベルにリピート再生され続ける。次に赤外線などのセキュリティーも同じＵＳＢで無力化する。これでセキュリティーは問題無い。俺はＵＳＢを外し監視室を後にした。誰にも見つからないように移動してエレベーターまで来て１人で乗った。社長室のあるフロアのボタンを押した。この階のボタンを押した場合エレベーターは途中では止まらないことになっている。エレベーターが動き出し目的の階に着く間に警備員の制服を脱ぎエレベーターの天板を開けそこに制服を隠した。やがて社長室のある階に着いた。廊下の赤外線や監視カメラは細工済みなので問題無く堂々と進む。この階は基本デュノア社長とデュノア夫人、秘書しか使わない。しかも今日は２人とも視察や会談で不在。秘書は心配ない。
　社長室に入って社長の机に手をかける。シャルロットとの契約書や戸籍書あらゆるものがこの机にあるはずだ。よく漫画やドラマで隠し部屋や隠し金庫に隠しているが重要なもの程近くに置いておくものだ。鍵付きの引き出しをピッキングして開ける。案の定シャルロットの不利な書類が隠されていた。俺はその書類に特殊な薬品をスプレーで吹きかける。この薬品は紙を脆くする効果がある。全部に吹きかけた後引き出しを戻し鍵を閉め全てを元に戻し社長室を後にしエレベーターを使って降り会社から出て任務完了だ。
　さて、あとはシャルロットが来るだけだ。

威風堂々と因果応報（ちよいよいネタ入ります）

シャルロッツｓｉｄｅ

僕はあの電話の人に言われた通りフランスに来ている。空港で待っていると１台の黒いベンツが停まった。どうやら会社からの迎えのようだ。私が乗ると車は走り出した。運転手は帽子を深く被っていて顔がよくわからないが見えてる範囲から判断するに２０代だろう。

「あの～、あなたは？」

「ついこの間送迎担当になったセバスチャンです。」

「それはセバス・チャン？苗字か名前がセバスチャン？それとも名前がセバスで親しみを込めてちゃん付け？」

「フルネームはセバスチャン・セバスチャン・セバスチャンですよ。」

「そんなゴリラの学名みたいな!?」

そこから僕と運転手さんは雑談を続けた。学校のことや友達のこと、そしてやがて家族の話しになり上手くいってないことやどうしたら良いかを話した。

「あなたは今までのことから少し周りを信じられなくなっていると思います。もう少し周りを信じても良いかもしれません。少なくともあなたは周りの人たちに愛されてると思いますよ。それと１度自分の思いをぶつけてみるのも良いと思います。とにかく１番大事なのは自分から行動する事です。自分から行動に出れば周りもそれに応えてくれるかもしれませんよ。」

少し気持ちが楽になった気がした。

色々話しているうちに会社に着いた。

「一緒に来てはもらえませんか？」

「それはできません。私はあくまで運転手です。それに不安になることはありませんよ。あなたはただ義母に会って報告と話しをするだけです。あなたは何も悪いことはしていない。なら、胸をはりなさい。」

「また会えますか?」
　僕がそう聞くとセバスさん（長いから）は少し笑った。
「ええ、会えますよ。もしかしたらあなたが思っている以上に早く。」
「さぁ行きなさい。シャルロットデュノア!行って自分の未来を掴みなさい!」
　そう言ってセバスさんは背中を押してくれた。

――――――――――――――――――――――

僕は今社長室の前にいる。今から僕は義母でありデュノア社社長夫人であるアントワネット・デュノアにか会う。そして僕の思いをぶつける。
「最後にエリザさんに会いたかったな。」
　エリザさんは秘書であり僕の面倒をよく見てくれた優しい人だ。たくさん話したし、相談にものってくれた。僕も母親のように思っていた。
「行くか。」
　そして僕は社長室に入って行った。
　目の前の社長席にはアントワネット・デュノアが座っていた。苗字より名前の方が長いこれいかに。あっ、僕もだ。
　そして、僕はＩＳ学園でのことを報告した。
「それとお願いがあります。」
「何かしら?」
「僕を自由にしてください!正直今までのここでの生活は楽しくありませんでした。ＩＳ学園では楽しいことがたくさんあります。でもその楽しい時間は3年しかありません。3年が過ぎればまた地獄に逆戻りです。そんなの嫌です!僕を僕として見てくれる人たちといたいです!だから僕を自由にしてください!」
「あなた何ふざけたことを言ってるの?あなたは私の姉、ジャンヌが産んだ子よ。ただでさえ嫌いだったあの女の娘でも私は必死に我慢して育ててきたのよ?あなたはその恩を仇で返すの!?」
　僕はこの言い方に今まで怯えて何もできなかった。でも今は違う。

セバスさんに背中を押して貰った。エリザさんがいた。ＩＳ学園にも友達がいる。だからもう何も怖くない！言ってやる！今までずっと言いたかったことを！
「僕はあなたの娘じゃない！私の母親はジャンヌだけだ!!」
　言ってやった。思い残すことは沢山あるけどそれでもずっと言いたかったことを言えたからスッキリした。アントワネットに殴られることを覚悟して目を瞑った時にドアが開いた。
「よく言えましたね。シャルロットデュノア。」
「セバ「お前は送迎係のジョナサン!?」ス・・・えっ？」
　名前ジョナサンじゃん。セバスチャン違うじゃん。
「ジョナサン？違うな！」
　ジョナサンも違うんかい。じゃあ誰やねん。
「ある時は送迎係。またある時は・・・・・・。」
「・・・・・・」
「してその正体は！」
　送迎係しかないんかい。
「白夜の黒十字が1人！白銀の輝！ここに参上！」
　白銀の輝!?世界中のテロに介入して解決しているあの!?
「アントワネット・デュノア。あんたは終わりだ。シャルロットデュノアとの関係も含めて全てな。」
「何を言ってるの!?私とシャルロットの関係はここに書類で」
「そんなのどこにあるんだ？」
「そんなのここに」
　そう言ってアントワネットは鍵のついた引き出しを開け書類を出した。その瞬間書類はボロボロと崩れていった。まるで何十年、何百年と経って劣化したかのように。
「嘘!?何で!?」
「もう1度聞くぜアントワネット・デュノア。そんなのどにあるんだ？」
「そんな・・・・・・・なんで・・・・・・・。」
「『こんなことができたか』か？そうだな。そろそろ入ってきたらどう

だ？」
白銀の輝がそう言うとドアから誰かが入ってきた。
「エリザ!?」
そう。私の面倒をよく見てくれたエリザさんだった。
「こいつが手伝ってくれたからだよ。」
「そんな!?エリザ!!あなたは私の秘書でしょ!?何でこんなことを!?」
アントワネットがそう言うとエリザさんは大きくため息をついた。
「はぁ～、いくら１０年近く会わなかったとはいえ髪型を少し変えて眼鏡を掛けただけなのに気づかないものかしら？」
そう言ってエリザさんは三つ編みを解いて眼鏡を外した。
・・・・・・・って・・・・・・・嘘・・・・・・・どうして・・・・・・・
あなたが・・・・・・・。
「あなたは・・・・・・・ジャンヌ・デュノア!?生きていたの!?」
・・・・・・お母さん!!
「ええ、彼や彼の仲間のおかげでね。そして、シャルロットとの関係に関する書類やバックアップは役所のも含めて全部抹消したからもうあなたとシャルロットは何の関係もないわ。それとあなたに今までの不正や汚職も警察にリークしておいたからあなたは終わりよ。」
「くっ、どうりで可笑しいと思った。『エリザベート・ハナコ』で通称『スティーブ』って履歴書に書いてあった時に気づくべきだったわ。」
いや、気付こうよ。明らかに偽名じゃん。何で採用したのさ。いや、そのおかげで助かったんだけどね。
「さぁ、ジャンヌ。シャルロット。帰るぞ。」
そう言って白銀の輝は踵を返し歩き出した。口笛を吹きながら歩く姿は今白銀の輝が吹いている曲『威風堂々』そのものだった。
シャルロッツｓｉｄｅ　ｅｎｄ

輝ｓｉｄｅ
俺たちは今アイリスの花畑に来ている。ジャンヌが生前（死んでないけど）シャルロッツと来た思い出の場所らしい。
「本当にお母さんだよね。嘘じゃないよね。」

「ええ、あなたのお母さんのジャンヌ・デュノアよ。ごめんね。来るのがおそくなって。みんなと連携するのに手間取っちゃった。」
「えっ?・みんな?・どういうこと?・」
「どういうことも何も本社にあんな簡単に潜入できる訳ないじゃない。それに私は10年近く潜入してたのよ?・そんなに潜入してたら普通はバレるわよ。それなのに何故今までバレなかったか。それはみんなが協力してくれたからよ。」
「えっ?・えっ?・」
シャルロッツ混乱してるな。それもそうだ。今まで1人だと思ってたらみんなが協力してるって言われたらな。
「私を黙認してたのはみんな。彼がこの間書類抹消のために潜入する際に社長とアントワネットが揃って不在だったのは秘書だった私と人事部のおかげ。そして何よりこの計画を立てたのはあなたの父『エリック』なの。」
「だから車の中で言ったろ?・『あなたは周りの人たちに愛されている』と。」
自分が愛されているという事実にシャルロッツは泣き出した。
「いいのよシャルロット。今までよく我慢したわね。さぁ、今まで我慢してた分思う存分泣きなさい。」
ジャンヌはシャルロッツを優しく抱き締めた。その温もりにシャルロッツはさらに泣き出した。
まぁ、今このままにしておくか。

――――――――――――――――――
しばらく泣いてシャルロッツも落ち着いてきた。
「ほら、これで拭け。かわいい顔が台無しだぜ。」
俺はシャルロッツにハンカチを渡した。
「ありがとうございます。」
チーン
フキフキ
「おいコラ。」

こいつ人のハンカチで涙拭いた後に鼻かみやがった。
「ありがとうございました。」
「いや、いらんがな。」
返してくんな。色んなことがあった直後にアレだけどこいついっぺんシバいたろか？
「あらあら、誰に似たのやら。」
「お前だよ。お前。」
こいつの場合涙すら拭かずに直鼻かみにいったからな。
「そういえば協力してくれた社員はみんなラビット社に再就職できるようにしておいたぜ。」
「何から何までありがとうございます。」
「さぁ、これでお前は晴れて自由だ。学園生活を謳歌しろ。」
「はい！」
シャルロッツはとびっきりの笑顔で返事を返してきた。

「ただし、アベル。テメェはダメだ。」
「何でや!!」
冗談だよ。つうか、いたのかよ。お前。

いつもとはどこか異なる白ＶＳ黒い雨（ＶＴの解決は次回だよ。）

白銀の輝ｓｉｄｅ

俺は『本部によるから』と言ってシャルロッツを先にＩＳ学園に帰らせた。本当は黒羽の専用武器が出来たと報告を受け取りにきただけだが。

そして、ラビット社に着いたら束（たば）が出迎えた。

「ちなみに束で『たばね』って読むんだよ？」

そうなのか。初めて知った。

「まぁ、いいや。それよりお待たせ。ひーくんの武装がやっと完成したよ。」

目の前の机には銃口が２つ並んだ銃、ベレッタ二丁をグリップでくっつけたような銃、グロック１７、ＭＳ７００があった。

「これが、ダブルバレル・ピストル『ダブルドラゴン』これはまぁ、アメリカに実際にあるダブルバレル・ピストルとほぼ同じだね。違いをしいて言うなら本来のダブルバレルより威力が高くて対戦車ライフル並の威力があることかな。これ一丁でミサイルや何処ぞのドイツの巨大レールカノンも撃ち落とせるよ。」

何それこわい。

「そしてこれが『止まぬ嵐（ノンストップ・ストーム）』。見た目はグロック１７そのものだけど連射力がマシンガンやサブマシンガン、アサルトライフルよりも高いんだ。」

「そしてこれが『オルトロス』。見た目はベレッタを二丁付けた感じだけどこれも連射力が高いんだ。連射力はノンストップ・ストームよりは低いけどそれでもマシンガンとかよりは断然高いよ。」

「そして最後に『ヘイムダル』。見た目はまんまＭＳ７００だし、威力もそのまま。１番の特徴は射程距離。ひーくんのその目の力を使えば地上から成層圏まで届くよ。それと全部二丁ずつ用意しておいたよ。」

「ありがとう束。俺の望んだ通りだ。それじゃあ、俺はＩＳ学園に戻るよ。」
俺は並んでいる銃を全て量子変換してラビット社を後にした。

ＩＳ学園
俺がＩＳ学園に着くと何故か騒がしかった。この騒ぎがなんなのか聞くためにすぐそこにいた生徒に話しかけた。あっ、この娘１組の人だ。
「ちょっといいか？この騒ぎはどうしたんだ？」
「あっ！白銀君！おかえり。なんか第３アリーナでセシリアさんと鈴ちゃんがボーデヴィッヒさんと戦ってるらしいの。でも戦い方が酷過ぎてセシリアさんはそんなにダメージは無いけど近距離で戦ってた鈴ちゃんがボロボロなの。シャルル君と織斑君も向かってるよ。それじゃあ、私は先生呼んでくる。」
・・・・・・・。
・・・。

フザケルナ
第３アリーナ向かって走り出した。この時誰も気付いていなかった。僕の髪が灰色から黒に変わっていることに。
輝ｓｉｄｅｅｎｄ
セシリアｓｉｄｅ
私と鈴さんは今ボーデヴィッヒさんと戦っていると言っても鈴さんはボロボロの状態です。２対１でここまでとは。流石に代表候補生さることながらやはりＡＩＣが厄介ですね。あれのせいで私のブルーティアーズが全く歯が立ちません。
そしてそれからどのくらい経ったのでしょう。私のブルー・ティアーズはミサイル型は撃ち尽くしレーザー発射型の方もダメージを受け過ぎて破壊寸前まで行っており、近接戦闘を挑んでいた鈴さんは龍砲は両方破壊されボロボロの状態となってしまいました。やがて、鈴さんが立っているのもやっとの状態のところをボーデヴィッヒさ

んがレーザーブレードで攻撃しようとした時、鈴さんとボーデヴィッヒさんに何かが突撃して砂埃を上げました。そして砂埃が止んだ時そこにいたのは鈴さんを左手で抱え空いている右手でボーデヴィッヒさんのレーザーブレードを受け止めている輝さんの姿でした。
「貴様、白銀か。邪魔だ!・そこをどけ!」
「・・・・・・。」
輝さんが何も言わないと思った瞬間輝さんが目の前から消えました。ハイパーセンサーを使って探したらピットにＩＳの反応が２つ。輝さんのと鈴さんのです。まさか今の一瞬でピットまで移動したのですか!?ここからピットまでは何十メートルも離れてましてよ!?そんな事を考えてるうちにまた目の前に輝さんが戻ってきました。
セシリアｓｉｄｅ　ｅｎｄ
サードｓｉｄｅ
「貴様!・今何を「ねぇ、１つ聞くよ?」なんだ?」
「さっきの・・・何?」
「さっきのとは２人にしていた事か?そいつらが自分の力量もわからずに私に歯向かって来たから強さを見せつけていただけだ。」
「何であそこまでやったの?せっちゃんはともかく鈴ちゃんはボロボロだったよ?」
「それはあいつが弱かったからだ。弱いヤツにはお似合いだろう?」
「・・・・・・そっか。そういえば、僕のことも気に入らないんだっけ?じゃあ、僕ともやろうよ。」
「ふん。貴様の挑戦受けてやろう。」
そうラウラが言った瞬間、輝がラウラの顔面を殴りとばしていた。殴られた反動でラウラが下がるにも関わらず近づき殴りつづけていた。そこには輝のいつもの優雅な姿はなくただ暴れているだけ。それはまるで
「がっ!!貴様!・何を!」
「何ってただ力を見せつけているだけだよ?さっきの君みたいにね。」
そう、ただ相手を痛めつける。さっきまでラウラがやっていたこと。

「私みたいにだと!?ふざけるな!」
そう言ってラウラは距離をとり、レールキャノンを発射した。
しかし輝は右腕を横に一閃して軌道をそらした。
「この程度なの?君の力は。」
「これならどうだ!!」
ラウラはワイヤーブレードを発射した。
だが、輝は飛んでくるブレードすべてを殴って破壊した。
「ワイヤーブレードはすべて破壊した。レールキャノンも僕には効かない。あとは手刀と近接格闘だけだよ?どうする?まだ続ける?」
普通の人ならさっきまでのやり合いで力の差を理解して引くだろう。しかしラウラには『織斑千冬という最強に教わった力がある』『そんな私こそが強者だ』という考えがある為、ここで引く気は無かった。
「舐めるなぁぁぁぁぁぁぁ!!!!」
ラウラは輝に向かって行ったが最初のように一方的にやられていた。
そして、少ししてから輝が殴ろうとすると輝が止まった。
「どうだ!ＡＩＣの力は!!」
「・・・・・・・・・・・・。」
輝は確かに止まったが腕に力を込めると徐々に動き始めやがて普通に動くようになり殴り飛ばした。
そこから先も変わらず一方的だった。
(なぜだ!?私は負けるのか!?)
『汝、力を欲するか?』
(力だと!?よこせ!!)
『よかろう。受け取れ。最強の力を』
その声が聞こえなくなるとともにラウラのＩＳを黒い液体が覆い始めた。
「あああああああああああああああ!?」
サードｓｉｄｅ　ｏｕｔ
??ｓｉｄｅ

「あああああああああああああああああ!?」
　目の前でボーデヴィッヒさんが黒い液体に飲み込まれている。多分ドイツが極秘で研究・開発した世界最強である織斑千冬の戦闘能力を再現する『ＶＴシステム』だ。前に戦った時は完全に破壊できなかったからまた来ると思ったけど本当に来るとはね。おや、ピットから一夏くんとデュノアさんが来た。
（輝聞こえてる？）
『おう、今サリエルをバスターのＣ．Ｃデストラクト Ｉ Ｖでハメてるとこだがどうした？』
（人が戦ってる時に何神喰ってんのさ。ていうかサリエル相手にそのＢＡだったら1体1分かからないでしょ？）
『しょうがねぇだろうが。血石欲しいのに２０体狩って1個も出てこないんだぜ。』
（さすが幸運スキルランサー以下。じゃなくて！ボーデヴィッヒさんが例のシステムを発動した。）
『イオリアの』
（違うから。機体が紅くなってないし、粒子放出量も3倍にならないから。ＶＴシステムだよ。交代でしょ？）
『ああ、だが気は済んだのか？』
（正直まだだけど【あの計画】の為には必要でしょ？ちょうど秋斗くんも来たし。）
『そうか、悪いな。じゃあ交代だ。』
　さてと、それじゃあ派手に主人公様を引き立てますか!!

『あ、今サリエル倒したけど1発で血石出たよ？血晶も。』

　なんでさ。

覚醒（輝の過去もちょろっと）

輝ｓｉｄｅ

俺とセシリアがＶＴシステムに取り込まれ現役時代の織斑千冬の姿となったボーデヴィッヒと向かい合っていたら秋斗とシャルロットが駆けつけた。

「輝！状況は!?」

「鈴にゃんは避難させた。俺もセッシーは問題なく戦える。んでボーデヴィッヒがＶＴシステムに取り込まれてあんな感じ。あのシステムは操縦者ガン無視だから持って５分。それ過ぎたら多分死ぬ。」

「そんな!?なんとかならないのか!?」

「射撃しながら考える。」

そう言って俺たちは向かって行った。

輝ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

秋斗ｓｉｄｅ

それから３分ぐらい輝たちが撃ってるけど全部弾かれたりかわされたりで効果無し。刻一刻とリミットが迫ってきている。くそ！俺にもクソ兄貴や千冬姉みたいな技があれば!!

秋斗ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

白揚羽ｓｉｄｅ

なんとかならないの!?

ーーーじゃあ、わたしが力を貸してあげる。ーーー

今の声は？それに力って？

【新武装及び単一仕様能力（ワンオフアビリティ）　解禁　】

ワンオフ!?私の!?でもこれなら秋斗の力になれる！よくわからないけどありがとう!!

白揚羽ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

??ｓｉｄｅ

「これで少しは彼の力になれるかな？」

そこには、ただ広い空間があり白いワンピースを着た少女が1本の木に座っていた。
「ごめんね？こんな形でしか力を貸せなくて。本当は一緒に戦えたら良いのに。まだそっちには行けないの。」
少女は静かに涙を流しながら呟いていた。
「でも、それももう少し。もう少しでそっちに行くから待っててね。・・・・・・秋斗。」
そう最後に呟いて涙を拭い顔を上げたその目には確かに覚悟が感じとれた。
??ｓｉｄｅ　ｏｕｔ
秋斗ｓｉｄｅ
『秋斗!!これを使って!!』
シロか！なんだ?
『私たちの新しい刀と新しい力だよ!!効果は秋斗が望んでいたのと同じだから大丈夫！それに使い方は秋斗が1番わかってると思う！』
俺が望んでいた?まさか!?だとしたらいける!!
秋斗ｓｉｄｅ　ｏｕｔ
輝ｓｉｄｅ
「輝。俺に行かせてくれ。」
秋斗が言ってきた。
「何か策があるのか？」
「ああ、ある!!」
そう返してきた秋斗の目はしっかりしていた。あれは『戦う覚悟』があるものにしかできない強い意志のこもった目だ。
「わかった。俺とセッシー、シャルロッテで集中砲火してアレの動きを止める。その間にお前がやれ。」
「わかった。」
「僕はお菓子の魔女じゃないし魔法少女の頭を丸かじりもしないからね？」
デュノアが何か言ってるが今は一大事だ。無視しよう。
クロ『それでは皆様【みんなで集中砲火してその隙に秋斗様が必殺

技でボーデヴィッヒ様助け出そう作戦】開始です!!』
「「作戦名アホダサい!!」」
クロが勝手に考えたんだからな？俺関係ないからな？
そしてセシリアはブルーティアーズ４機全てを展開し敵に向けスターライトＭｋ．２も向けた。シャルロットはマシンガンを両手に一丁ずつ持ち敵に向けた。俺は手にはオルトロスを一丁ずつ自分の肩の横辺りに止まぬ嵐（ムービング・ストーム）を一丁ずつ展開し向けた。
「食らえ！１３門の咆哮（サーティーン・パーティー）!!」
俺たちは同時に撃ち始めた。最初は敵（以下、ＶＴ暮桜）も弾を雪平で斬ったり弾いたりしていたがこちらは３人が集中砲火してるんだ。次第にＶＴ暮桜も対応できなくなり雪平で身体を隠すように構え防戦一方になった。
「やれ!!秋斗!!」
「行くぜ。単一仕様能力（ワンオフアビリティ）、脆爪天穿（ぜいそうてんせん）発動。」
秋斗が単一仕様を発動した瞬間、展開していた新しい刀の先が開きそこから白いレーザーブレードが出てきた。その姿はまるで現役時代に暮桜に乗って織斑千冬が使っていた技『零落白夜』に似ていた。
（織斑一夏？ナニソレシラナイヒト）そして秋斗はどこぞの自称オリ主（カ）とは違い雄叫びなどは上げず俺たちの射線上に入らないように体勢を低くしながらＶＴ暮桜に向かって行き全力で斬り抜いてＶＴ暮桜を倒した。今はＶＴシステムは機能停止しボーデヴィッヒのＩＳも解除され秋斗がボーデヴィッヒを抱き抱えている。
それにしても、秋斗の単一仕様能力『脆爪天穿』。【脆き爪が天を穿つ】か。ドン底から這い上がって今の強さに至ったアイツらしい能力だ。
『嬉しそうだね。』
（そりゃそうだ。単一仕様の覚醒には驚かされたがそれこそ主人公らしい。【あの計画】がより上手く行く。）
『（全く素直じゃないなぁ、輝は。本当は友達、そして教え子が強くなって嬉しいくせに）』
こうして後に【ＶＴシステム事件】と呼ばれる事件は幕を閉じた。

輝ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ラウラｓｉｄｅ

私はどうしたんだ？白銀にやられてからずっと目の前が真っ暗だった。そして急に私の目の前が明るくなった。それは私の知らない場所だった。それから私はある１人の少年の人生を見ていた。最初はなんともなかったが少年が１０歳辺りになった時から涙が止まらなかった。私も試験管ベビーで作られた存在。だがこの少年は違った。普通に生まれ誘拐され改造され暗殺者として育てられた。その他にもいくつもの悲劇が少年を襲った。そして少年が１６歳ぐらいになっただろうか。その姿に見覚えがあった。

「まさかこいつ！白銀なのか!?」

「そうだよ。」

その時私の後ろから声が聞こえた。振り返るとそこには私が意識を失う前に戦っていた白銀がいた。

「これは白銀の過去なのか？」

「うん。僕と輝の過去。僕らの罪さ。」

「輝の？じゃあ、お前は誰だ？」

「僕かい？僕は??。まぁ、もう１人の白銀輝さ。基本表には出ないけどね。」

「１つ聞きたい。お前は・・・いや、お前たちはなぜ強い？お前たちにとって力は、強さとは何だ？」

「僕は強くないよ。ただ僕みたいな人をこれ以上増やさない為に強くあろうとしているだけ。まぁ、僕の言うことは他人から見れば偽善者の戯言かもしれない。それでも【そんな戯言すら言わないのが善だと言うのなら僕は喜んで偽善者になるよ】おっとそろそろ時間だね。力とか強さは輝に聞くといいよ。僕よりそういうことの説明は得意だからね。」

そう言い残してもう１人の白銀・・・いや、??は姿を消した。

「何が『僕は強くない』だ。私よりよっぽど強いではないか。」

そう言って私の目の前はまた真っ暗になった。

目を覚ますと私は保健室のベッドで寝ていた。
――――――――――――――――――――――――――
「知らない天井だ。」
「目を覚まして早々に何言ってんだ。」
隣りを見るとパイプイスに座り読書している白銀がいた。
「ドイツにいた頃部下から『こう言うと怪我早く治る』と聞いたからな。」
「何だその全力で根拠のない迷信」
「白銀。聞きたいことがあるのだが。」
「ああ、俺にとっての力だろ?アイツから聞いてる。そうだな、【究極の矛盾】かな。」
「【究極の矛盾】?どういうことだ。」
「さっきまでのお前みたいに何者にも劣らない圧倒的な、ここでは【剣】があったとしよう。
【剣】があれば敵は倒せる。だがその【剣】の力に溺れれば最後、いつか大切なモノまで傷つける。逆に強固な【盾】があったとしよう。
【盾】があれば確かに守れるものは守れるかもしれない。でも、それでどうやって襲いくる敵を屠る?【剣】だけではダメ。【盾】だけでもダメ。敵を屠る【剣】であり大切なモノを守る【盾】でもある。だから
【究極の矛盾】。それが俺の考える強さだ」
誰かを守れる。考えたこともなかった。
「まぁ、これは俺なりの強さのイメージだからお前はお前なりの強さを見つければいい」
「見つけられるか?こんな私でも」
「見つかるさ。もしくはそれを見つける為に強くなれ。いつか守りたい大切なモノが出来た時に守れるように。」
そうだな。また1から鍛えなおして身につけよう。本当の強さを。

「これから師匠と呼んでいいか？いや、師匠と呼ばせてください!!」
「ふぁっ!?」
何言いだしてんだこの子は!!

タッグトーナメント　決勝（2人のチームワークまじパネエ）

秋斗ｓｉｄｅ
あの『ＶＴシステム事件』の翌日、ボーデヴィッヒは俺と輝、セシリア、鈴、クラス全員に謝った。みんなも許しボーデヴィッヒいや、ラウラが孤立することはなくなった。
そして、それから数日後。今はというと
食堂
ガツガツモグモグごっくん。
「「ご馳走さま!!」」
昼飯の時に食堂で2人の生徒が猛スピードで食べ終わらせていた。
「いくぞラウラ準備はいいか!」
「はい師匠!バッチリです!」
なんか輝と弟子入りしたラウラが騒いでいた。
「何を隠そう!私は特訓（を受ける方）の達人です!」
「ブラボー!!だが俺も特訓（をする方）の達人だ!」
なんだ、ただのバカ共か。
「で、何の特訓?」
「「それは秘密。何故なら『その方がカッコイイから!』」」
もう黙れよ・・・。
そうして、走って行ったところを食堂入口で千冬姉に出会い「走るな」ということで2人共ラリアットを食らっていた。なんなんだよ。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ついに学年別トーナメントの日になった。
鈴は先日の怪我にて参加出来ずラウラも不可抗力だったたとは言えあれほどのことをペナルティ無しという訳にもいかず不参加。それにより秋斗はシャルと、輝はセシリアと組んだの参加となった。途中秋斗・シャルペアは箒（ペアは相川さん）とぶつかったがそこは元か

ら鍛えておりＩＳ学園に入ってからも訓練を続けていた者とずっと剣道しかしてこなかった者とでは自ずと差が出てくるものだ。秋斗たちは難なく勝利しそのまま秋斗たちも輝たちも勝ち進み決勝戦まで来た。

　フィールド内では秋斗・シャルペアと輝・セシリアペアが向かいあっていた。

「こうして戦うのは初めてだね、輝」

「ああ、そうだな。悪いが本気でいかせてもらうぜ。（例の作戦でいくぞ、コルセット）」

「（わかりましたわ、輝さん。ただ、私の名前はオルコットですわ。）」

「（すまん。噛んだ。）」

『試合開始』

　試合開始の合図と共にセシリアが両腰のミサイルを秋斗たちに向けて発射した。シャルロットはミサイルをマシンガンで迎撃するがそれは愚策だった。何故ならその爆発の中心から大量の煙が出てきたからだ。

「（煙幕弾!?目眩しか！）」

　シャルロットは後退することで煙幕から逃れた。そして態勢を立て直したシャルの目の前には既に輝が迫っていた。シャルは輝の突撃をかわし距離をとる。秋斗の方を見るとそっちには既にセシリアが戦っていた。

「最初から分断して各個撃破が目的ってことか。」

「そういうことだ。おっと、秋斗の援護に行きたいんだろうけどそう簡単には行かせないぜ？」

「じゃあ、君を倒して行くまでだよ。見せてあげる。僕の得意技である高速切替（ラピッド・スイッチ）をね。」

　そうしてシャルは弾切れになったマシンガンをしまい別のマシンガンを呼び出して撃ち始めた。

「高速切替（ラピッド・スイッチ）か。確かに速いな。だが遅い。」

　輝も両手の止まぬ（ムービング・ストーム）を撃ち始めた。

「シャル!!輝相手に連射力と銃の切り替え速度で挑んだら駄目だ!!」

「えっ?それってどういう「秋斗のヤツ、気づいたか。だがちょっと遅かったな!」
その瞬間2人の銃は弾切れになった。
シャルはお得意の高速切替(ラピッド・スイッチ)で弾切れの銃をしまいながら空いてる手にあらかじめ登録しておいた別のマシンガンを展開して撃ち始めた。だが輝はそれよりも速く、正確には弾切れになった瞬間に空になったマガジンを捨て手首を曲げ両袖口から新しいマガジンを滑らせリロードを終えていた。シャルが銃を変え銃口を輝に向けた頃には既に輝は撃ち始めていた。
「速い!!でもなんで!?」
「俺は無駄撃ちはしない。弾切れになった瞬間マガジンを捨てて別のマガジンを呼んだ。つまりお前が1を1度0にしてからまた1にするのに対し、俺は1のままだからその分速いのさ。」
「高速(ラピッド)の上、さしずめ音速(ソニック)っったところか?」
その間も弾切れになった瞬間マガジンを捨て両腕を振り上げ新しいマガジンを出しその場で回ってその途中でマガジンをグリップ内に収めリロードを終えまた撃ち始めていた。
「さぁ、デュノア。高速対音速(ラピッド ソニック)の弾幕勝負といこうか!」
やがて高速と音速の差がで始めたようでシャルの被弾数が増えていた。対して輝は全てをピンポイントで撃ち落としていた為被弾数は0だった。そして今使っていたマガジンも弾切れになった時、今度は銃ごと左右に投げ捨て両手を懐に入れサブマシンガン「Ｍａｃ１０」を取り出し撃ち始め、それも撃ち尽くした時はＭａｃ１０を捨て両手をコートの襟口に突っ込みソードオフショットガンを取り出した。
しばらくしてショットガンを捨てたタイミングでシャルは隠し球『灰色の鱗殻(グレー・スケール)』を展開して突っ込んで行った。輝は唯一の近接武器であるビームサーベルを取り出したが何故か明後日の方向に投げた。輝のその行動の意味がわからなかったシャルだが今の内にとそのまま突っ込んで行った。だが次の瞬間シャルが目にしたのはセシリアの武器である『スターライトｍｋ．ＩＩＩ』を自分の顔面に向けてい

る輝の姿だった。頭を動かさずに目だけで秋斗の方を見るとそこには先程輝が投げたビームサーベルを手に秋斗に突っ込んで行くセシリアの姿だった。そしてシャルはヘッドショットを受け絶対防御が発動しＳＥが０になり、秋斗はセシリアに切り抜かれＳＥが０になり輝とセシリアの勝利及び優勝が決まった。

―――――――――――――――――――――――――

管制室

「織斑先生・・・・・・。今一体何が？・・・・・・・」

「オルコットが自分のライフルを白銀がビームサーベルをお互いのこれから行く位置、もしくは相手の手のある位置に投げた。簡単に言うと『武器のスイッチ』だ。だがこれはお互いがお互いのことを理解し、信頼していることでなさる技だ。現段階であいつら以外にアレができるとしたら織斑弟と凰ぐらいだろうな。

お互いの獲物を投げ、離れた仲間に渡す技。この技が後に『パーフェクトウェポンスイッチ』と呼ばれてＩＳ技術においての最高難易度の技と言われるようになるのはまた数年後の話。

―――――――――――――――――――――――――

その日の夜

シャルが寮の廊下を歩いていると後ろから誰かに呼ばれた。

「はじめまして。俺は3組の織斑一夏。１組にいる秋斗の兄さ。ところでシャルロ・・・シャルルデュノアくん。何か・・・例えば、会社のこととかで困ってること無いかい？僕なら助けてあげられるよ？なんたって僕はあの世界最強である織斑千冬の弟でありＩＳの生みの親である篠ノ之束の知り合いだからね。」

「君が誰かは知らないし、そのことをどこで知ったのか知らないけどその件ならもう解決したので問題ありません。さようなら。」

「えっ？ちょ・・・まっ・・・・」

そんなことがあったらしい。

ファイナルデッド・レゾナンス（安心してください。生きてますよ。）

「買い物？」
　輝が食堂で朝食（チョコレートパフェ、飲み物はM○Xコーヒー）をとっていたらセシリアが話しかけてきた。
「ええ、今度臨海学校があるのでその時に着る水着を買うのにご一緒にいかがかと思いまして。というか何ですの？朝からその胸焼けしそうなメニューは？」
「水着ね～。まぁいいぜ。行こうか。」
「メニューの問いはスルーですか。そうですか。それでは後ほど。」
　そう言い残してセシリアは去って行った。
「それにしても、臨海学校か。精一杯楽しむか。」
「あいつらと一緒に楽しめる最後のイベントになっかもしれないからな」

―――――――――――――――――――――――――

　その後、輝とセシリアは学園から1番近い商業施設「レゾナンス」で水着を買いファミレスでのんびりしていた。
「水着はむこうで来てからのお楽しみですわよ。輝さん」
「いや、楽しみも何も俺、一緒に買ったからね？水着がどんなのか知ってるからね？」
　そんなことを話していると
「そこのあなた。これも一緒に払っておいて。」
　知らない女が伝票を机に置きながら言ってきた。
「あなた！これはあなたがお食べになったものでしょ!?でしたらあなたが「ちょっと待って、セッシー」輝さん？」
　輝がいちごオレを飲みながら言ってきた。
「セッシー、それと知らない人。先に言っておく。すまん。」
　そう言って輝はいきなり向かいに座ってたセシリアの椅子を蹴っ

て移動させ、女の方を押しのけた。女はその際にバランスを崩し尻餅をついた。
「あなた一体何を!?」
女はそのことに文句を言おうとしたが出来なかった。それはいきなり目の前を、正確にはさっきまで自分がいたところにトラックが突っ込んで来たからだ。
「そんな!?輝さん!?」
セシリアは輝が轢かれたと思い壁とトラックの間を見た。
「ん?どしたの?そんなに慌てて?」
そんな声が後ろから聞こえた。セシリアと女が振り返ると新しいいちごオレを飲んでいる輝がいた。
「えっ?輝さん?でも、えっ?」
セシリアは混乱していた。そりゃあ、自分たちを助けて轢かれたと思った相手が後ろからいちごオレを飲みながら平然と歩いてきたら当然の反応だろう。
どうやって俺が助かったかというと具体的にはまずセッシーの椅子を蹴って移動させコイツ（女）を押して移動させた。まぁ、その時に尻餅をつかせちまった事は謝る。悪かったな。それで2人を安全なところに移動させたあと椅子に乗る形になってそのあと机にに足をかけてそのままバク宙。運転席の上に手をついて荷台を転がって衝突を回避したんだ。んで、ドリンクを飲もうとしたらなかったから取りに行ってた。こんなところだ。
「輝さん・・・・・・、今のは一体・・・・・・。」
「ん?ああ、今のね。だいぶ前にあった『ファイナルデッド』って映画知ってる?あれ、今俺ガチでやってんだ。街歩いてたらいきなり看板降ってきたり石コロが最近のF1のメル○デスばりの速度で飛んできたりさ。中学の時に映画みたいなことがあってね。初事故でも生還してアッキーや鈴たんのも回避しまくったんだ。そしたら『アイツ（死自身）』もムキになってんだろうな。アイツの狙いが俺に集中してるってわけ。以降、俺の毎日がデンジャラス。まぁ、そのおかげで俺が死なない限りアッキーたちは無事ってわけさ。」

そんな軽い感じで話す輝。
「こんなことがあったし帰るか。」
そう言って輝はセシリアを連れて帰ろうとした。そこを女が呼び止めた。
「ちょっと待ちなさい!!」
「何？言っとくけど食事代は払わないから自分で払えよ？」
「そうじゃくて何でわたしを助けたの？あなたを金づるにしようとしたのに。」
「そのこと？それなら簡単だ。『アレ』はあくまで俺の呪いだ。それに見ず知らずのあんたを巻き込むのは間違ってるからな。それに『誰か助けんのに理由がいるのか？』」
女はその言葉に、そしてその男に胸をうたれた。
「あ、あんたの名前は？」
「俺か？俺はＩＳ学園１年１組白銀輝さ。」
そう言い残して輝はセシリアを連れて店を出て行った。
「白銀輝・・・。ＩＳ学園の生徒・・・。・・・よしっ！」
輝たちの姿を見送った女は何かを決意した顔で立ち上がり自分の飯代もちゃんと払って店を後にした。
余談というかネタバレだがこの女、これがきっかけで輝に惚れたという。何というか原作のセシリア以上のチョロさである。

夏だ！海だ！臨海学校だ！（たぶん最後の日常回）

秋斗たちは現在バスに揺られていた。ＩＳ学園年に一度の臨海学校だ。各クラスでバスに乗っていた。しかし、そこに輝の姿はなかった。

「織斑、白銀はどこだ？」

千冬が秋斗に聞くと秋斗は付けてたアイマスクを片方だけ少し上げチラッと千冬を見てからまた付け直し上を指差した。千冬や山田先生、１組の他の生徒もつられて上を見ると当然バスの天井しかなかった。千冬が確認のため窓から身を乗り出して（良い子はまねをしないでね。山田先生とのお約束だぞ？）バスの上を見ると輝が寝そべりながらキャラメルクリームフラペチーノを飲んでいた。

「白銀、降りてこい。そしてオルコットは白銀がいるとわかった瞬間上ろうとするな。」

その後。ちゃんと下りてみんなで冠をゲットするためにマータお母さんを狩りまくっていた。

そして海にて

「秋斗、オイル塗ってくれない？」

俺の彼女が魅惑的な提案をしてきた。

「ほら、これを使うといい。」

「おっ、輝。サンクス。」

そうして塗っていると

「輝さん。何故か鈴さんの方から鼻孔をくすぐるような香ばしい香りがするのですが何を渡したのですか？」

「ごま油」

「どうりで鈴さんが美味しく焼けてきていると思いましたわ。」

「何してくれとんじゃおのれはーーーー!!!」

「やっべ、にーげよ。」

その後しばらく鈴と輝の本気鬼ごっこが続いた。

「白銀君、ビーチバレーしよー」
「ああ？めんどくさ」
と言いながら渋々やりに行って数分後
「っしゃあオラァ!!かかってこいやゴラァ!!」
その場の誰よりもやる気いや、殺る気が出てた。
その後、千冬姉が参加して千冬姉対輝の終末戦争が繰り広げられた。俺たち？ちょっと離れたところで揃って体育座りでそれをながめてたよ？えっ？参加しないのかって？
おいおい、

デビルとデストロイの戦いにジムで殴り込めと？接敵して数秒でおじゃんだわ。

その後も色々輝がやらかして（主に鈴をタゲに）戦争していたけど何事もなく過ごせた。

翌朝、俺と輝が旅館内を歩いていると地面に刺さったうさ耳を見つけた。
『で、どうするよ。これ』
「いや、他の奴が触って何かあっても困るし抜くしかないだろ。」
そう言って秋斗はうさ耳を抜いた。
そうしたら空からロケットのエンジン音のようなのが聞こえて来た。しかも段々その音は大きくなっていた。
『アッキー！くるぞ！』
「おう！」
そうして身構えていると
「あれ？お二人さん何してんの？」
『「普通にきた!?」』
後ろから浴衣姿の束が話しかけてきた。

「さっきのエンジン音何!?」
「ああ、あれ？私のＬＩＮＥの音」
『「随分マニアック!?」』
「んじゃぁ、また後で～。」
そう言い残して束は去って行った。

ん？また後で？

天災の贖罪と作戦会議（ギャグがないと言ったな。あれは嘘だ）

輝ｓｉｄｅ

束と会った後、専用機持ちがあつめられた。どうやら国からの追加装備の確認をするらしい。

「織斑先生、何で篠ノ之がいるんですか？」

ラウラが聞いた。確かに篠ノ之箒は専用機持ちではない。故にここにいるのはおかしい。

「それはな「ちーーーーーーーちゃーーーーーーーーん!!」・・・・・・・来（てしまっ）たか。」

本音が聞こえた気がしたのは俺だけか？

海の声が聞こえた方を見ると誰かが先頭に立った状態で船が来た。

「ありがとう！また何かあったらよろしくね！」

やがて浜辺に着き降りて船の人にお礼を言っていた。

「束、誰ださっきのは。」

「さっきのは来る途中でヒッチハイクした【シーシェ「やめろ。その名前はシャレにならない。」はい、嘘です。ホントは地元の漁師の方です。」

相変わらず束は束だった。

「早く本題を言え。」

「おっとそうだった。箒ちゃん、今日はあなたに専用機を渡しに来ました。」

そしてＩＳが展開された。

「これは既存のＩＳである第３世代を超える最新第４世代機だよ。その名も【紅椿】箒ちゃんには散々迷惑をかけたからね。これはその食材じゃなかった贖罪だよ。さぁ、フィッティングとか済ませるからこっち来て。」

そうか、それは食材なのか。

そして数分後フィッティングなどが終わり紅椿を待機状態にして

篠ノ之箒に渡そうとした。篠ノ之箒も受け取ろうとするが何故か束は紅椿を放さなかった。
「姉さん？」
「箒ちゃん。これは贖罪だから渡すけどこれだけは約束して。【絶対に力に溺れない】って。」
「もちろんです。絶対そんなことはありません。」
「そう。それならその言葉信じるからね。」
そう言って束は紅椿を篠ノ之箒に渡した。
するとある男が束に話しかけた。
「束さん、お久しぶりです。」
「あぁ？誰だお前。」
「誰って僕ですよ。織斑一夏です。それよりも僕の白式見てください。」
「はぁ？何で束さんがお前の見ないといけないの？」
「だって束さんですよね。白式作ったの。それに千冬姉の弟ですよ。」
「お前、何か勘違いしてない？」
「それってどういう」
「だからさ～」
そう言うと束は一夏の肩に手を置き耳元で本人にしか聞こえないぐらいの小声で言った。
「私はひーくんの事情を聞いてるんだよ？当然お前の正体も知ってるよ。それで私が協力すると思う？ねぇ、この世のイレギュラー（いっくんの紛い物）くん？」
「!?なっ!?」

「織斑先生！緊急事態です！」
「・・・・・何!?全生徒を各部屋へ避難。以降、通達があるまで部屋を出ることを禁ずる。全専用機持ちは私と来い！束、協力を頼めるか？」
「よくわからないけどもちろんだよ。私のＩＳ（娘たち）のせいでこれ以上誰かが悲しむのはいやだからね。」

―――――――――――――――――――――――――――――――

輝たちは会議室に集まっていた。真ん中に天板がモニターになっている机がありその周りにも大型のコンピューターやモニターがあることから会議室より司令室といったところだろう。

「今から2時間前にイスラエル・アメリカで合同開発が行われていた軍事用第3世代機『白銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）』が突然暴走を起こし実験施設を破壊、現在こちらに向かって来ている。そこで、我々がそれを対処することになった。」

「織斑先生このような事態は我々学生より自衛隊などに要請が行くはずでは？」

「ああ、デュノアの言う通りだ。無論、自衛隊にも連絡はいっている。だが向こうは距離があり準備などにも時間がかかる。そこで、福音の近くにおり過去に無人機撃退、ＶＴシステムに勝った我々にも依頼が来たというわけだ。

さて、これより作戦会議を行う。質問があるものは挙手しろ。」

そこでセシリアが挙手した。

「先生、福音のデータ開示を求めます。」

「いいだろう。ただし、このデータを外に漏らした場合は少なくとも査問会と2年間の監視が付くと思え。」

そして大型モニターに福音のデータが表示された。

「スピード重視のラファールや世界最速を誇るイタリアのテンペスタ以上の機動力か。私の甲龍はもちろん並みの専用機じゃ速さは比べにもならないわね。」

「それより厄介なのがこの武装ですわ。これだとこの中で1番似たタイプのブルーティアーズですら互角にはほど遠いかと。正直近接武器を装備していないのが唯一の救いですわね。」

『まぁ、この情報も真実とは限らないけどな。』

「なぁ、輝。情報が真実とは限らないってどういうことなんだ？」

「あのな～、こいつはアメリカとイスラエルが合同で作った所謂自分たちの戦力だぞ？その戦力の情報をいつ敵になるかわからない他人

に正直に教えると思うか？」
「それではこれから作戦を説明する」
　千冬がそう言って転生者であり原作の流れを知っている一夏は自分と箒の２人による作戦を言われると思っていた。
「今回の作戦は波状攻撃だ。」
「・・・・・・えっ？」
　だが、現実は違った。
「まずこの中で実力のある白銀、織斑弟が福音に襲撃をかけそのまま戦闘。第２ラインとして衝撃砲を使える凰、オルコットがＢＴ兵器で先の２人より離れたところから援護、第３および最終防衛ラインとして多数の銃火器による攻撃力を持ったデュノアとレールキャノンを装備しておりＡＩＣも使えるボーデヴィッヒが待機、もし先の４人が撃墜し損ねた場合に対応してもらう。何か質問や意見はあるか？」
　千冬が作戦の説明を終え質問などを聞いて来た。全員から何も無かったが２人だけ違った。
「千冬姉！何で僕と箒が作戦に入ってないんだ！」
「織斑先生だ。まず織斑兄お前は学園のイベントで何の結果を残していないだろ？全部何かしらのトラブルがあったからまぁそこはしょうがないと思う。でも、普段はどうだ？授業の後先生たちに質問したりしたか？他の先生や先輩にＩＳによる戦い方など教わったか？そもそも訓練をしているのか？アリーナ使用申請の書類でお前の名前を１度も見た記憶が無いがな。そんな実力がわからない奴にこのような重要な作戦で出す訳にはいかん。それと篠ノ之、
　お前に関してはそもそも戦力として考えていない。」
「・・・なっ!?どうしてですか！千冬さん!!」
「織斑先生だ。それから当然のことだろ？お前は専用機を受け取ってまだ１時間も経っていないんだぞ？自分のＩＳの特徴もクセも何１つ分かっておらず性能に慣れてない奴をぶっつけ本番で戦場にぶち込むバカがどこにいる。」
　千冬は至極真っ当なことを言っている。それはその場にいる代表

候補生全員が理解していた。だが、篠ノ之は言い返した。
「そんなことはありません！絶対に使いこなしてみせます!!」
その言葉にセシリアたち代表候補生は怒りを覚えた。そして
「あんたねぇ！ふざけたことを『おい、あんまりふざけたことを言ってんじゃねぇぞ？』
鈴が言い返そうとした時に輝が言い返した。
「なんだと!?どういうことだ!!」
『どういうこともなにも当然だろ？専用機持ちってのは普通の機体で血反吐を吐くまで特訓して技術を磨いて国や政府から専用の機体を貰ってそこからも何十時間、何百時間と特訓して代表候補生の地位まで上り詰めてんだよ。俺らは特別だから少し違うが少なくともここにいる代表候補生はそうだと俺は思ってる。それを『使いこなしてみせます。』だと？専用機持ち舐めてんのか？』
輝の気迫に箒はたじろいだ。
「白銀に全部言われてしまったな。ついでに言うとこういう緊急かつ情報が少ない状況では少しでも不確定要素は除いておきたい。故にお前たち２人の出撃は認めん。以上、各自出撃に備えて準備せよ！解散！」

墜ちる白と白銀、動く愚者

『もうすぐ福音と接触する。各員戦闘に備えろ。』
千冬からの通信が入り俺たちは福音まで数百Ｍのところまで来ていた。
［ということだ。鈴たんとセッシーは俺たちが福音と戦闘を始めたら援護開始。それじゃ、いくぞ!!］
そして俺は福音の周りを高速で移動しつつ攻撃し、秋斗は両手に刀を展開して手数で対応していた。鈴の衝撃砲とセシリアのブルーティアーズによる援護で福音は満足に攻撃が出来ず時々出すエネルギー弾を俺は余裕で回避し秋斗は刀で斬って無効化し鈴とセシリアは大分距離があるため難なく回避できた。こちらの攻撃は７～８割がた通り福音の攻撃は殆どこちらに通っていない。これなら問題なく鎮圧できるだろう。そう思っていた。だが、いつ如何なる時でも不測の事態とは必ず起きるモノだ。
『前衛及び中衛に通達！そちらにＩＳが１機向かった。この反応は・・・。【紅椿】だ!!』

［何しにきた篠ノ之!!お前は作戦不参加で待機のはずだろ!!］
「黙れ!!貴様があまりに不甲斐ないから来てやったのだ!!さぁ!!秋斗!!私と秋斗でアレを倒すぞ!!」
「黙るのはお前だ箒!!作戦室で言われたようにお前は専用機を貰ったばかりで戦力にならない!!はっきり言って専用機持ちの中で１番弱い！そんな奴が居ても邪魔なだけだ!!」
「ふざけるな!!私が弱いわけないだろ!!」
篠ノ之が言ってるが気づいてないのか?さっきの言い争いの間お前は動きを止めていたが俺たちはずっと福音と戦ってたんだぞ?
『輝さん、秋斗さん。戦闘海域内に船が一隻おりますわ!!』
船だと!?確かこの辺の海域は封鎖してるはず・・・。クソッ！密漁船か!!

「もういい！帰らないならせめて船を安全なところまで誘導しろ!!」
「誘導だと!?なぜ私がそんなことをしないといけない!!あれは密漁船だろ！なら放っておけ!!」
「邪魔だから誘導するついでに下がってろって言って・・・!?」
秋斗は続きが言えなかった。なぜなら
『師匠!!そっちにＩＳが１機飛んでいった!!この反応は・・・。』
ああ、わかってる。目の前で事が起きているからな。
［何のまねだ！『織斑一夏』!!］
秋斗の腹を背中から雪片二型で貫いている織斑一夏の姿があった。
「邪魔だから殺しただけだ。」
雪片を抜きながら返して来た。刺された秋斗はそのまま海に落ちていき駆けつけた鈴が受け止めた。鈴に遅れてシャルロットやセシリア、シャルロット、ラウラ、作戦室にいたマドカと簪も到着した。
そして、織斑は福音に近づいていき
「そうだよ。こんな使いづらい機体じゃなくって最初からこうすれば良かったんだ。」
そう言って福音に手を伸ばし触れた瞬間織斑と福音が光りだしその光が消えた時、そこには福音を纏った織斑の姿があった。
「思い通りにならないなら全部力と恐怖で支配すれば良かったんだ!!そして」
そう言い終えると織斑はハイパーセンサーでギリギリ追えるかの速度でセシリアの前に移動して右手を振りかぶってクローで貫こうとしていた。
［セシリアーーーーーーーーーーーー!!!」

俺は今まででそして黒羽の最大速度でセシリアの元に飛び出した。
輝ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

セシリアｓｉｄｅ
貫かれると思って目を閉じましたが一向に貫かれる痛みが来ません。恐る恐る目を開けると

［がはっ！］
クローで胸の真ん中を貫かれている輝さんの姿がありました。
「そんな・・・。輝さん？どうして・・・？」
［危ないと思ったからな・・・。それにいつの間にかお前といるのが好きになってたんだ・・・。だからだよ・・・。］
そんな・・・、輝さんが・・・嘘・・・。
そして輝さんは気を失った。
セシリアｓｉｄｅ　ｅｎｄ

輝ｓｉｄｅ
『誰か聞こえる？』
突然聞いたことのない声が聞こえて来た。
（誰だ？）
『僕は【銀の福音】のコア人格。こんなことになったことを謝りたくてきたんだ。』
（何があった？）
『よく覚えてないけど誰かに変なプログラムを入れられたのは覚えてる。』
つまり、第３者のせいか。
（てことは、お前のせいではないんだろう？なら気にすんな）
『うん、ありがとう。それと１つお願いがあるんだ。今彼が纏ってる僕の中にまだナターシャ・・・僕の搭乗者がいるんだ。この後、少しだけ彼の動きを封じる。だから、その間に彼女を連れて逃げてほしい。』
（まかせろ。）
俺が意識を取り戻すと福音が光り１人の女性が出て来た。その人は簪が保護した。
［全員聞け!!簪はそのまま福音の搭乗員の保護、旅館に送り届けろ！ラウラはワイヤーブレードでそこの馬鹿を拘束してそのまま連れ

てけ！最悪骨へし折って意識ぶっ飛ばしてもいい！マドカは今にも織斑に殴りかかろうとしている鈴を連れてけ！シャルロットはセシリアを頼むぞ！行け!!」

そう言うと織斑は俺を貫らぬいていた腕を抜いた。その際、傷口から出た俺の血がセシリアの髪にかかってしまった。せっかくの綺麗な金髪を汚しちまったなぁ。

そして俺は海に落ちていった。

「輝さん!?嘘!?輝さん!!

いやーーーーーーーーーーーーーーーーー!!!」

銀の福音迎撃作戦

専用機持ちの活躍で福音を追い詰めるも篠ノ之箒の命令違反、織斑一夏の暴走により織斑秋斗は負傷。篠ノ之束の協力により一命を取り留めるも意識戻らず。白銀輝も負傷、海へと落ち消息及び生存不明という最悪の結果となった。

白の復活

秋斗ｓｉｄｅ

俺が目を覚ますと曇りではない程度の雲がかかった青空とそれを鏡のように写す湖が一面に広がっていた。

どこだここは？

「ここはＩＳの、人で言うところの精神世界だよ。」

いつの間にか俺の隣に現れたシロが教えてくれた。いや、人で言うところって普通精神世界知らないから。

「なんで俺はここに来たんだ？」

「それはね『私が呼んだからだよ。』っちょ出てくるの早い。」

俺の後ろから声がしたので振り返るといつの間にかあった枯れ木の上に真っ白なワンピースを着て麦わら帽子を被った１人の女の子が座っていた。

誰だ君は？

『私は【白式】。織斑一夏の専用機だよ。あっ、今は【元専用機】か。アイツが私を捨てて福音に乗り換えたおかげで私はこうしてここに来れたの。アイツを倒す手助けをするためにね。』

良いのか？元主人だろ？

『良いの。私を殆ど使わず特訓も全然しないで挙げ句の果て捨てるし。・・・それに私は元々君のだからね。』

最後のはどういう意味だ？

『その話はあとで。さぁ、時間が無いよ。こうしているうちも他の専用機持ちがアイツと戦ってる。』

わかった。あとで聞かせてもらうからな？だがどうすれば良い？

『私と白鳳羽が融合すれば良いんだよ。』

シロはそれで良いのか？

「良いから早く!!」

おっ、おう。なんでそんなに急いでいるのかわからないが良いなら頼む。

そして、２人が手を繋ぎ光りだし消えた時にはシロの姿はなかった。
それにしてもシロは融合して本当に良かったのか？
「それなら大丈夫。今私の中で『やったー！これで私もデカ乳の仲間入りだ!!』って泣きながら喜んでるから」
おい、良いのかそれで。もしかしてあんなに急いでたのは早く巨乳になりたかったからか!!

そんなことがあり目を開けるとどこかのベッドに横たわっていた。腕にはチューブが刺さっており身体には心拍確認用のパッチや呼吸用のマスクが付けられていた。
それを全部外し（心拍確認用のパッチを外した瞬間心電図が真っ平らになりピーと鳴り続けた瞬間白式が『御臨終ＤＥＡＴＨ』って言ったのはスルーして）俺は病室を出た。

司令室
司令室に着くなり俺は扉を勢いよく開けた。
「千冬姉!!状況は!?」
「秋斗！目が覚めたか！状況ははっきり言って最悪だ。まさか一夏があんなことをするとは。専用機持ちが束になっても全く歯がたたない。「呼んだ？」呼んでない。束（たばね）ではなく束（たば）だ。それに白銀もやられて行方不明だ。」
そんな・・・。輝がやられたなんて・・・。それなら。いや、たとえ輝がやられてなくてもやることは決まっている。
「千冬姉。俺も出る。」
「!?・・・・・・やれるのか？」
今の間は俺の身体のことや今の状況を考えて俺を心配していたからだろう。だからこそ言ってやる！
「ああ、やれる・・・いや、
【やれるか、やれないかじゃない。やるか、やらないか、ただそれだけだ】

だったらやってやる!!アイツの弟として、そして1人の人間としてアイツをブッ飛ばしてくる!!」

「・・・・・・そうか。なら行ってこい!!」

「・・・千冬姉・・・ありがとう!!」

「・・・・・・無事に帰ってこい。」

旅館の外

「白鳳羽改め、【鳳羽(あげは)　白光(びゃっこう)】出るぜ!!」

最強の再臨、圧倒

秋斗ｓｉｄｅ

【鳳羽　白光】を飛ばして数分でみんなの元に着いた。

「秋斗！目が覚めたのね！良かった・・・。無事で・・・。」

鈴が泣きながら言ってきた。

「心配かけたな。でも、もう大丈夫だ。」

「おい、出来損ない。そのＩＳは何だ」

今度はクソ兄貴が話しかけてきた。

「よぉ、クソ兄貴。これか？これは俺の白鳳羽とお前が捨てた白式が融合した姿【鳳羽　白光】だ。お前を倒すために力を借りたんだよ。」

「ちっ、あのポンコツが。どこまでも僕の邪魔をして。まぁいい。また来たなら今度も。いや、今度こそ殺してやる。そんなポンコツを２つ融合させて来たところで無駄だってのを教えてあげるよ。」

そして、俺とクソ兄貴は戦いだした。鳳羽　白光でもクソ兄貴が操ってる福音のスピードに追いつくのがやっとだし、鈴やセシリアたちと連携して攻撃しても持ち前のスピードや全方位射撃兵装【シルバーベル】で迎撃されて殆ど通ってない。白式と融合することで発現した単一仕様能力【零落白夜】を使っても良いがまだ福音のＳＥはたくさんある。恐らくあっちを削りきる前にこっちのＳＥが切れておしまいだ。くそっ!!俺が来てもなんも変わんないのかよ!!

そんなことを考えているうちにクソ兄貴がまたセシリアに向かって行った。・・・・・が、セシリアとクソ兄貴の距離が２０Ｍくらいになったタイミングで海から白銀色の光の柱が出てきた。今度は何だよ!!

輝ｓｉｄｅ

目を開けると真っ黒の空間が広がっていた。明かりも無いが何故か自分の姿は見える。

［こうしてるってことは俺はやられたのか。
さて・・・・・・戻るか。］
『『何故？』』
突然後ろから声が聞こえて来た。振り返ると輪郭はわかるがそれ以外は真っ黒で目の辺りが仮面の様に赤く燃えているヒトらしきモノが２人いた。１人は恐らく男で俺にそっくりだ。もう１人は肩甲骨の辺りまである長い髪をしてワンピースらしきものを着た俺より低い推定１５０～１６０ｃｍぐらいの女がいた。こっちはクロにそっくりだ。
男『もう１度聞くよ？何故？』
女『あなたはあの転生者に負けた。胸を貫かれた。それなのに何故戻るのですか？』
女神に頼まれたから？アイツにやられたから？違うそうじゃない。確かにそうだがそれが１番の理由はそうじゃない。
［みんなが危ないから。みんなを守りたいから。みんなと戦いたいから。］
男『全力で戦って負けたのに？』
［ＩＳでの話だ。俺自身の力ではまだ負けてない。］
女『あなたの力とはこんな・・・。』
そう女が区切ると辺りの暗闇が消えそこには真っ赤な空とそんな空より赤黒い、まるで血のような色をした液体が足元に広がっていた。その液体には切創や銃創、刺創があるしたいが大量に転がっていた。
女『こんなモノしか作ることのできない力のことですか？』
［ああ、そうだ。これは俺がやったこと。否定する気はさらさら無い。俺の罪だからな。確かにこの力は他のモノを傷つけ、壊す力だ。それでも俺はこの力でみんなのために戦う。］
男『そんな血塗れの力で、手で守られたとしてみんなは嬉しいと思う？喜ぶと思う？』
［人殺しの手だ。喜ばないだろうな。むしろ、怖がって、離れて、今までのようには行かないだろう。それでも俺はこの力でみんなのた

めに戦う。みんなとともに戦う。」
女『それは何故？』
［昔言ってくれた奴がいたんだ。「君のその力は壊すための力なんかじゃない。誰かの笑顔を守れる力だよ。」っと。そのあとそいつの墓の前で誓ったんだ。【この力は破壊するためのモノじゃない！好きな娘（こ）と、その好きな娘がずっと人として扱われず道具以下として扱われ残酷な人生を強いられながらも死ぬ間際まで愛し、信じ続けた人間（モノ）を守るための力だ！それを証明してみせる】ってな。その誓いを！信念を貫くだけだ！」
男『知ってるよ。』
男が言い目元の炎が消え身体にも色が出てきた。
［やっぱりお前か、??。］
『うん、ごめんね？こんな面倒なことをして。』
［良いさ。別に誓いを忘れたわけではないが改めて気合いが入った。礼を言うぜ。］
『そう言ってもらえると嬉しいよ。さて、あの力を使って戦ったとして彼らとはどうなっちゃうのかな？』
［まぁ、少なくとも今までのような関係ではいられないだろうな。でも安心しろ。俺の計画通りに行けばハッピーエンドだ。］
『・・・そう・・・・・・それなら安心だ。それじゃあ行こう！』
こうして俺たち2人はその空間から消えていった。
その後その空間に残った女は
『何がハッピーエンドですか・・・。そのエンドのハッピーにあなたたちは含まれていないのでしょ？あの誓いを覚えててくれたのは嬉しいけどやっぱり重荷を背負わせちゃったかな？さぁ、そろそろ私も動こっと。』
そう言っていたがその言葉を聞いたものはいなかった。

セシリアｓｉｄｅ
突然現れた光の柱が消えるとそこには輝さんがいました。ですが、

普段の輝さんとは違い全身白一色です。眼帯も外れ眼帯の下が露わになりました。そこにはまるで銃などで使うレーザサイトのように赤いモノが埋まっていました。全身白一色に赤いセンサーアイ。そして背中に真っ黒な天使の翼。それらは白夜の黒十字の1人にして最強の存在【白銀の輝】の特徴に酷似しています。

「・・・・・・輝さん？」

私が恐る恐る輝さん？に尋ねると輝さん？は少し頭だけ私の方に向けました。その目は今にも泣き出しそうなくらいに悲しそうな目をしていました。そしてすぐに織斑一夏の方に向き直ります。

「なんだ。まだ生きていたのか。」

［・・・クロ。］

輝さん？はあの男を無視してクロさんに話しかけました。

『なんですか？』

［ラストオーダー。］

『・・・・・・わかりました。・・・・・・どうかご武運を。』

そう言ってクロさんは輝さん？の手から外れ粒子になって消えました。

「自分のＩＳを手放して何を・・・!?」

織斑一夏が話していましたが輝さん？が顔面を掴み投げることで遮られました。投げられた勢いで織斑一夏は少なくとも1kmぐらいは吹き飛ばされました。

「この程度で・・・がっ!?」

織斑一夏が吹き飛ばされながらも福音のスラスターを使って態勢を立て直そうとしていたところをハイパーセンサーで捉えることすら出来ないほどのスピードで追いついた輝さん？に殴られて今度は海に叩きつけられました。織斑一夏がまだ倒れていないのはわかっているはずなのに輝さんは追撃しようとせずまるで上がって来るのを待っているかのようにその場に留まっています。やがて織斑一夏が海から出て輝さんと同じ高さまで上がってきました。

「僕の邪魔をするなーーー!!」

織斑一夏が叫ぶと福音の兵器【シルバーベル】を発動しました。

「輝さん危ないですわ!!」
私が叫びますが輝さんはその場を離れようとはせず左腕を正面に軽く伸ばしました。すると肘の辺り前腕部から背中にある翼と同じような翼が出現しました。
［シュート］
輝さんが呟くとその翼から無数の羽根が織斑一夏に向かって真っ直ぐ飛んで行きます。シルバーベルと輝さんの飛ばした羽根がぶつかりました。ですが、拮抗したのは一瞬で瞬く間にシルバーベルの弾幕を押し返しあっさり織斑一夏に集中砲火を浴びせました。
「何よ・・・・・・これ・・・・・・。」
鈴さんが呟きましたがそう思うのも無理はありません。あれはかつてラウラさんと戦った時やその後のＶＴシステムと戦った時より遥かに上。その時はいつもの輝さんの状態でしたから仕方ないにしてもあの強さはクラス対抗戦での無人機襲撃事件よりも上。あの戦いでも輝さんは本気ではなかったということです。秋斗さんも驚いているということは秋斗さんが白銀の輝・・・いえ、輝さんと修行していたという時ですら本気ではなかったということですね。
やがて、というほど時間も経ってませんが輝さんの一撃一撃が相当重かったのか織斑一夏はすぐにボロボロになりました。輝さんは織斑一夏に近づいていきます。織斑一夏は待っていたと言わんばかりに右手のクローで刺そうとしますが輝さんは左手のひらで受け止めて腕を掴み空いている右手を織斑一夏の顔の前にやります。すると右手が青く光り始めそこから光線が出て織斑一夏を捉えました。光線をモロに食らった織斑一夏はそのまま海に落ちていきました。
それを見送った後輝さんは振り返り私たちをひと通り見た後何も言わず翼を大きく広げて遥か彼方に飛んでいきました。

世界への宣戦布告

ｓｉｄｅ

俺たちは旅館に戻った後とりあえず司令室にいた。福音の迎撃作戦は完了した。だがみんな元気がなく誰も喋らない。当然のことだ。同じ学年の生徒が暴走したのはどうでもいいとして、輝の正体が白銀の輝でしかも何も言わずに飛び去って行ったのだから。

「みんな大変よ!!急いでニュースを見て!!」

みんなが黙っているとトイレに行っていた鈴が慌てた様子で入ってきた。俺たちは言われた通りモニターをニュースのチャンネルに合わせた。

『繰り返します。先ほどドイツにあるＩＳの研究施設が何者かに襲撃されました。』

そして映像が切り替わり恐らくその襲撃の際の映像だろう。映像にはＩＳ６機が円を描くようにマシンガンを構えたまま立っておりその中心には全身白一色の男がいた。白銀の輝だ。一応輝は両手を上げている。

「クラリッサ!!」

「ラウラあいつらを知ってるのか？」

「ああ、私の部隊の奴らだ。」

すると輝は自分の真後ろにいたＩＳの腰に装備されている刀を逆手で抜きその流れで目の前のＩＳの胸部を斬り上げ、その次に左後ろと左前、右後ろと右前のＩＳを斬り最後に真後ろのＩＳを刺した。俺たちは普段からＩＳによる高速戦闘などにより速い動きに目は慣れている。それでも一瞬見えただけだ。その場にいて『躱せ』と言われて実際に躱せるかは分からない。そのぐらいの手際で輝は動いたのだ。

「みんな!?クソっ!!よくもみんなを!!」

「誰も死んでないよ。」

そう言いながら束さんが入ってきた。

「よく見て。ひーくんが斬ったのはＩＳの胸部アーマーだけ。そしてあのＩＳは胸部アーマーの中にＰＩＣの制御装置が入ってるんだ。だからひーくんはそれを壊して相手を無力化しただけ。それにひーくんは絶対に人を殺さないよ。仮に本気で殺す気なら６人同時でみんなの目では追うことも出来ないくらい一瞬で片付くからね。」

ならなんでこんなことを？

「それは今からわかるよ。」

『緊急速報です！たった今当局に「ドイツを襲撃した」と名乗るものからのビデオメッセージが届きました。中身の確認はまだですが当事件に関係があると思います。ノーカットでお送りしますのでご覧ください。』

画面がニュースからその映像に切り替わった。そこには黒いヘルメットを被った者が大勢並んでおりその真ん中に輝が立っていた。

『世界中の方に報告します。私たちは【白夜の黒十字】。世界の闇を消し去ってきた者たちです。私たちはこれからＩＳ関係の全てをそして軍事関係の全てを破壊していきます。ＩＳを開発している施設、会社、ＩＳ研究所、ＩＳを使っている軍も対象となります。今のこの世界ははっきり言って腐っている。ＩＳを使ったことは愚か、起動させたことさえ無いクセに【女だから】という理由で悪逆非道を尽くす奴ら。【危険だから】などの理由で条約により禁止されているはずのシステムを秘密裏に搭載する愚か者ども。他にもあげれば他にキリがない。それに開発者である篠ノ之束は何の為にＩＳを生み出した？戦争をする為か？今まで弱い立場にいた女たちが男を虐げ差別する為か？違うだろ!!【宇宙に行く為】そうだったはずだ!!それなのに今のＩＳは何だ？ライフル？ブレード？挙げ句の果てアメリカとイスラエルは共同で軍用ＩＳを開発する始末だ。これのどこが【宇宙に行く為】だ!!宇宙に行く前にお互いのせいで人類が滅んでおしまいだ!!だからこそ、私たちはその為に今のこの惨状をつくったＩＳを破壊する。ひいては、この世界を破壊する。私たちはすでにＩＳ学園を占拠した!!当然生徒は人質だ！この世界を、生徒を守りたければＩＳ学園にいる俺を殺してみろ!!』

そこで映像は終わった。
「束さんは輝が白銀の輝と同一人物だって知ってたのか？」
「うん、知ってたよ。私もラビット社にいたしそもそもラビット社は白夜の黒十字のカモフラージュの為につくったものだし。」
「じゃあ、教えてくれ。輝のことを。」
「いいよ。でも教えられるのはひーくんの目的とか事情だけ。力の秘密とか過去は私も知らないから。それじゃあ、ちょっと場所を移そうか」
「なんで場所を移すんだ？」
「ひーくんの事情を説明するのに欠かすことのできない奴のところだよ。」
そう言っている束さんの顔は、いや、顔だけでなくその声すら笑っておらず心の底から怒っているような感じだった。

愚者の最後、ラストオーダー

旅館の倉庫

ここは元々旅館の倉庫だった物を束さんが【後で直す】という約束のもと女将さんにお願いして改造したものだ。【ある男】を閉じ込めておく為の牢獄として。

「!?早く僕をここから出せ!!」

「何故彼の元に来る必要があったのですか?」

セシリアが今にも奴に殺しにかかりそうな目をしながら束さんに尋ねた。輝が殺されかけたんだ。当然だろう。

「そうだね。まずみんなに質問。【転生】ってわかる?」

「転生?確か仏教とかでいう【前世の記憶などを持ったまま生まれ変わる事】よね?」

「うん、鈴にゃんの言ってるのであってるよ。」

鈴にゃんて・・・。

「それでその転生をした者を【転生者】って言うんだ。アニメとか小説でも【神様転生】とか言って転生者がいたりするね。そこのクソ野郎がその転生者なんだよ。つまりコイツはこの世界の人じゃないんだ。」

「「!?」」

その話を聞いた全員が驚いた。まさかコイツが異世界の存在だったなんて。

「しかも更にタチが悪いことにコイツの転生は【憑依転生型】。その世界の人物に憑依する形での転生したんだよ。」

「待ってよ篠ノ之博士!!織斑一夏が憑依された転生者だとしたら【元々の織斑一夏】はどうなったのよ!?」

「話は最後まで聞いてよ。確かに織斑一夏は憑依された。なら【本来織斑一夏であるはずの魂】はどこに行くと思う?」

「まさか!?」

「そう、みんなの想像通り。あっくん。【織斑秋斗】君が本来の織斑一夏なんだよ。」

そんな・・・・・・俺が本当は別の存在だったなんて・・・・・・・!?
「あっくんがショックを受けるのも無理はないよ。しかもひーくんが言うにはひーくんの世界ではこの世界は【小説】になっているらしいんだ。ジャンルは【ＳＦ学園バトルラブコメディもの】らしいよ?」
ジャンル欲張り過ぎだろ。
「そこで主人公である織斑一夏はみんなにモテモテでハーレム状態だったらしいんだ。それを実現する為にコイツが同じ転生者だと思ったあっくんを排除しようとしたんだ。これが今までコイツがあっくんに暴力を振るってきた理由だよ。」
そうだったのか。
「そしてひーくんはあっくんを守る為に女神様に助っ人として呼ばれたんだよ。」
「それでしたら輝さんも!?」
「ひーくんの場合は転生ではなく転移。人そのものを異世界に移動してきたんだよ。」

みんながショックを受けていると束さんはクソ兄貴に近づき逆五角形型の南京錠を胸に押し付けた。するとそこから鎖がたくさん伸びてクソ兄貴に巻きつき始めた。
「なんだよこれ!?」
「これはねお前用に女神様がひーくんに渡してそれを私が受け取った物だよ。」
突然クソ兄貴の後ろに扉が現れた。あれは・・・彫刻家であるロダンが作った
「地獄の門・・・。」
そう、シャルが言った様に彫刻家ロダンが作った【地獄の門】にそっくりだった。
「そう、これは【地獄の門】。ロダンが作ったのとは違ってこっちは本物だけどね。」
「なんでそんな物が?」

「それは決まってるよ。

　コイツを地獄に送る為さ。」

「なんで僕が地獄に!?」

「当然だろ？本来人は死んだら天国か地獄かの二択。そこで転生をしたんだ。女神様が言うには転生システムは本来の天国行きのチケットを対価にして転生してんだよ。それでも転生先で何も悪いことをしなければ天国に行くこともできるよ？神様の計らいでね？でもコイツは転生した世界で主人公を亡き者にしようとした。当然神様による天国行きのチケット復活はなし。そうなれば行くのは残った地獄だけでしょ？これは神様の力による範囲を外れて地獄に送る為の物だ。お前のようなのを地獄に送るためのな。」

　束さんが言い終えると地獄の門が開きそこから鎖が何本も伸びてきて転生者とやらの身体中に巻きつき門の中へ引きずり込み始めた。

「なんで僕が地獄なんかに!!やだ!!僕は織斑一夏だぞ!?この小説の主人公だぞ!?それなのになんで僕が!!」

　転生者はなんとか鎖の中から片手を出して必死に門の縁を掴んで鎖が引っ張る力に抵抗していた。

「バカなやつだよお前は。転生したのだからその生を満喫するなり原作知識を活かしてみんなを助けて幸せにするなりモブに徹するなりすれば良かったのに。なんで自分の知ってる物語通りにならなかったか教えてあげよっか？」

「わかるのか!?さっさと教えろ!!」

「実にお前は愚か者だったよ。良いかい？

【お前が織斑一夏に憑依し転生してこの世界に織斑秋斗という存在が生まれた。】その時からお前の原作とは離れて全く別の物語になっていたんだよ。所謂【ＩＦの世界】。ここはもしもの世界さ。お前は選択を間違えたんだよ。」

　束さんは転生者に銃を向けた。

「でも、あっくんに酷いことした罰と白式と銀の福音（私の娘たち）を汚した罰は受けてもらうよ？」

だが、俺は束さんの手に自分の手を添えるようにして下ろさせた。
「あっくん？」
そして俺は転生者に近づく。
「そうだ！出来損ない！さっさと僕を助けろ!!」
「黙れ！今まで好き勝手してくれた分とセシリアを庇って怪我をした友の分だ!!」
そう言って俺は転生者の顔面を全力で殴りとばした。転生者はその衝撃で手を離した。そして門は閉まり転生者はこの世から姿を消した。
「それであっくんはどうする？元々名乗るはずだった織斑一夏に名前を変える？」
「いや、もし変えたら今までの俺を否定することになっちまう。だからこのまま【織斑秋斗】として生きるよ。」
「ところで、輝たちの【ラストオーダー】というのはどういう計画なんですか？」
そう言えばシャルの言う通りだ。
「ああ、ラストオーダーね。簡単に言えば【世界の統一化】が最終目標だよ。人間ってのは古来より憎しみ合い戦いあってきた。でも、お互い共通の敵が現れた場合はお互い力を合わせて敵を倒してきたんだ。ひーくんたちはそれを実現しようとしてるのさ。この世界は【実銃などの旧科学を使う虐げられた男】と【ＩＳという近代科学を使う虐げてきた女】に分かれてる。それでは一生心を１つにするどころか近い内にお互い殺し合って人類滅亡なんてことになるだろうね。そこで【ＩＳも戦争をする為の軍事力もまとめてぶっ壊す】って世界に先生布告する。すると戦闘機やら実銃やらを使う男とＩＳを使う女両方の敵になる。そうすれば男女が手を取り合ってまとまるという算段さ。これが【ラストオーダー】だよ。」
輝がそんなことをしようとしてたなんて・・・・・・。でもちょっ

と待てよ？
「でもそんなことをしたら輝さんたちは!?」
「うん。確実に集中攻撃されて死亡だろうね。でも、みんなが軍や女どもより早くひーくんの元に行ければその最悪の結果は免れるかもよ？」

そうか！その手があったか!!
「こうしちゃいらんねぇ！みんなＩＳ学園に行くぞ!!」

こうして俺たちは司令室を飛び出した。

「束様も酷い方ですね。」
「なんのことかな？くーちゃん」
「ラストオーダーは秋斗様とセシリア様がいて初めて本当の最後ではありませんか。」
「うん、そうだね。でもねくーちゃん。

ここで彼の意思に背いたらこの世界は一生１つになれないし彼らの覚悟が無駄になっちゃうよ。私はそんなことできないよ。」

決戦

推奨ＢＧＭ
『ｕｎｒａｖｅｌ』

ＩＳ学園に着いて輝の元に行こうとするとその途中で元亡国企業のオータムとスコールと名乗る２人が立ちはだかったがそこはみんなが俺とセシリアを輝の元に行かせてくれた。

俺とセシリアは屋上、いつもみんなで昼飯を食べていた場所に来た。するといつも俺たちが食べていた場所に男が座っていた。輝だ。

「輝！こんなことはやめろ!!学園のみんなも解放するんだ!!」

「そうです輝さん!!こんなことはやめてください!!もっと他に何か良い方法があるはずです!!」

しかし輝は何も言わず立ち上がり構えた。ああ、そうかよ。『止めたければ俺を殺してみろ』そういうことかよ。

「わかったよ輝。やってやるよ。そのかわり、俺が勝ったらこの計画を止めるのは勿論お前自身の過去とか話してもらうからな!!」

そして俺が鳳羽白光を展開して新しく追加された【雪片二型】を出した。だが次の瞬間目の前に腕を刀の形に変えた輝が迫っていた。俺は咄嗟に身体を逸らすことで攻撃を躱した。それでも前髪が何本か斬られたのがわかった。そのまま通り過ぎた輝の方に身体の向きを変えると数メートル先のところで急ブレーキして裏拳の要領で斬って来た。今度は俺も雪片を使って受け止めた。が受け止めた瞬間まるで２トントラックを身体全体を使って止めた様な凄い衝撃が襲ってきた。いや、実際に止めたことは無いけど。今まで輝と何回も戦ってきたけどこんなに重い一撃は初めてだ。しかも輝自身はさることながら攻撃が速すぎる。ハイパーセンサーを使ってもギリギリ反応して躱すのが精一杯だ。こちらから攻撃する暇なんてない。それでも俺は負けられない。絶対にコイツに勝って計画を止める！

やがて俺の目が輝の動きと剣速に慣れてきた頃からこちらからも攻撃をするようになった。それでもクリーンヒットはもちろん掠りすらしない。全部紙一重で躱されている。

『少し良いですか？』
　こんなタイミングに誰だ!?ってちょっと待て。この声って。
『私です。秋斗。』
　やっぱりクロか！躱しながらだから反応がイマイチだと思うがそれで良いならなんだ？
『あなたにお話ししようと思いまして。【ラストオーダー】の全貌を。』
　ラストオーダーの全貌!?束さんが言ってた軍事やらＩＳに乗った女たちが輝たちを殺しに来るからそいつらに圧倒的な力を見せつけつつ最後に殺されるのが計画じゃないのか!?
『ええ、その通りです。ですがそこはまだ最後ではありません。束様言ってましたよね？【君たちが行けば最悪の事態は避けられるかも】と。』
　言っていたけどそれがどうした？
『わかりませんか？元から最悪の結果なんて無いんです。あなた方が輝の元に来て戦う。今この瞬間も【ラストオーダー】に含まれてるのです。】
　なんだと!?どういうことだ!!
『まず束様の話を聞いてあなた方が輝の元に来る。その途中でスコール様やオータム様が立ちはだかり他の方々が秋斗様とセシリア様を輝の元に行かせる。そしてあなたと輝が戦い輝があなたを殺す寸前まで攻撃します。そして輝があなたにトドメを刺す直前に輝自身が身体の中にあるナノマシンを使ってセシリア様のブルーティアーズをハッキングして自分を撃たせる。結果だけ見ると【ボロボロになりながらも輝に喰らい付く男の姿】と【男が殺されそうな時に助けに入り敵にトドメを刺す女の姿】、そして【強大な敵を前に互いの手を取り合う男女の姿】が世界の目に写ります。そうすることで世界の統一の第一歩とする。これがラストオーダーの全貌です。』
　そんなことが・・・。ちょっと待て。
　なぁ、それって軍や女性たちが来る前に俺が輝に負けなければ良いんだよな？

『そうですが・・・。・・・・!?まさか!?』
そのまさかだよ。
秋斗ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

輝ｓｉｄｅ
「なぁ、輝。最終的に自殺するつもりって本当か？」
［っ!?］
何故秋斗がそれを!?そうか！クロの仕業か！
［クロが言ったのか。それを知ってるってことはラストオーダーの全部を聞いたってことか？］
秋斗は俺がここに来て初めて喋ったことに驚いていた。
「ああ、聞いたよ。だから言わせてもらう！お前が犠牲になる必要なんてない!!」
［こうでもしなければ人は１つになれない!!］
「違う!!お前のその考えはお前の過去が関係しているのかもしれない。その過去を俺たちは知らないから何も言えない。それでもこれだけは言える。お前は事を難しく考えすぎだ！人ってのはもっと簡単なんだよ。この世界の人はまだお互い話し合っていない！対話をしていない！お互いの気持ちを！考えを尊重し理解し合えば１つになれる！確かに争いをなくし平和にするのは難しい。それでもお前が死ぬ必要はない!!」
［そんなことを言って俺が素直に食い下がると思ってんのか？］
「いや、小学生からの仲だからな。そんなこと思っちゃいねぇよ。だから・・・。」
秋斗はそう言葉を止めると雪片だけ展開して正面で構えた。
「俺はお前に勝つ!!勝ってお前を死なせはしない!!」
推奨ＢＧＭ
『真っ赤な誓い』ｏｒ『ＴＨＥ　ＨＥＲＯ!!　～怒れる拳に火をつけろ～』
その瞬間秋斗の全身が紅くなった。今までの零落白夜とは違う。なんだあれは。

そう思いつつ警戒をしていたら目の前から秋斗の姿が消えた。そして少し遅れて左頬に痛みが走った。触ってみると血が出ていた。後ろを振り返ると雪片を振り抜いた状態の秋斗がいた。一瞬で斬ったというのか!?俺の目でも見えなかったぞ!?これが秋斗の新しい力か!!

面白い!!!

そして俺たちは全力でぶつかり合った。斬って斬られてを繰り返した。その戦いは常人の目で捉えることは愚か熟練のＩＳ乗りですら目で追うことも不可能な程に速く凄まじい戦いだった。

輝ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

セシリアｓｉｄｅ

秋斗さんたちが高速移動しながら戦い建物の一部を破壊しながら第３アリーナまで来ました。私がアリーナに着いた少し後に鈴さんたちが来ました。後ろにはスコールさんとオータムさんもいます。着いたは良いものの目の前の凄まじい戦いにみんな気圧されていました。

「みんな何をしているの!?早く２人を止めに行くよ!!」

シャルロットさんの言葉で皆さんが我に返り２人を止めに行こうとするとオータムさんとスコールさんに止められました。

「何してんのよ!!そこを退いて!!」

「やめとけ。あの戦いには割って入れねぇ。今あの２人はお互いの気持ちと覚悟、意地などをぶつけ合ってんだ。そんな戦いに割って入っちゃいけねぇ。」

「それにあの２人の顔をよく見なさい。【今の２人には世界がどうとか死ぬかどうかなんてもう考えていないみたいよ?」

本当にその通りだ。２人は今笑いながら殴りあっています。まるで本気で喧嘩をする友達のように。

『セシリア様少し良いですか?』

あなたはクロさん!?一体どうしたのですか?

『今からお願いしたいことがあります。これにこの後の全てが掛かっており輝を止める最後の切り札です。』

セシリアｓｉｄｅ　ｅｎｄ

輝ｓｉｄｅ

俺が右手の剣で秋斗を刺そうとすると秋斗は左手を突き出し俺の剣を手の平で受け止めた。今度は左で刺そうとするが秋斗は右手で受け止めた。お互いの両手が相手の両手を塞いでいる状況だ。

「うぉおおおおお!!!」

［何っ!?］

秋斗はそのまま俺を押す形で走り始めた。俺はブレーキのために足をフックの形に変身させようとした。その時だった。

「もうやめてください!!【春人】さん!!」

［!?］

その声が聞こえた方を見る。そこにいたのはセシリアだった。・・・ありえない。その名を他人に呼ばれることがあるはずがない。・・・なぜセシリア【その名】をしっている？

そんなことを考えているうちにブレーキを逃し俺は後ろにあった大きな瓦礫にぶつかった。

［がっ!!］

あまりの衝撃にその瓦礫が崩れた。だが秋斗は止まらずそこから頭突きをしてきた。

［ぐっ!!］

その勢いで後ろに仰け反り両手の剣が秋斗の両手から抜けた。秋斗は穴が空いて血も出てる右手を握りしめて全力で腕を引いた。

「これで終わりだーーーー!!!」

そしてその右ストレートは完璧に俺の顔面を捉えた。ああ、久々にこんなに全力で戦った。完敗だよ。秋斗。

そして俺は倒れた。

秋斗ｓｉｄｅ

「痛っ！鈴！もう少し優しく！」

「あんたバカ!?普通剣を掌で受け止める!?穴が空いて血も出てる手で

殴る!?」
　そのあと俺は鈴に手当てをされていた。
「輝さん!!大丈夫ですか!?」
　セシリアの声を聞いてそっちを見ると輝が倒れていた。
［ああ、全身痛いけど大丈夫だ。］
　そして俺は鈴に肩を貸してもらいながら輝に近づいた。
「なぁ、輝。まだラスボス気取って死ぬつもりか？」
［・・・いや、もう思ってねぇよ。俺はお前に負けた。俺を生かすも殺すも勝者であるお前次第だ。］
「じゃあ、戦う前に俺が言ったこと覚えてるか？」
［そうだったな。じゃあ、話してやるよ。俺の過去を。］

　そして1人の少年の残酷な過去が明らかになる。

過去　～前編～

とある国にある1組の夫婦がいました。その夫婦は中学時代からの知り合いで尚且つお互い好意を抱いていましたがその気持ちにお互い気付かないまま月日は過ぎ高校3年の文化祭の時にようやく男の方が告白して結ばれました。それから数年後ようやく夫婦の間に子供が産まれました。男の子でした。夫婦は待望の子供が産まれたことで【彼】含めて幸せでした。しかし、その幸せも長くは続きませんでした。

なぜなら、【彼】が3、4歳の時に誘拐されてしまったからです。夫婦は全力で探しましたが結局【彼】を見つけることはできませんでした。

実は【彼】を誘拐したのは宇宙人でした。その宇宙人たちはその昔宇宙全体規模での戦争に参加していましたがある日とある殺し屋により星を破壊されました。彼らはその生き残り、正確にはその殺し屋に恨みがある者たちが集まってできた組織でした。【彼】はその者たちに育てられました。ただし普通とはかけ離れた育て方でした。小学校で習う勉強や道徳、主に【命の重さ】や【他人への優しさ】などを一切教えずその代わりに人体の急所の位置、爆弾や銃器の構造や作り方、解体方法、相手の効率的な殺し方、戦いにおいての身のこなしなどを教えていきました。その合間に【彼】をほぼ全身を改造してその殺し屋に対抗する術を手に入れました。

その後人体改造を終え、殺し屋としての教育も終え殺し屋として【彼】に任務を与え邪魔な敵を片っ端から殺させて行きました。

そして、殺し屋としての名前が付けられました。元々対抗する目標であった殺し屋の通り名と対となるような名前

【白銀の輝】と。

そんなことをして年月が過ぎ彼が12歳くらいになる頃でした。【彼】に1つの任務が入りました。それは【とある夫婦を殺せ】という物でした。人を殺すことに違和感を感じない【彼】は任務通りその夫

婦の元に行きました。人体改造により身につけた変身能力（トランス）を使い腕を剣の形にして夫婦を斬りました。そして床に倒れている夫婦を見下ろしながら不意に視界に入った写真を見ました。そこにはなんと幼い頃の【彼】とそれを挟む様に両脇に幸せそうに立っている夫婦の姿がありました。そして【彼】は理解しました。ここに倒れているのは自分の親なのだと。その親を自分の手で殺したのだと。そして【彼】が混乱している時に【彼】の頭に何かが当たりました。それは父親の手でした。そして父親は【彼】に言いました。

「大きくなったな」と。

そして母親が弱々しくも【彼】を抱き締めながら言いました。

「こんな形だけど死ぬ前に会えて良かった。」と。

そして2人の手から力が抜け【彼】の頭と背中から離れていきました。

命の重さなどを教わっていない【彼】でも現状は理解できました。過去にも同じように夫婦を殺したことがあったからです。その時は夫婦の子供が両親の亡骸にすがりつきながら大声で泣いていたのを覚えていました。そして【彼】は自分の手で両親を殺したことを理解しました。もう戻ってこないことも。そして【彼】は【彼】自身が覚えている中で初めて本気で泣きました。その後の彼は涙を流しながら組織に戻り鬼の形相で組織の者を片っ端から殺していきました。その途中で攻撃を右目にくらいますがそんなことに構うことなく殺していきました。

そして全てが終わった後家に戻り夫婦の、いえ、両親の、亡骸を持ってある場所に行きました。そこは辺り一面にキキョウの花が咲いている場所でした。キキョウの花言葉は【永遠の愛】。3人でここに来たことを微かに覚えていました。そして【彼】は両親の亡骸をそこに埋め、墓を作り、2人の墓に【白のダリア】と【紫のヒヤシンス】をお供えしました。【白のダリア】の花言葉は【ありがとう】、【紫のヒヤシンス】は西洋の花言葉で

【ごめんなさい】

そして彼は人体改造により得た変身(トランス)能力を封印し身体能力もできる限り封印しました。二度と誰かを傷つけない為に。右目は自身の変身能力と回復力を使えば完全に治せますが【彼】は治そうとしませんでした。自分への戒めの為です。センサーのような赤いカメラアイは目を閉じ上から眼帯をする事で封印しました。

過去～後編～

そして月日は流れとある国。

その国は貧富の差が酷く金を持つ者は醜く太り毎日贅沢をして過ごし、貧しい者は痩せ細り毎日を生きていく為に必死でした。

そこに【彼】の姿がありました。

服はボロボロのTシャツと長スボンで組織にいた頃より明らかに痩せていました。力を封印し今は１２歳の子供くらいの力しか出せません。そのため力仕事はできず組織で算数などを教わらなかったため仕事に就けず毎日パン屋や店から食べ物を盗んで毎日をギリギリ過ごしていました。醜く太った大人たちには決して追いつけはしない風のようにただ走りました。

ある日、いつものようにパン屋からパンを盗んで店主から逃げている時に市場の人混みの中で１人の俯いた少女とすれ違いました。その少女は恐らく奴隷として買われて来たのでしょう。俯く少女の目には涙が、そしてその少女の手を醜く太った男が握って他の大人と話していました。黒く腰まで伸びた長い髪に所々泥などが付いており服も綺麗なお召し物とは程遠い物を着ていました。それでも【彼】はその少女を美しいと目を奪われていました。そしてその大人と少女の跡をつけ、屋敷を突き止めました。

次の日から【彼】は少女に会いに行きました。最初は少女もぎこちない反応でしたが次第に心を開き名前を教えてくれました。少女は【クロナ】というそうです。【彼】も【白銀の輝】と呼ばれる前の元々の名前を【少女】に教えました。そのあと見せてくれた笑顔に【彼】は心を奪われ翌日からも会いに行きました。屋敷の柵を越えて侵入したり木に登ったりして【少女】に会いに行きました。そして色々なことをして【少女】を楽しませました。いくら力を封印しても手先などは器用なのでそれを生かし手品をしたりしました。

ただ【少女】の笑顔が見たくて。

【少女】と初めて会ってからどのくらい経ったか。【彼】は【少女】に言いました。

「この国には夕日がとても綺麗に見える花畑がある。いつか連れて行ってあげる。」
と【彼】は【少女】と約束しました。

しかし【少女】は会いに行く度に痣が増えたり傷が増えたりしていました。【彼】が聞くと【少女】は
「あの人に殴られたりしているの。でも大丈夫。こんなの全然大したこと無いし毎日あなたが来てくれるから耐えられる。」と。
それで彼はその言葉で自分はこの子を救えてる
、力が無くても救える、そう思いました。いえ、思い込んでしまいました。

そしてその日が来てしまいました。
ある日【彼】がいつものように【少女】に会いに行くと【彼】は見てしまいました。あの時の大人に殴られたり蹴られたりする【少女】の姿を。そして大人が部屋を出て行ったあと身体中の痣や傷を自ら布切れを巻いたりして治療する【少女】の姿を。組織を破壊してからずっと人の世で過ごしてきた【彼】はあの頃より遥かに人の心を理解していたが故にわかってしまいました。前に自分が傷のことを聞いた時言った言葉は本当は我慢していただけなのだと。
そして彼は走り出しました。武器屋から剣を盗み屋敷の、【少女】の元へひたすら走りました。重い剣を引きずりながら走る姿は【風】というにはあまりにも悲し過ぎるものでした。
やがて屋敷に着き警備兵や屋敷の中にいる者を斬り殺して行きました。その途中で奴隷がいた為その者たちは逃しました。しかし、その助けだした奴隷たちの中に【少女】の姿はありませんでした。そして屋敷中の奴隷や優しそうな人たち以外を殺して屋敷の主人だったあの時の大人も殺したあと、漸く【少女】を見つけました。【少女】はひたすら床を拭いていました。【彼】は急いで【少女】に近づいて行きました。それに気づいた【少女】はすぐ側まで来ていた【彼】を見上げました。そして彼は絶句しました。【少女】は壊れた魂で微笑みま

した。そこには【彼】が好きだったあの笑顔はどこにもありませんでした。【少女】の心は壊れてしまったのです。そして【彼】は【少女】を楽にする為に・・・いえ、そんな【少女】を見たくなかったが故に最後の一振りを【少女】に。

【少女】が力尽きる間際に何か言っていた気がしますが【少女】が声を出せなかったのと自分の無力さや世界の残酷さにショックを受けている【彼】は気づきませんでした。

その後【彼】は【少女】を布で包み抱えて屋敷を後にしました。そして【彼】が向かっていたのはかつて【少女】に約束した花畑でした。

そこに【少女】を埋めお墓を作りました。お墓が出来た後彼は本気で泣きました。

そのお花畑には薄い紫色の綺麗な【紫苑】が咲いていました。【紫苑】の花言葉は

【あなたを忘れない】

しばらく泣いた後、まるで全てがどうでもいいかのような顔でその場を去りました。そして飲まず食わずのまま歩き続けてついに【彼】にも限界が来ました。【彼】は倒れ、【ああ、自分はここで死ぬんだ。もし生まれ変われるなら次は今よりもっとマシな人生を送りたい】そう思いながら彼は目を閉じました。

しかし、【彼】は目を覚ましました。なぜか【彼】は室内にいてベッドに横たわり布団までかけてありました。すると、突然部屋のドアが開きました。入って来たのは金色の綺麗な髪をして黒い服を着た女性でした。【彼女】が言うには好物を買いに行った帰り道で生き倒れていたのを拾ったそうです。その後、【彼】は治療や身体の回復の為に【彼女】と過ごしました。そしてある日ある事実を知りました。なんと自分の命を救ってくれた【彼女】こそが自分を誘拐し改造してまで倒そうとした【殺し屋】なのです。まぁ、そんなことがあったとしても【彼】としては【彼女】を殺すとかそんなのどうでもよかったのです。そして【彼】は自分にも変身(トランス)能力があることを伝え【彼女】を師として能力の使い方などを教わりました。

そしてそれから数年後、【彼女】との修行中に教わったことを胸に

【少女】の墓の前に来ました。そして【彼】は誓いました。
【この誰かを何かを破壊する為に作られたこの力でみんなを守ってみせる。この力が破壊する為の力じゃないと証明してみせる】
と。
それから数年後、彼はあの誓った日からずっと世界の闇と影ながら戦い続けました。いつしかそんな戦いをするものたちが集まり【白夜の黒十字】が作られました。

平和への分岐点

［・・・と、まぁこんなところだな。って
何でみんな揃って泣いてんだよ。］
輝が自身の過去を語り終わって秋斗たちを見ると全員が泣いていた。
「そりゃあ当然だろ。お前にそんな辛い過去があったなんて。むしろなんで輝は泣いてないんだよ。」
［言ったろ？俺は道徳関係を教わってなかったからその辺鈍いんだよ。それに過去に2回本気で泣いたからな。その2回でもう泣ききったんだと思う。］
「それで、【春人】って何よ。」
［【春人】は俺の元々の、【白銀の輝】や【白銀輝】を名乗る前の実の両親がつけてくれた名前だ。んで、ラウラが前に戦ったあの時のが【春人】。所謂、元々の人格で俺は改造の果てに生まれたもう1つの人格だよ。それが改造の果てか【春人】が作り出したのかはわからないけどな。ところでセシリア、なんで【春人】（あの名前）を知ってたんだ？］
「それは、クロさんに聞いたからですわ。」
そもそも【春人】（彼）の名前を知ってるのはこの世界どころか元の世界にもいないはず。それなのにクロが知っていたことに輝は驚いた。
［どういうことだ!?クロ!!］
『それを説明する前に確認させてください。輝が【春人】の名前を捨て【白銀の輝】名乗りつづけ、それ以降【春人】の名前は使っていないのですね？』
［ああ、その通りだ。だからお前が知ってるのが不思議なんだ。］
『それなら私が知っていてもおかしくありません。だって・・・・・・。』
クロが言葉を区切ると突然光りだした。光が止むとクロだった者は違う姿をしていた。ほとんどクロと変わらないがクロよりどこか幼さを感じるような感じだ。その姿がこの場のみんなは誰かわからないだろうが俺にはわかる。なんせ

「私が【春人】の名前を覚えてる最後の人だもん。」
なんせ、産まれて初めて好きになった人だからだ。
推奨ＢＧＭ
『伊藤由奈』さんの『ｔｒｕｓｔ　ｙｏｕ』
［そんな・・・・・・、【クロナ】・・・・・・。でも・・・・・・どうして？・・・・・・］
俺は目の前にクロナがいることに頭が追いついていなかった。
「死んだあと私はずっと君の守護霊として側にいたの。君に幸せになって欲しかったから。そしてこっちに来るとき女神様が言ってくれたの。『彼は散々苦しみ続け辛い思いをしてきました。そんな彼に幸せになって欲しいのと私たちの願いを聞いてくれた彼へのせめてものお礼です。』ってね。そして私は君の専用機【クロ】として蘇ったの。」
［あ・・・・・・、あ・・・・・・］
そして俺はゆっくりとクロナに近づきクロナの肩や腕、顔や髪を触った。確かに触れる・・・。つまり目の前にクロナがいる・・・！
そして俺は膝から崩れ落ちた。それをクロナはしゃがんで抱き締めるように支えてくれた。
「あの時のことでずっと苦しんでいたんだね。ごめんね。私のお願いであなたをここまで苦しめていた。それとありがとう、私をずっと覚えてくれていて。あの時の伝えられなかったの今言うね？【助けてくれてありがとう。私のヒーロー】」
［あああああああああああ!!］
そして、輝は人生で３度目である本気泣きをした。輝は気づいていなかったがその時彼の白い髪は黒と白のメッシュが同じ比率で合わさったそんな髪になった。

それからしばらくした後、世界中の軍やＩＳが向かって来てること

がハイパーセンサーでわかるようになった頃突然通信が入った。
『現在ＩＳ学園空域及びその周辺に近づいている人たち全員にデータを転送します。
私は篠ノ之束です。』
ウインドウには束が映っていた。
『つい先程全世界の軍事施設のミサイルが何者かにハッキングされ発射されました。そのミサイルたちはＩＳ学園方面に向かっておりそのデータに表示されている範囲にミサイルが落ちます。その範囲はＩＳ学園や商業施設、他にも人口密集区域があり放っておくと沢山の犠牲者が出ます。世界をこんなに歪めた私が言えることではないと思います。それでも言わせてください。

お願い！みんなを守って！』
その言葉を聞くと同時に輝たち白夜の黒十字のが動いて遠距離武器を展開して迎撃に向かった。その後秋斗たちも動いた。秋斗たちが動いた少し後にミサイルが飛んできた。全員で撃って向かってくるものを全て撃ち落としていた。だがあまりの量に苦戦し撃ち漏らしたと思ったらどこからかの銃撃により破壊された。その方向を見ると戦闘機が複数飛んでいた。
「あれは自衛隊!?他にも中国やイタリアの軍まで!?」
鈴が言ったように自衛隊や各国の軍が駆けつけて迎撃に加わってくれた。いつの間にかＩＳ学園の生徒や各国の代表候補生、代表操縦者まで駆けつけていた。さらに
「隊長!!我々も参戦します!!」
「クラリッサ！お前たち！」
ラウラの所属部隊『黒兎隊』やドイツ軍も参加していた。
（これだけいればなんとか地上への被害はゼロで済むだろう。）
秋斗がそう考えているとクロエから通信が入った。
『今そちらに複数のＩＳが接近しています。この反応は【女性権利団体】です！』
「輝さん!!」

「安心しろ。そっちも俺の計画通りに行ってれば大丈夫だ。」
輝のその言葉の通り女性権利団体は輝や秋斗、戦闘機には目もくれずミサイルの迎撃に加わった。女性権利団体が加わることによりそこにはある1つの奇跡が起きていた。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ラビット社司令室

「束様・・・。私が見ているのは夢でしょうか。それとも幻ですか?」
「私もそう思えてしょうがないけど現実だよ。本当に嬉しいことにね。くーちゃんに前言ったよね。『人間は何か1つの目的があれば簡単に1つになれる』って。この光景を見てどう思う?」
　クロエと束が見ているモニターにはミサイルを迎撃している光景が映っていた。2人の男性操縦者、IS学園の生徒各国の代表候補生、代表操縦者、各国の軍、そして女性権利団体、その全てがミサイルの迎撃をしていた。
『市民の命がかかっている。』こんな状況で初めて1つになるとは・・・。皮肉なものですが悪くはありませんね。」
　そこに言葉はない。会話もない。合図もなければコミュニケーションは何もない。真の意味で『1つになった』と言うには程遠いだろう。それでも『市民を守るためにミサイルを1発残らず撃ち落とす。』その意思の元に確かに世界は1つになっていた。

　それがずっと続き結果として街に落ちたミサイルは1発もなかった。故に市民の犠牲者は0だった。
　この事件は後に『世界が本当に1つとなり平和な世界になるきっかけ又は第1歩』として『平和への分岐点（ターニングポイント）』と呼ばれ歴史の教科書に載ることになるのだがそれはしばらく後の話。

エピローグ

あれから7年が過ぎた。

みんな大学だったりを卒業してそれぞれの道に進んだ。具体的には

学園長が退職して山田先生が後を継いだ。最初はみんな織斑先生を推したが織斑先生自身が「ここは私よりしっかりしている山田先生がやった方がいい。それにそんな上の立場にいてはいざ非常事態となった時に動きが制限されてしまう。」と言っていたので山田先生が請け負った。その代わり織斑先生はＩＳの実技関係の主任として生徒を教えるようになった。

シャルロットはフランスにデュノア社を再建。今回は昔のような失敗をしないように開発するＩＳのテーマを決めてそれに特化したＩＳを作り磨き上げて行くらしい。そのテーマとはシャルロット自身の専用機の特徴と言える【大容量のバススロット】と【装備の切り替えの速度の追求】だそうだ。それとデュノア社社長と掛け持ちで候補生たちに自身の特技【高速切替（ラピッド・スイッチ）】を教えているらしい。

それとＩＳの関連企業がこぞって宇宙進出のために動き始めた。もう戦争に使うために開発している企業は無いだろう。無論デュノアも武器の開発ではなく装備の換装、バススロットに入れてあるものを高速で出すために教えている。

ラウラはドイツの軍で一個師団を抱えるようになった。軍もやる事は専ら災害の際の救助活動だったり事故が起きた際の救助活動だけらしい。

鈴はＩＳからは離れて中華料理店をやっているらしい。もし国から緊急の出動要請が来たら出るだけだそうだ。

刀奈は実家の【旅館更織】を大きくして【ホテル更織】まで造った。噂では五つ星を取ってスイートルームは1泊何十万するとかしないとか。

簪は何故か【仮面ライダーのベルト全部作る！】とか言い出して

フィーバーしている。フォトンブラッドとか無いしアンデッドもいないから無理だろと思ったがとりあえずゼクターは作れた。
篠ノ之箒は【己を鍛え直す！】とか言って日本刀を持ってどっか行った。とりあえずこの間ＢＳニュースで見た【謎の女が刀１つでマシンガンを持った数十人を１人で倒した】とかやってたがあれは箒では無いはずだ。たぶん、きっと、ネイビー。
秋斗はアクション俳優になっている。スタント無しの全部ガチアクションの俳優だ。この間の映画なって地上数百メートルの高さからリアルに飛び降りてた。まぁ、アイツは人間辞めてるし常識が通じないからしょうがない。今どっかから「お前に言われたくない！」ってツッコミが聞こえた気もするが気のせいだろう。とりあえず秋斗の家には今度シュールストレミングを送ってやろう。着払いで。
セシリアはと言うと・・・数年前に俺を庇って死「勝手に殺さないでくださいませ。」ぬなんて事はなく今も俺の隣りにいる。どうやら臨海学校の際に俺の血を浴びたことでナノマシンが入り込み見事に適合。俺と同じく人外スペックを持ち今では白夜のＮｏ２になっている。
そう、みんな前に進んでいる。争いの無い平和な未来に向かって。だが残念ながら今でも悪巧みをする奴はたくさんいる。
「その為に私たちがいるのでしょ？」
「ああ、みんな頑張っているんだ。なら、こういうのは俺たちが頑張らないとな。」
「輝さん、時間ですわ。」
「おう、それじゃあいっちょ・・・」
「「ＣＯＯＬに決めるぜ!!（決めますわ!!）」」
そう言って俺たちは飛んでいる飛行機から飛び降りた。

あとこれは完全にクソどうでもいいくらい余談だがアベルとアナ

ベルが結婚した。

ホラーブレイク編
トラブルはいつも突然にｂｙ輝　大体はお前のせいｂｙ秋斗

これは『平和への分岐点（ターニングポイント）』が終わって数ヶ月後の秋のことだった。

秋斗ｓｉｄｅ

ここ最近、ＩＳ学園である噂が広がっている。それは『旧校舎４階の４組の壁にあるシミに話しかけると【死季子さん】に連れて行かれる』というものだった。旧校舎といっても木造ではなくただそこまで綺麗ではなく本校舎のようにハイテクではないというだけだ。そんなオカルトな話を誰が信じるのかという話だしそもそもそんな厄介ごとに好き好（すこの）んで首を突っ込む奴がどこにいようか。

刀奈「秋斗くん。もうすぐ噂のポイントよ。」

・・・・・はい。いましたね。ここに1人自ら厄介ごとに首を突っ込むというかアウトでレイジかつビヨンドな方々のど真ん中に挑発しながら突撃をキメるようなバカな真似をするバ会長が。ちなみに俺とバ会長のほかに輝や代表候補生の面々、要はいつものメンツが全員います。

シャル「あれ？でも会長。確かシミは４日連続で通らないといけないのでは？」

そう。あの噂の通り死季子さんに連れて行かれるには４日連続でシミを見なければいけない。今日が初日だから明日からバックれよう。

刀奈「それなら大丈夫。私が予め昨日まで３日連続でやっておいたから今日がその４日目よ。」

・・・今ここ（４階）の窓からこの人ごと飛び出して地面に筋肉ドライバーをかましたとしてバ会長に訴えられても裁判で勝てると思う。

やがて件のシミの場所に着いた。（というか着いてしまった。）だが

そこにシミはなかった。
その代わり女子生徒が立っていた。ただ・・・なんか全体的に青い。アレは確実に関わってはいけない奴だ。スルーしよう。
秋斗「おい、そこのトラブルメーカー。何もするなよ?」
輝「待て、だれがトラブルメーカーだ。どちらかといったらハッピーメーカーだ。」
秋斗「お前のどこがハッピーメーカーだ?基本面倒ごとは全部お前が持ってくるだろうが。μ’sに空中3回転ひねり土下座してこい」
俺と輝がそんなやりとりをしていると。
ラウラ「おい、こんな時間にこんなところで何をしているんだ?」
おい、そこのバカ眼帯。早速やらかすなよ。
ラウラが話しかけたと思ったら一瞬この世のものとは思えないようなおぞましい顔が目の前に現れたかと思うとそれは消え壁には女性が叫んでいるような青いシミがあった。
刀奈「あれ?おかしいわね。これで条件は整ったはずなんだけど。」
よくわからないがまだ厄介ごとから逃れる可能性がワンチャンあるってことか?

・・・・・はい、数分前まではそんな幻想を抱いていました。もうそんな幻想はぶち壊されたけどな。だってさっきからずっと廊下を歩いているのに一向に階段が見えないんだもん。隣りにいる鈴さんも遠い目をしてるし。
秋斗「鈴さんや、さっきのラウラのプレー、判定は?」
鈴「イエロー2枚」
よしっ!次回出場停止だ。
そんなことを話しながら歩いていると後ろに何かしらの気配を感じ振り返るとさっき一瞬だけ見えた女のが目の前にいた。その瞬間俺たちは意識を失った。

こうして秋斗たちは噂の通り死季子さんに連れて行かれた。しかし死季子さんは1つ大きな過ちを犯した。それは

『【白夜(彼)の黒十(ら)字】を狙ってしまったこと』だ。

Q、怨霊が襲って来た時の対処法は？A、拳でｂｙ秋斗

西野ｓｉｄｅ

はじめまして、私は西野ゆい。青樹ヶ海中学の３年生です。野球部のマネージャーをしている。今はというとネットで噂になっている【死季子さん】に同じ野球部の【安藤くん】と一緒に昭和死死年つまり昔の青樹ヶ海中に連れてこられた。なぜ私がここのことを知っているのかというと、当時からこの通称【闇の木造校舎】に幽霊としている【平田さん】に聞いた。他にも『チャイムがなったら急いで教室に入れ』と教わった。どうやら怨霊は教室には入れないらしい。そして今は校舎内を探索している。道中怨霊と化した【内田先生】に襲われもした。そしてまたあの【地獄のチャイム】がなった。これは怨霊が襲ってくる合図だ。

安藤「教室だ！急げ西野!!」

西野「うん！」

そしてなんとか襲われる前に教室に入れた。ちゃんと入り口も閉めた。これで安全ということもあり２人で安心していると

？『全く、輝たちに関わるとロクなことにならねえな。』

？『貴様！今回のことは師匠のせいだというのか！責めるなら私を責めろ！』

？『何言ってんだ。誰もお前のせいじゃないとは言ってねぇよ。むしろお前はＡ級戦犯モノだからな？』

？『何？僕の娘（ラウラ）に文句あるっていうの？』

？『うん、文句があるないの前にお前今何て書いてラウラと読んだ？あとなんでお前肩車してんの？』

と、廊下から知らない人たちの会話が聞こえた。まさか私や安藤くん、それと内・・・内・・・内山？そうだ、小林だ！小林先生の他にもこっちに引き込まれた人がいたなんて！しかもチャイムに反応してないことからまだこっちに来てすぐなのがわかる。あの人たちが

危険だ！私は安藤くんの制止も聞かずにドアを開けた。
内田『安藤く～ん』

西野「そこの人たち！早く「うるさい!!」」
西野「!?（？ω？、）」
安藤「ポカーン（。д。）」
私たちはこんな反応をした。否、正確にはそんな反応しかできなかった。危険を知らせる為にドアを開けて目の前で男の子と銀髪の子を肩車しているとブロンド髪の子が金子先生（内田）の顔面を殴りとばしてたらそんな反応をするのも当然だ。
？『大体気をつけてよね。秋斗はトラブルメーカーなんだから』
？『俺がトラブルメーカーだと？トラブルメーカーは輝だろ？』
？『トラブルメーカーはみんな決まってそう言うよね。』
待って？そこのお２人さん。何か殴りとばしておいてスルーですか？
？『つか、さっき何か殴りとばさなかったか？それよりも、あんた誰？』
男の子の方がこっちの存在に気づいた。
西野「え～と、廊下だと危険なのでとりあえず教室へ」
そう言ってその人たちを教室へ誘導した。ってちょっと待って!?ブロンドの人！肩車をしたまま教室に入ろうとしたら
？「へぶっ!!」
ほら～、銀髪の子が顔面ぶつけた。
？「なんだ!?敵襲か!?」
そんな顔面をソフトに狙う敵襲があってたまるか。

少女治療中＆説明中
鈴「なるほど、ここは死季子さんが作った異世界のようなもので地獄のチャイムが鳴ると怨霊が襲って来るから廊下にいるとアウト。教室に入ればセーフ。で、今は『２年４組に来いやオルァ!!』って放送があったから向かうところね。・・・理解したかしら？そこの３バ

カ」
秋斗・ラウラ・シャル「襲ってくる奴をぬっ殺せばいいことしかわからなかった。」
鈴「この脳筋どもめ!!」
なんか不安になってきた。

「安藤　死す」と言ったな。　アレは嘘だ。（究極のネタバレ）

とりあえずチャイムが鳴り終わるのを待ってみんなで２年４組に向かうことになったのだが廊下の角で内田先生（思い出した）がガン待ちしていた。

秋斗「あれがさっき言ってた内山先生の怨霊か？」

いいえ、内田先生です。

安藤「ああ、間違いない。あれは内泉だ」

間違ってるよ？安藤くん。内田先生だよ？

シャル「あれ絶対襲ってくるよね。内川先生。」

内田先生だよ。ってよくあんたら内田から色々繋がるな！

その後も何度か近づくけど『安藤く～ん』だの『こっち見て～』だの言うだけ言って去っていくのが続いた。

秋斗「それにしても本当にしつこいな、内藤先生」

もはや内ですらなくなってる。せめて内で括ろうよ。

そして何度目かの曲がり角に来た時

簪「角の向こうに何かいる」

秋斗「丸の内先生か！」

いや、確かに内で括れとは言ったよ？それでも最早原型ないじゃん。

秋斗「総員戦闘用意。」

秋斗くんの号令でシャルロットさんとラウラさんが何か取り出した。

秋斗→ＡＫ４７

ラウラ→レミントンＭ８７０

シャル→Ｐ９０を２丁持ち

西野「なんで君たちそんなの持ってんの!?ていうかどこから出したの!?」

私のそんなツッコミをスルーして一行が角を曲がるとやはり内田

先生がいた。
秋斗「ＦＩＲＥ!!」
秋斗くんの声と共に３人が同時に内田先生を撃ち始めた。怨霊相手に実弾なんて効くのかって最初は思ったけどこの人たちが殴ってたのを思い出して納得した。そういえば安藤くんもバッドで殴ってたや。誰だ、幽霊は触れないなんて言ったのは。
安藤「これでもう襲ってこなければいいんだけどな。ホワイト先生。」
外国人教師か。
秋斗「いや、アイツは相当お前にお熱のようだからな。また来ると思うぜ？カール大帝。」
もはや先生ですらない件。
そして【２年４組】に着いた。そこで壁と一体化している【村岡四季子】さんに【プールに溜まっている死季子さんの力の源である青い水を全部抜く】ことがここから出る唯一の方法らしい。とりあえずそこの３バカは壁を削って四季子さんに身体を付けるな。しかもボディ、リックディアスて。もうちょっとメジャーな線攻めようよ。

そして四季子さんに言われた通りにプールに来て溜まっている青い水を抜いた。その時だった。全部抜ききったプールの底から巨大な死季子さんが出てきた。そして
安藤「くそっ!!西野！逃げろ!!」
西野「安藤くん!!」
あろうことか死季子さんは安藤くんを掴んで底に去って行った。
？「どうかしましたか？」
私がそのことで泣いていると誰かが声をかけてきた。その声の方を見ると秋斗くんたちと同じ制服の金髪の綺麗な外国人が私の方をさすっていた。
セシリア「私はセシリア・オルコット。秋斗さんたちの友人ですわ。それで、何がありましたの？」

私はさっきまでのことを話した。
セシリア「そうですか。ご友人が。それなら安心してください。」
西野「安心って。安藤くんが連れて行かれたのにどう安心しろって言うの!!」
セシリア「大丈夫です。こういう時に1番頼りになるお方がこちらにいますから。ほら、見てください。」
セシリアさんがある方向を指差しながら言った。私がその方向を見ると秋斗くんたちと同じ制服を着た黒と白の髪をした人が釣り竿を持ってプールサイドに立っていた。その人は釣り竿から糸をプールの底の方に垂らした。少ししてその人が釣り竿を思いっきり振り上げると糸の先に誰かいた。
西野「安藤くん!?」
セシリア「だから言ったでしょう?安心してくださいと。」
確かに言ったし安藤くんが助かって嬉しいけど　え〜。

このふざけた扉をぶち壊す！ｂｙ安藤（つまり原作通りです）

西野ｓｉｄｅ

白銀くんの活躍で安藤くんが助かり今はとりあえず適当な教室に入って休んでいるところだ。

内ナントカ『安藤く～ん。』

安藤「いい加減しつけぇんだよ!!」

内田先生のしつこさに嫌気がさした安藤が持ってたバットで扉越しに内田先生を殴った。

・・・・・・・・・・・・・は？

安藤くん今何した？内田先生を殴ったのはわかった。それは別にいい。扉越し？バットで扉を殴れば当然壊れる。教室の扉は怨霊が開けられない。故に教室は安全だったのにそれがなくなれば廊下と教室の境界が無くなるということつまり怨霊が教室に入って来れる？

西野「こぉぉぉんのおバカァァァァ!!!」

安藤「げふぁるとっ!!!」

私は怒りのあまり安藤くんに全力の右ストレートをお見舞いした。後ろから3バカの内の誰かが『ダァーイ』とか言ってたけどそれはお兄さんの方であり父の方だ。右ストレートだからどちらかと言ったらその息子の方の『ブラスト』の方だろとかそんなツッコミは今はどうでもいい。それよりも今はこのバカだ。私は安藤くんの胸倉を掴んだ。

西野「ねぇ？何で今殴った？いや、内田がいたから殴ったのはわかるよ？何で扉越しに殴った？殴ったら扉壊れんのわかんだろ常識的に考えてＪＫ」

安藤「内田倒せたんだからいいだろ」

西野「良くねぇよ!!扉壊したってことは私たちの唯一の守りが無くなったってことだよ!?Ｄｏ ｙｏｕ ｕｎｄｅｒｓｔａｎｄ!?」

安藤「なら全部の扉壊せば怨霊たちも『アレ？最初からこんなもんじゃね？』ってなるんじゃないか？」
西野「なるわけねぇだろ!?アホか！いや、バカか！3バカに加入させてバカ四天王にするぞ！」
セシリア「残念ながら輝さんが既にいるのでその場合はバカレンジャーの方になりますわ」
あっ、その人もそっち側なんだ。ところでその本人はさっきから何してんの？
セシリア「扉が壊されたので修理ついでに自動ドアを付けようとしているところですわ」
おいおい、自動にしないでよ。修理しても怨霊が扉の前に立った瞬間開いて終わりじゃん。
シャル「てか、センサーって怨霊に反応するの？」
するんじゃない？これ書いてる奴は中学生の頃通ってた塾の自動ドアにガン無視されたことあるけど。・・・何言ってんだ私。
？「ここの中から声が、えっ!?自動ドア!?こんな造りの校舎で!?ってあれ？あなたは西野さん？」
突然自動ドアが開いたから私が警戒すると（そう私『だけ』だ。他の人たちは見向きもしないし安藤は何故か気絶している。きっと木島さんか内田にやられたんだろう。絶対許さなえ。）よく知る人物が入ってきた。
西野「会長!!」
我らが生徒会長【小林みづほ】だ。私のクラスメイトでもある。みづほちゃんに話しを聞くとカロリーメイトじゃない、クラスメイトであり親友の三倉さちが学校のチャイムを何故か過剰に怖がり学校にも来ていなかったのでプリントを届けに行ったら急に『調べてほしいところがあるの。一緒に学校行こうぜ！』と言われいつもと明らかに違う奇妙なさちに疑問を抱きつつも学校へ行き気づいたらここにいたらしい。
西野「ねぇ、セシリアさん。」
セシリア「何でしょうか、西野さん。」

今の話しを聞いてできた自分の予想を伝えるために今いる中で【唯一】（↑ここ重要）の常識人であるセシリアに話しかけた。
西野「その三倉さんって十中八九」
セシリア「ええ、間違いなく死季子さんですわ」
やっぱりか～。できれば外れていてほしかった。
みづほ「死季子さん？」
西野「ああ説明してなかったね。死季子さんってのは」
そうして私はみづほちゃんに今の状況やわかっていること、あのクソ塗り壁は悪だってこと、セシリアさんたちのことを話した。
十数分後
みづほ「なるほど。それでそっちでレジャーシート広げてランチタイムに勤しもうとしている人たちがさっき言ってた人？」
は？レジャーシート？ランチタイム？こんないつ怨霊に襲われるかわからない状況でピクニックするような頭ん中お花畑な奴いないだろ・・・っと思ってみづほちゃんが見ている方を見るといたわ。レジャーシート広げて各々持参したらしいお弁当を広げているバカたちが。
西野「おいお前ら、何してんの？」
シャル「いや～、さっき気づいたんだけど私たちここに来て結構経つじゃん。」
そうだね。私やそこの屍一歩手前（安藤くん）と他の人とでどのくらい来てからの差があるかわからないけどそれでも結構経つね。
シャル「その間ふざけてたってのもあって何も食べてないじゃん？」
まぁ、そもそも食べ物持ってないし怨霊に追われてたから当然だけどそれよりも今『ふざけてた』って認めたね？
シャル「・・・ね？」
西野「ね？じゃねぇよ。未だに廊下を怨霊供が徘徊してんだよ？いつ襲われるかもわからないのに『友達になろ～』うっさい、今説教だから後にしろ。」
私がバカどもを説教してる時に木島さんが後ろから襲ってきたか

らとりあえず顔面にエルボーを叩きこんで黙らせた。
西野「それにこんな不気味なところで食欲なんかわかんわ。」
みづほ「待って？普通に何も無かったかのように説教続けないで？今怨霊にエルボー決めたよね？しかも見ないで。」
西野「えっ？ああ、キメたけどそれが？」
みづほ「いや、それがって・・・。普通怨霊に触れないしその怨霊に見ないでエルボーキメたしそれに動じてないしと色々ツッコミたいんだけど。」
西野「そのことね、良い？みづほちゃん。確かにこの人たちは強いけど2人（セシリアと鈴）を除いて中身がアレだから自分の身は自分で守らないと。それに怨霊如きで一々慌ててたら1分と経たずにこいつらに殺されるよ。（精神やＳＡＮ値的なモノが）」
ラウラ「セシリアよ。今のは褒め言葉ととっていいのか？」
セシリア「いえ、バカにされてますわ。それももの凄い勢いで。」
ラウラ「なんだと!!」
自分で気づけない時点で否定できないだろ？
みづほ「少し見ないうちに西野さんが人間やめた件。」
私がいつ人間やめたって？私全然普通のか弱い女子校生だぞ？まぁ、今なら名もなきファラオの最強の僕の黒き魔術師にも勝てそうな気はするけど。
西野「それよりも親友の三倉さんの様子が明らかに違うってどんな感じに？」
みづほ「なんか雰囲気というかオーラみたいなのが禍々しかったし終始目の焦点があってなかった。」
西野「いやいや、それ明らかにアウトでしょ。気付こうよ、何でそれなのに着いて来たのさ。」
みづほ「だって雰囲気はともかく目に関しては普段からそんなだし」
待って？普段からそんなって普段から目の焦点合ってないの？三倉さん。それ人間やめてるよね？
するといきなり教室のドアが開いた。

さち「待ってよみっちゃん。目の焦点が合ってないのは甘いもの食べてる時だけだよ!!人を普段から目の焦点が合ってないヤバい人みたいに言わないでよ!!」

甘いもの食べてる時は焦点合ってないんかい。その時点でアウトだよ?今入って来たのは三倉さち、私の親友だ。そして登場1発目のセリフがそれで良いのか?ってか原作メンバー揃ったよ。ぶっちゃけ飽きてきたからって急展開すぎだろ狐め。

エピローグ　Ｗｏｒｓｔ　ＥＮＤ？

西野ｓｉｄｅ

さて、バカ共がランチも終えたことだしこの世界脱出に向けてラストスパートかけますか。ただランチと言ってまさかカレーを作るとは思わなかった。どこから一式出したし。

西野「さて皆さんこれからこの世界を脱出するのに向けてラストスパートをかけるわけですが」

さち「先生～、安藤くんが寝てま～す。」

おいおい、まだ寝てたのか？全く世話のかかるやつだ。まぁ、こんな状況なんだ。精神的に疲れたんだろう。（↑さっきしばいたせい）

西野「ほら、とっとと起きろ。」

ドスッ（↑安藤くんの脇腹を蹴る音）

安藤「はっ！ここはどこ？俺は誰？」

簪「ここは異世界。そしてあなたはこの異世界で悪事をはたらく魔王村岡死季子を倒すために召喚された勇者。」

ちょっと変なこと教えるのやめてよ簪ちゃん。脳筋にアホの子属性がついちゃうじゃん。アホの子属性が許されるのは青い髪の子だけだぞ？

楯無「それなら私もアホの子ということかしら？」

西野「いや、あなたのことを言ったわけでは。」

秋斗「ちょっと黙っててください。今回俺たちがここにいる元凶」

あっ、この人が元凶なの？ならアホの子確定だ。

西野「え～、まだ常識という宝具レベルで素晴らしいモノをお持ちの皆さん。バカレンジャーに任せると何が起こるかわからない上にそっちの心配のせいで禿げそうなので自分の身は自分で守ってください。とりあえずの目標は『今持ってる常識を捨てぬまま現実世界帰ろう』です。では気合い入れて行きましょう！」

「は～い。」（セシリア・鈴・みづほ・さち）

うむ、良い返事だ。

ラウラ「シャルよ、今度こそ褒め言葉ととって良いのだな？」
シャル「ううん、バカにされてるね。それもフリーザ様やブロリー相手に地球を守るために戦う悟空レベルに全力で。」
ラウラ「なんだとっ!!」
いや、もうお前ホント黙ってろ。
それと白銀が巨大死季子さんを見つけるなり「良いこと思いついた。」と言ってどこか行った。やべぇ、嫌な予感しかしねぇ。

そしてなんやかんやあって今私たちは実は全ての元凶だった村岡四季子と向かいあっていた。えっ？そのなんやかんやの間に何があったか書かないのはなんでかって？そんなのこれ書いてる奴が飽きてきたからに決まってんだろ。展開知りたかったら某動画サイトで実況動画を見てくるといい。そしていつの間にか白銀が合流していた。というかその隣りのこの世界の水みたいな青い色の髪をした女は誰だ？私がそんなことを考えていると女性は自分の右手の親指の付け根あたりを噛んだ。すると突然橙色に近い色をした稲妻や大量の蒸気が出たと思うとさっきまで女性がいたところには巨大死季子さんがいた。
・・・・・・いやいや、進撃〇巨人かよ。
そしてその巨人化（？）した死季子さんは村岡四季子を掴むとプールの闇に消えていった。
そして私たちは急に意識が無くなった。

目を覚ますとそこはいつもの私たちの学校だった。ちゃんと小林さんたちもいた。セシリアさんたちがいないことからあの人たちも自分の世界に帰れたのだと思う。そしてみんなが起きるのを待って解散した。
西野ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

小林ｓｉｄｅ

それから数日がたちみんなようやく落ち着いてきた。でも、さっちゃんは違った。テストで学年1位になったり人の名前を覚えられる様になっていた。あの事件以降人が変わった様だった。まるで『別人』の様な。

そして真相を確かめる為にさっちゃんに会いに行くことにした。

だがそこでまた異変が起きた。

廊下をいくら進んでも階段に着かない。まるで『あの時』の様だ。そして何回目かで漸く屋上へ続く階段に着いた。そして私はそれを登った。

扉を開けると空は夕暮れ時特有の橙色をしていた。そしてその下に広がる屋上に人がいた。さっちゃんだ。

みづほ「あなたは誰?さっちゃんじゃないでしょ?」

さち?「何言ってるの?私は三倉さちだよ?」

そんな言葉に私は騙されない。あの長い廊下、あれを作れるのは奴しかいない。

みづほ「ふざけないで!あなたはさっちゃんじゃない!そうでしょ?『村岡四季子』!!さっちゃんはどこ!?」

そう言うとさっちゃん・・・いや、村岡四季子はニヤッと笑った。

塗り壁「闇の中。私は『4と死』を入れ替えた様にあるものの意味を入れ替えたの。三倉さちが闇サイトに書き込む際のイニシャル『S・M』を『S・M(さちみくら)』と『S・M(しきこむらおか)』にね。」

みづほ「そんな!?さっちゃんを返して!?」

塗り壁「ならこれを通って行けばいい」

村岡四季子の後ろには闇の木造校舎の扉があった。これを通ればまた向こうに行ける。さっちゃんを助けられる!!

みづほ「待っててね、さっちゃん!!」

私は扉の中に入って行った。

塗り壁「馬鹿な子。闇の木造校舎は死季子が地獄に堕ちたことで消滅した。私と入れ替わった三倉さちも死季子さんが連れて行ったからあの空間にはいない。小林みづほ、あなたは何もないあの空間で1人で死ぬといい。」

扉を通った先は暗闇と見覚えのある青い水だけだった。辺りが暗闇の為不安になっていると突然何かが光った。それに近づくとそこにはスマートフォンが落ちていた。

みづほ「そうだ！これを使って助けを呼べば！」

そう思い三倉さちが村岡四季子と入れ替わっていること、闇の木造校舎のことなどをうって掲示板に書き込もうとした。その時

『予期せぬエラーが発生しました』

そんな文字が現れ次はバッテリー低下を知らせる画面が出てきてやがて画面が消えた。そのことが何を表すかを私はすぐに察した。

みづほ「・・・・・・うぅ・・・あ・・・ぁ・・・あ・・・ぁぁ・・・・・・!!!!」

私は文字通りこの空間から脱出する術を失った。

エピローグ　Ｈａｐｐｙ　ｅｎｄ

小林ｓｉｄｅ

あれからどのくらい時間が経っただろう。数時間は経っただろうか。下手すると数日かもしれないし実はまだ数分しか経っていないのかもしれない。暗闇と青い水しか無い空間にずっといるせいで時間がわからなくなってきた。私はしばらく座っていたけどその体力も気力も無くなりうつ伏せの状態になっていた。

やがて本当に限界を迎えたのか瞼が重くなってきた。いくら抗おうともその抵抗は意味をなさずそのことから『私はもうダメなのか』と悟り諦めて完全に目を閉じた。その時だった。

暗闇と青い水しか無かった空間に謎の縦に伸びる線が現れたと思うとその線が左右に開いた。その中には何かの目の様なモノが無数にあった。うつ伏せのまま頭だけその何かに向けてそれを見ているとその裂け目から何かが出てきた。どこかの学校のブレザーを着てその下にパーカーを着て腰に刀を付けた白い髪の１０歳行くかどうかぐらいの少年がいた。

？「やっと着いた～。え～と、あなたが」

少年がそう言いながら裂け目から出ようとしたが

？「へみゅっ!!」

裂け目につまづき思いっきり転んだ。

？「大丈夫ですか!?」

その後から薄いピンク色の長い髪に桜色の着物を着た女性が出てきた。

少年介抱中

？「え～と、お姉さんが小林さ○子さんで合ってる？」

みづほ「うん、違うね。私は少し前まで年末恒例の歌合戦でラスボス感出す人じゃないね。」

？「あれ、１回使った後どうしてんだろ？」

いや、知らないよ。
？「とりあえずお姉さんを治療したいけど僕はそういうのできないからな～。どしよ」
そして少し考えて「そうだ！」っと何か方法を思いついたのか裂け目に向かって言った。
？「助けてえーーーりーーーーーん!!」
いや何それ？っと思ったが裂け目から何か注射器の様なモノが出てきた。少年は首を傾げながら私にそれを刺して中の液体を注入した。うん、ちょっと待って？よくわからないモノを人に注入しないで？
すると私は何かパワーがみなぎってくるのを感じた。さっきまでのダルさやらはなく絶好調以上だ。現にこんな暗闇の中だというのに辺りがよく見える。本当に何もないけど。
？「今の注射器どこ製ですか？」
？「永遠亭！」
？「彼女に何かあったらどうするんですか!?」
とりあえず薬の正体を調べることにした。と思ったら手首から白い糸の様なモノが出てきた。
？「完全にスパイダーなあれじゃないですか!?どうするんですかってダメだ!?この子目を凄く輝かせてる!!」
ほんとどうしてくれるんですか。「親愛なる隣人」を目指さないといけなくなるじゃないですか。
？「とりあえずここから出ましょう。」
みづほ「出られるんですか!?」
？「ええ、この裂け目を通れば。ただし中では絶対私について来てください。くれぐれもこの子に付いていかないように。絶対迷子になります。」
そして私たちはその裂け目に入って行った。

裂け目の中を少し歩くと出口のようなモノがありそれを通るとそこにはかつていた学校の屋上とこちら見て驚く村岡四季子がいた。
塗り壁「あなたはあの空間に行ったはず!!一体どうやって!?」
？「それは僕が助けたからだよ？」
私の後からさっきの少年が出てきた。
塗り壁「何者だ！お前は！」
？「名乗るほどでもないよ。強いて言うなら君を迎えに来た『冥界の使い』さ。」
塗り壁「冥界の使いがどうして!?」
？「わからない？君は地獄を欺いた。だから閻魔様が激おこスティックファイナリアリティぷんぷんドリームなんだ。それで僕に頼んできた訳。因みに君が今から行くのは地獄じゃないよ。地獄を欺いた君には地獄なんて生温い。君が行くのは『冥界』だよ。

断命剣『冥想斬』!!」
村岡四季子は斬られ消えて行った。
？「安心して、『イクラさち』さんだっけ？の魂はちゃんと身体に戻ったから明日には普通に生活できるよ。」
それは本当にありがとうだけど『イクラさち』じゃなくて『三倉さち』だからね？確かにイクラは海の幸だけどさ。

翌日の昼休み、私は無事に身体に戻れて登校してきたさっちゃんとお昼を食べていた。フルーツサンドを食べながら相変わらず目の焦点が合ってない親友の姿を見てようやくすべて終わったのだと安心したのだった。

小林ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

輝ｓｉｄｅ

俺が藍越じゃなかった、ＩＳ学園だ。ほんとややこしいな。ＩＳ学園の屋上にいるとスマホに電話がかかってきた。
輝「お前が連絡をよこすってことは終わったか」
？『うん。ちゃんと魂を身体に戻せたし罪人の魂も連れて行けたよ。あの程度の力しか持たないモノが行ったら長くは保たないよ。たぶん今ごろ消滅してんじゃない？』
輝「そうか。力を貸してくれてありがとな。」
？『いいよ。とりあえず報酬の』
輝「あぁ、パフェだろ？今度機会があれば」
？『いつもの口座に』
輝「ぶち込めと」
なんでＡＴＭの紙幣投入口をクリーム塗れにしなきゃいけないんだよ。
？『なんてね、３割冗談だよ。』
ヤベェこいつ。半分以上本気だ。
？『それで四季ちゃんから伝言預かってるんだった。』
ちょっと待て。四季ちゃんって誰だ？
？『？あ～、ゴメンゴメン。つい普通の名前で呼んじゃった。もっとメジャーな方で言うと

閻魔様からの伝言。』
閻魔様ってあの閻魔大王か!?って待て。さっきその閻魔様をちゃん付けで呼んだってことは閻魔様女なのか!?
？『そうだよ～、っで彼女から君に関わる伝言

【あるモノが地獄から逃げ出した】だって。』

あるモノ？誰だ？何か特徴はあるか？
？『なんか「自分は転生者だ！」とか「僕は主人公だぞ！」とかずっと言ってたよ。それと自分を【織斑一夏】って名乗ってたよ？』

織斑一夏!?バカな!?あの転生者は女神にもらったモノで地獄に送ったはず!?それにあの男の力程度では地獄からは絶対に逃げ出せないはず!?何者かが手引きした?まぁ、この件はセシリアたちと相談が必要だな。

輝「伝言ありがとう。四季とやらにも伝えといてくれ。」

?『わかった、伝えておくよ。ところで質問なんだけど

ここどこ?』

こいつまた迷子になってやがった!!こいつの方向音痴レベルは常軌を逸してるからどこにいるのか予想すらできねぇ!!

輝「周りに何か手がかり的なモノはないか!?」

?『ちょっと待って・・・、近くにいた人に聞いたらここは【ウルル】って名前なんだって。』

ウルル・・・エアーズロックの正式名称。所在地

輝「オーストラリアじゃねぇか!!」

こいつが長年修行してた師匠の家ですらねぇのかよ!!

輝「今すぐお前の姉に連絡すっからお前は絶対そこから動くなよ!?」

『ニーハオ』

輝「今中国語聞こえたぞ!?動くなっつったのになんで中国いんだよ!?今度こそ絶対動くなよ!?」

その後無事にマダガスカル島で姉と再会できたらしい。

私とレゾナンスの危険な日

五反田蘭ｓｉｄｅ

私は休日を利用して友達と近所の商業施設に【レゾナンス】に服や雑貨などを買いに来ていた。そして午後の２時頃になりお腹も空いたということで少し遅めのお昼として喫茶店に入った。そして食べている時に事件が起きた。

テ「全員動くんじゃねぇ!!大人しく両手を上げて言う通りにしやがれ!!」

突然、銃を持った奴らが店に入って来た。最近世界中で多くなっている女尊男卑に対するテロリストというやつだろう。当然私たちは何もできないので言う通りに店内の隅に集められた。だが、１人だけ違う行動をとる人物がいた。

テ１「おい！お前も早くしやがれ！」

とあるテーブルで白い髪に白いコート、白いズボンという全身白一色の男が足を組んで座り英字の新聞を片手に両目を閉じ右手に持ったコーヒーカップの飲み物を静かに飲んでいた。テロリストの１人が男の正面からハンドガンを突きつけた。男は左目を開け正面のテロリストを少し見ると両手を軽く上げつつ溜息を吐いた。

男「はぁ、ここは大人子供じいさんばあさん男女性別問わず楽しむ為の施設だぞ？そんな場所を狙っては意味がないと思うがね。君たちはテロリスト、少なくとも主張や訴えたいことがあるから行動に出たのだろう？その主張がどれほど真っ当なモノだとしてもこんな場所を、ましてや一般人を巻き込んでしまっては君たちの主張はただの【犯罪者の戯言】にしかならないよ。それに今日はこんなに晴れていて気持ちいい休日だ。そんな日ぐらいティータイムを楽しませてくれないかね。」

いや、ティータイムって。私の実家定食屋で鼻も良いからわかるけどあなたが飲んでるのティーじゃなくてココアじゃん。

男「それに君たちも少しでも【裏社会】に関わる者なら俺の格好を

見て【君たちでは相手にならない】と予め悟って欲しいんだがね。」
テ1「さっきからごちゃごちゃうるせー！黙って死んどけ!!」
そう言ってテロリストが引き金を引こうとするが男がそれよりも早くテーブルの上の新聞にいつの間にか挟んであったハンドガンを右手で取りテロリストの肩を撃った。そのまま銃声を聞きつけて店の奥から出てきたテロリストの仲間にハンドガンを振り払うように投げつけた。そして先ほど撃ったテロリストの持っていたハンドガンが飛んできたので男はそれを左手で取り先ほど投げつけて怯んだテロリストの肩を撃ちさらに出てきた仲間の肩も撃った。
テ「動くんじゃねえ!!」
テロリストの声がして男が声のした方向に銃を向けながら振り返るとそこにはわたしの左肩を後ろから掴んでまるで盾の様に捕まえ私の右肩の辺りでマシンガンを構えるテロリストがいた。
テ「おっと撃てるものなら撃ってみろよ。お前にこのガキごと撃てんならな。それの俺の後ろは窓ガラス1枚と外は人がたくさんいる。おれを撃ったところでこの距離なら貫通して外の奴らも怪我するぜ？」
そう、私たちの後ろは窓ガラス1枚しかない。その向こうには野次馬がたくさんいる。仮にテロリストを撃てば銃弾はテロリストを貫通し窓ガラスに当たり割れ野次馬に被害が出るだろう。
そこで私は後ろのことは男の人がなんとかしてくれると信じ私は私の出来ることをした。
運が良かったのか悪かったのか私の状況は少し前に家で兄が見ていた海外ドラマのワンシーンにそっくりだった。だからこそ私はそれと同じ行動をとった。
私は自身の右肩付近にあるマシンガンのマガジンを掴み前へ倒れ込む様にしゃがんだ。そしてしゃがんだ直後に男の方を見ると男は一瞬目を見開いて少し口角上げて笑い銃をテロリストに向けたまま持っていない左手を銃の前に持っていき手の甲で銃口を塞ぐ様に構えた。そして引き金を引き男の左手を貫通しながらテロリストの右肩に命中し、銃弾それ以上貫通することはなかった。そしてテロリス

トは後ろに倒れた。
テ「まさか自分の手をクッションにして威力を殺して俺を貫通しない様にするとはな・・・。」
男「まぁな、それで誰も怪我をしないで済むなら安いものさ。ただ1つ聞いていいか？」
テ「なんだ？」
男「何故テロなんて起こした？何が目的なんだ？」
テ「目的か・・・。俺は元警官でな。中学の頃から一緒にいた親友も俺と同じ時期に警官になってな。あいつと一緒にいると楽しかった。殺人事件ばっかりで精神的にやられそうだった時もそいつのおかげでなんとか乗り切れた。ホントに楽しかったさ。でも『白騎士事件』、そして『ＩＳの誕生』が全てを変えちまった。ある日親友と俺が電車に乗ってたら女性が痴漢に遭っててな。親友が痴漢の犯人を捕まえたらその痴漢にあってた女性が『親友にやられた』なんて言い出してない。親友は捕まって裁判にもなって俺が必死になって証人だったり証拠だったりを集めて『これで裁判に勝てる！無実を証明できる！』って務所にいる親友に報告に行ったらもう全て無駄になってた。務所の中で自殺したらしい。その後わかったんだがその被害者の女性は痴漢のでっち上げの常習犯らしくてな。それで裁判で多額の慰謝料をふんだくるってのがお決まりの手口だったんだ。それでわかったんだ。『こんな世界だから親友が死んだんだ。女尊男卑の社会が親友を殺したんだ』ってな。だからせめて『俺や親友みたいな奴がこれ以上増えない為に世界を変えたかったんだ。』」
テロリストは泣きながら話した。
男「そうか、事情はわかった。お前たちが今回やったことは紛れも無いテロ行為だ。許されることじゃない。当然捕まるし、有罪で務所行きは免れない。」
テ「ああ、わかってる。「だがな？」えっ？」
男「お前の目的は、言ってることは間違ってはいないと俺は思う。ただ、やり方が間違っていただけだ。だから」
そして男が言葉を一度区切ると倒れているテロリストに右手を伸

ばした。
男「務所を出たら『白夜の黒十字』に来い。一緒に世界を変えよう。」
テ「良いのか？俺はテロリストだぞ？」
男「何言ってんだ。お前のやり方は間違ってた。でも『世界を変えたい。』って気持ちは本物なんだろう？なら悪者でも悪でもない。もしお前みたいなのが悪だと世界が言うなら『俺も喜んで悪者になってやるよ。こんな腐った世界で正義の味方するくらいなら悪者になって世界に喧嘩売ってやる。』だから俺たちの所に来い。」
そしてテロリストは「ありがとう」と泣きながら男に言いその場の人たちにも謝ってから駆けつけた警察に連れてかれた。
それを見送った後男を探すとどこにもいなかった。まだ近くにいると思い慌てて店を出た。
すると
男「痛って～、やっぱ手越しに撃つもんじゃねぇな。」
店を出てすぐのところで左手を抑えたまましゃがみ込んでいた。
私「えっと・・・、大丈夫ですか？」
私が話しかけると男は振り返った。
男「怪我の心配してくれたのか？ありがとうな。でも大丈夫、ただのかすり傷だ。」
いや、思いっきり銃弾貫通してましたよね。
男「すぐに治るさ。ほらな？」
男がそう言って左手を見せると少し蒸気の様なモノを出しながら確かにほとんど治っていた。
男「それにしても君はすごいな。君のおかげで助かったよ。」
男が笑顔で私の頭を撫でた。凄く温かい。
私「また会えますか？」
男「ああ、きっと会えるさ。君が本当に会いたいと思えばいずれな。」
そう言って立ち上がり「じゃあな。」っと言って去っていった。